松山市文化財調査報告書123

市道道後42・43号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

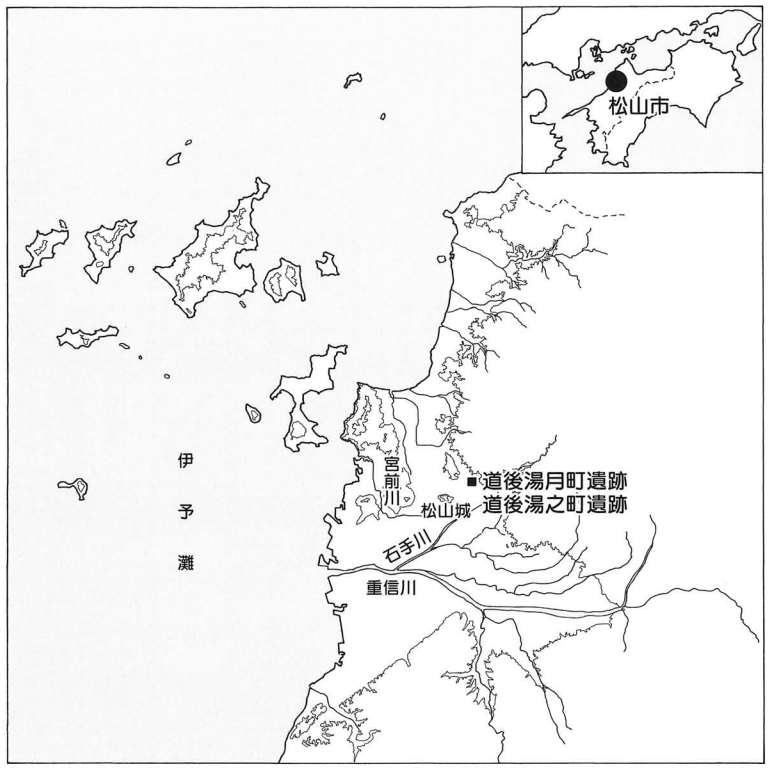
道後湯月町遺跡
道後湯之町遺跡

2008

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

市道道後42・43号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

道後湯月町遺跡
道後湯之町遺跡



2008

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　道後湯月町遺跡全景（東より）

序

本書は、平成16年度と17年度に実施しました松山市道『道後42・43号線』道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

松山城から道後温泉に至る道後城北地区は、弥生時代における松山平野の拠点的集落であったことが、近年の調査・研究の結果、明らかになってきました。今回報告します道後湯月町遺跡、道後湯之町遺跡は道後城北地区の東に位置し、丘陵部と平地部とで形成された地域に所在します。

道後湯月町遺跡では、平安時代から室町時代にかけての池址の一部や、江戸時代の埋甕遺構が発見され、道後温泉周辺の様相が明らかになりました。一方、道後湯之町遺跡からは古墳時代の土坑や、中世の溝が発見され、道後地区における当時の集落様相や生活の様子を解明する貴重な手がかりを得ることができました。

このような成果をあげられましたのも、関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜であり、厚く感謝申し上げます。

本書が埋蔵文化財研究の一助となり、さらには文化財保護ならびに生涯教育の向上に寄与できますことを切に願っております。

平成20年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　　中　村　時　広

例　言

1．本書は、松山市教育委員会･財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成17年２月～平成17年７月に実施した松山市道道後42・43号線道路改良工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書報告の遺構は、呼称名を略号で記述した。溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、池状遺構：池址である。
3．本書で使用した標高数値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。
4．遺構の測量は、宮内慎一の指示のもと、相原秀仁が中心におこなった。
5．遺物の実測･製図、遺構の作図・製図は、担当調査員の指示のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、本多智絵、平岡華美、岡崎政信、山邊進也がおこなった。
6．写真図版は、遺構の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西がおこなった。
7．本書報告の遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
8．本書掲載の遺物実測図のうち、木器及び木製品の状態はアミガケの度合い・斜線により表している（欠損：アミ20%、腐朽：アミ30%、焼けこげ：アミ50%、炭化した表皮：斜線）。
9．自然科学分析では、株式会社古環境研究所に業務委託し、国土座標軸測量は国際航業株式会社に業務委託した。
10．調査及び報告書作成においては、愛媛県埋蔵文化財調査センター中野良一氏、松山市教育委員会文化財課栗田正芳氏にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。
11．本書の執筆は宮内・相原がおこなった。編集は宮内が担当し、水口、山下の協力を得た。浄書は宮内の指導のもと、平岡が担当した。
12．本書にかかわる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに ……〔宮内〕…… 1

１．調査に至る経緯　２．刊行組織　３．環境　４．調査の概要

第２章　道後湯月町遺跡……〔相原〕…… 7

１．調査の経緯　２．層位　３．遺構と遺物　４．小結

第３章　道後湯之町遺跡……〔相原〕…… 63

１．調査の経緯　２．層位　３．遺構と遺物　４．小結

第４章　自然科学分析 ……〔株式会社　古環境研究所〕…… 85

Ⅰ．蛍光Ｘ線分析
Ⅱ．道後湯月町遺跡における珪藻分析
Ⅲ．道後湯月町遺跡における寄生虫卵分析

第５章　調査の成果と課題 ……〔宮内〕…… 93

挿　図　目　次

第１章　はじめに
第 1 図　調査地位置図（縮尺１／1,500）…… 3
第 2 図　遺跡分布図（縮尺１／25,000）…… 5
第２章　道後湯月町遺跡
第 3 図　遺構配置図・土層図（縮尺１／80）…… 9
第 4 図　池址１出土遺物実測図（１）（縮尺１／３）…… 12
第 5 図　池址１出土遺物実測図（２）（縮尺１／３）…… 13
第 6 図　池址１出土遺物実測図（３）（縮尺１／３）…… 14
第 7 図　池址２出土遺物実測図（１）（縮尺１／３）…… 16
第 8 図　池址２出土遺物実測図（２）（縮尺１／３）…… 17
第 9 図　池址２出土遺物実測図（３）（縮尺１／３）…… 18
第 10 図　池址２出土遺物実測図（４）（縮尺１／３）…… 19
第 11 図　池址２出土遺物実測図（５）（縮尺１／３）…… 20
第 12 図　池址２出土遺物実測図（６）（縮尺１／３）…… 21
第 13 図　池址３出土遺物実測図（１）（縮尺１／３）…… 23
第 14 図　池址３出土遺物実測図（２）（縮尺１／１・１／３）…… 24
第 15 図　池址３出土遺物実測図（３）（縮尺１／３）…… 25
第 16 図　池址３出土遺物実測図（４）（縮尺１／３）…… 27

第 17 図　池址 3 出土遺物実測図（5）（縮尺 1 ／ 3）…… 28
第 18 図　池址 3 出土遺物実測図（6）（縮尺 1 ／ 3）…… 29
第 19 図　池址 3 出土遺物実測図（7）（縮尺 1 ／ 3）…… 30
第 20 図　池址 3 出土遺物実測図（8）（縮尺 1 ／ 3）…… 31
第 21 図　池址 3 出土遺物実測図（9）（縮尺 1 ／ 3）…… 32
第 22 図　池址 3 出土遺物実測図（10）（縮尺 1 ／ 3）…… 33
第 23 図　池址 3 出土遺物実測図（11）（縮尺 1 ／ 1 ・ 1 ／ 3）…… 34
第 24 図　ＳＫ１測量図（縮尺 1 ／20）…… 35
第 25 図　ＳＫ１出土遺物実測図（1）（縮尺 1 ／ 4）…… 36
第 26 図　ＳＫ１出土遺物実測図（2）（縮尺 1 ／ 3）…… 37
第 27 図　第Ⅵ層出土遺物実測図（縮尺 1 ／ 3）…… 38
第 28 図　トレンチ出土遺物実測図（1）（縮尺 1 ／ 3）…… 40
第 29 図　トレンチ出土遺物実測図（2）（縮尺 1 ／ 3）…… 41
第 30 図　トレンチ出土遺物実測図（3）（縮尺 1 ／ 3）…… 42
第 31 図　トレンチ出土遺物実測図（4）（縮尺 1 ／ 3）…… 43
第 32 図　トレンチ出土遺物実測図（5）（縮尺 1 ／ 3）…… 44
第 33 図　トレンチ出土遺物実測図（6）（縮尺 1 ／ 3）…… 45
第 3 章　道後湯之町遺跡
第 34 図　調査地位置図（縮尺 1 ／300）…… 65
第 35 図　1 区遺構配置図・土層図（縮尺 1 ／80）…… 66
第 36 図　2 区遺構配置図・土層図（縮尺 1 ／80）…… 67
第 37 図　3 区遺構配置図・土層図（縮尺 1 ／80）…… 68
第 38 図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図（縮尺 1 ／30・ 1 ／ 3）… 69
第 39 図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺 1 ／30・ 1 ／ 3）… 70
第 40 図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺 1 ／30・ 1 ／ 3）… 72
第 41 図　ＳＤ２測量図・出土遺物実測図（縮尺 1 ／30・ 1 ／ 3）… 73
第 42 図　ＳＲ１断面図（縮尺 1 ／80）…… 74
第 43 図　ＳＲ１出土遺物実測図（1）（縮尺 1 ／ 3）…… 75
第 44 図　ＳＲ１出土遺物実測図（2）（縮尺 1 ／ 3）…… 76
第 45 図　ＳＲ１出土遺物実測図（3）（縮尺 1 ／ 3）…… 77
第 46 図　包含層出土遺物実測図（1）（縮尺 1 ／ 3）…… 78
第 47 図　包含層出土遺物実測図（2）（縮尺 1 ／ 3）…… 79
第 48 図　地点不明出土遺物実測図（縮尺 1 ／ 1 ・ 1 ／ 3）…… 80

表 目 次

第１章　はじめに
表 1　調査地一覧 …… 6
第２章　道後湯月町遺跡
表 2　池址１出土遺物観察表（土製品） …… 47
表 3　池址１出土遺物観察表（木製品） …… 48
表 4　池址２（③層）出土遺物観察表（土製品）
表 5　池址２（④層）出土遺物観察表（土製品） …… 51
表 6　池址３（⑥層）出土遺物観察表（土製品） …… 52
表 7　池址３（⑥層）出土遺物観察表（金属製品）
表 8　池址３（⑦層）出土遺物観察表（土製品） …… 53
表 9　池址３（⑦層）出土遺物観察表（石製品）
表 10　池址３（⑧層）出土遺物観察表（土製品）
表 11　池址３（土器だまり①）出土遺物観察表（土製品） …… 54
表 12　池址３（土器だまり②）出土遺物観察表（土製品）
表 13　池址３（土器だまり②）出土遺物観察表（石製品） …… 56
表 14　池址３（土器だまり③）出土遺物観察表（土製品）
表 15　池址３（土器だまり③）出土遺物観察表（石製品） …… 57
表 16　池址３（土器だまり④）出土遺物観察表（土製品）
表 17　池址３（土器だまり④）出土遺物観察表（金属製品）
表 18　池址３（土器だまり④）出土遺物観察表（銭貨）
表 19　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）
表 20　ＳＫ１出土遺物観察表（木製品） …… 58
表 21　第Ⅵ層出土遺物観察表（土製品）
表 22　第Ⅵ層出土遺物観察表（石製品）
表 23　第Ⅵ層出土遺物観察表（木製品）
表 24　トレンチ出土遺物観察表（土製品）
表 25　トレンチ出土遺物観察表（石製品） …… 61
第３章　道後湯之町遺跡
表 26　ＳＤ３出土遺物観察表（土製品） …… 82
表 27　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）
表 28　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）
表 29　ＳＤ２出土遺物観察表（土製品）
表 30　ＳＲ１出土遺物観察表（土製品）
表 31　ＳＲ１出土遺物観察表（木製品）
表 32　包含層出土遺物観察表（土製品） …… 83
表 33　包含層出土遺物観察表（石製品）

表 34　地点不明出土遺物観察表（土製品）…… 83
表 35　地点不明出土遺物観察表（石製品）…… 84
表 36　地点不明出土遺物観察表（銭貨）
第 4 章　自然科学分析
表 37　道後湯月町遺跡における蛍光Ｘ線分析結果（１）…… 86
表 38　道後湯月町遺跡における蛍光Ｘ線分析結果（２）…… 87
表 39　道後湯之町遺跡における蛍光Ｘ線分析結果
表 40　道後湯月町遺跡における主要珪藻ダイアグラム …… 90
表 41　道後湯月町遺跡における寄生虫卵分析結果 …… 92

写真図版目次

巻頭図版１　道後湯月町遺跡全景（東より）
第 2 章　道後湯月町遺跡
図版１　１．調査前遠景（南東より）　２．調査後近景（南東より）
図版２　１．東壁土層（西より）　２．完掘状況（南東より）
図版３　１．池址１検出状況（東より）　２．池址２検出状況（南東より）
図版４　１．池址３遺物出土状況①（北東より）　２．池址３遺物出土状況②（北より）
図版５　１．池址３検出状況（南東より）　２．池址４検出状況（東より）
図版６　１．ＳＫ１検出状況（西より）　２．ＳＫ１半截状況（北西より）
図版７　１．第Ⅵ層遺物出土状況（南より）　２．現地説明会風景（南西より）
図版８　１．池址１出土遺物
図版９　１．池址２出土遺物(１)
図版10　１．池址２(２)・池址３(１)出土遺物
図版11　１．池址３出土遺物(２)
図版12　１．池址３出土遺物(３)
図版13　１．池址３(４)・ＳＫ１出土遺物
図版14　１．トレンチ出土遺物
第 3 章　道後湯之町遺跡
図版15　１．調査前全景（南西より）　２．２区・３区検出状況（西より）
図版16　１．１区検出状況（北西より）　２．１区西壁土層（南東より）
図版17　１．２Ｂ区完掘状況（南東より）　２．２Ｂ区西壁土層（東より）
図版18　１．２Ａ区検出状況（西より）　２．３Ｂ区完掘状況（北より）
図版19　１．３Ｂ区ＳＤ１遺物出土状況（北東より）　２．３Ｂ区東壁土層（南西より）
図版20　１．ＳＲ１・包含層・地点不明出土遺物
図版21　１．道後湯月町遺跡：池址１・ＳＫ１、道後湯之町遺跡：ＳＲ１出土遺物
第 4 章　自然科学分析
図版22　１．道後湯月町遺跡の動物遺存体

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

2003（平成15）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道道後42・43号線道路改良工事にあたり、当該地の埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地は松山市道後湯月町及び道後湯之町内にあり、松山平野でも有数の遺跡地帯である『道後城北遺跡群』内に所在する。申請地南側には中世、河野氏の築城とされる湯築城跡や、南東部には白鳳期の瓦が出土した内代廃寺、さらに西方には弥生時代の拠点的集落である文京遺跡や松山大学構内遺跡などがある。また、申請地北側丘陵部には湯之町廃寺や道後冠山遺跡、東側丘陵部には弥生時代前期の土坑墓や古墳時代の竪穴式住居址を検出した道後姫塚遺跡などがある。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、道路建設課と調査契約を結び、試掘調査を実施することとなった。試掘調査は2004（平成16）年12月に実施した。申請地内に重機を使用して数本のトレンチを掘削し、土層観察及び遺構・遺物の確認をおこなった。道後42号線工事対象地の試掘調査では、弥生時代から中世までの遺物包含層が存在していることを確認し、道後43号線工事対象地では、溝と遺物包含層を確認した。これらの結果を受け、埋文センターと文化財課及び道路建設課の三者は協議を重ね、埋蔵文化財が確認された地域を対象とした発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は埋文センターと道路建設課が調査契約を結び、埋文センターが主体となり、文化財課と道路建設課の協力のもとに、2度に分けて実施した。まず、道後42号線対象地の調査は、2005（平成17）年2月、道後43号線対象地は2005（平成17）年6月に開始した。遺跡名は町名を踏襲し、前者を道後湯月町遺跡、後者を道後湯之町遺跡として発掘調査を実施した。

2．刊行組織（平成20年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居　貴美
事務局	局　長	石丸　修
	企画官	仙波　和典
	企画官	田中　郁夫
	企画官	田浦　雅文
文化財課	課　長	家久　則雄
	主　幹	森川　惠克
	主　査	栗田　正芳
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	吉岡　一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	丹生谷博一
	次長兼教育普及担当リーダー	重松　幹雄

次長兼調査担当リーダー　田城　武志
調 査 員　宮内　慎一
調 査 員　相原　秀仁
調 査 員　大西　朋子（写真担当）

3．環　境（第2図）

（1）地理的環境

松山平野は瀬戸内海西部の伊予灘と、瀬戸内海中部の燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。高縄半島中央部には、最高峰の東三方ケ森（標高1232.7m）をはじめ伊之子山、北三方ケ森、高縄山等からなる高縄山系が形成されている。高縄山系は西南日本内帯の領家帯に属し、主に中生代に貫入した古期領家花崗岩で形成されている。松山平野は高縄山地に源を発する重信川と石手川及び、その支流によって形成された沖積平野である。

道後湯月町遺跡、道後湯之町遺跡は松山平野北東部に位置し、前者は道後温泉がある丘陵緩斜面上、後者は低位部に立地する。遺跡の絶対位置は前者が北緯33°50′55″、東経132°47′21″、後者は北緯33°50′48″、東経132°47′19″である。松山城周辺は『道後城北遺跡群』と称され、松山平野でも有数の遺跡地帯として知られている。遺跡群は地理的条件や遺跡の性格などから、城北地区、祝谷地区、道後地区の3地区に区分され、本稿掲載の2つの遺跡は、このうちの道後地区に所在する。

（2）歴史的環境

本稿掲載の遺跡を含む道後城北遺跡群内には、文京遺跡をはじめ数多くの遺跡が存在する。ここでは、近年、発掘調査された遺跡を中心に、時代別に概要を説明する。

縄文時代

遺跡群中央部、城北地区にある道後城北ＲＮＢ遺跡（3）からは、縄文時代後期前葉と晩期後葉の包含層が層位的に検出され、持田町3丁目遺跡（4）や道後今市遺跡（5）からは縄文晩期の土坑が検出されている。

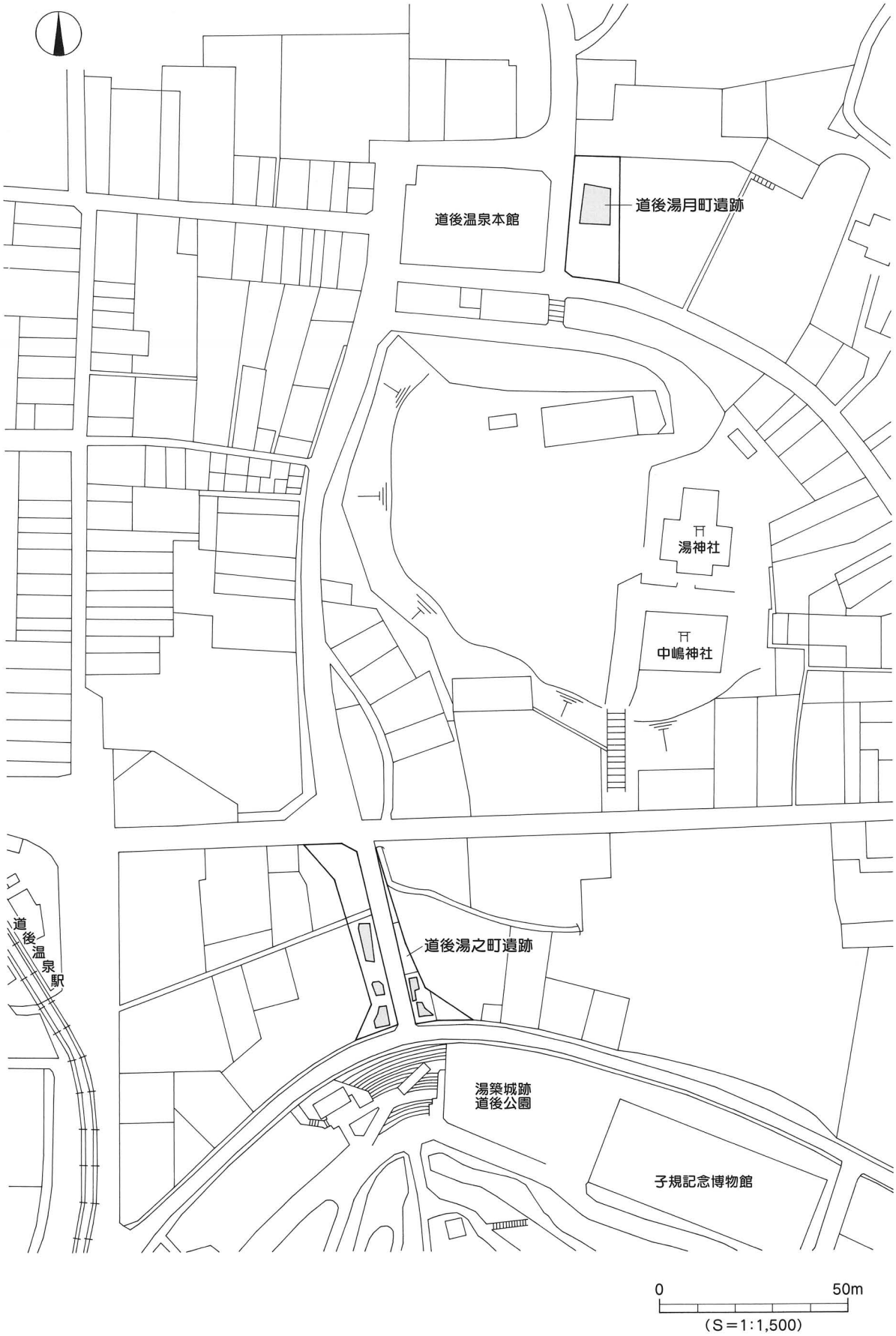
弥生時代

前期では、松山平野における弥生前期の標識土器である持田式土器が出土した持田町遺跡（6）が古くから知られている。近年の調査では、前述の持田町3丁目遺跡から弥生前期前半の土坑墓や土器棺墓が多数検出され、岩崎遺跡（7）では前期末段階とされる大型の溝と土坑群が検出され、同地区における前期集落の様相が明らかになりつつある。

中期になると、前半では道後地区の丘陵上に道後姫塚遺跡（8）や道後鷺谷遺跡（9）があり、扇状地から丘陵部へ遺跡の広がりが認められる。中期中葉では遺跡北部、祝谷地区の丘陵上に祝谷六丁場遺跡（10）があり、中期中葉の遺構や遺物のほか、平形銅剣が土坑内から埋納状態で発見されている。また、祝谷畑中遺跡（11）では中期中葉の大規模な環濠の検出と共に、弥生土偶が出土している。中期後半から後期にかけては、城北地区にて、松山大学構内遺跡2次調査（12）や文京遺跡〔愛媛大学構内〕をはじめ多くの遺跡が存在し、該期の竪穴式住居址が多数確認されている。

古墳時代

集落遺跡は、城北地区の松山大学構内遺跡2次調査や松山北高等学校遺跡2次調査（13）にて、古墳時代前期の竪穴式住居址が検出され、中期から後期では文京遺跡をはじめ祝谷アイリ遺跡（14）な


道後温泉本館
道後湯月町遺跡
湯神社
中嶋神社
道後湯之町遺跡
道後温泉駅
湯築城跡
道後公園
子規記念博物館
0
50m
（S＝1:1,500）

第1図　調査地位置図

どから竪穴式住居址や土坑が検出されている。一方、遺跡群北部及び東部の丘陵上には数多くの古墳が分布している。祝谷地区では祝谷古墳群や常信寺古墳群、道後地区では桜谷古墳（15）や石手寺古墳群が存在する。

古　代

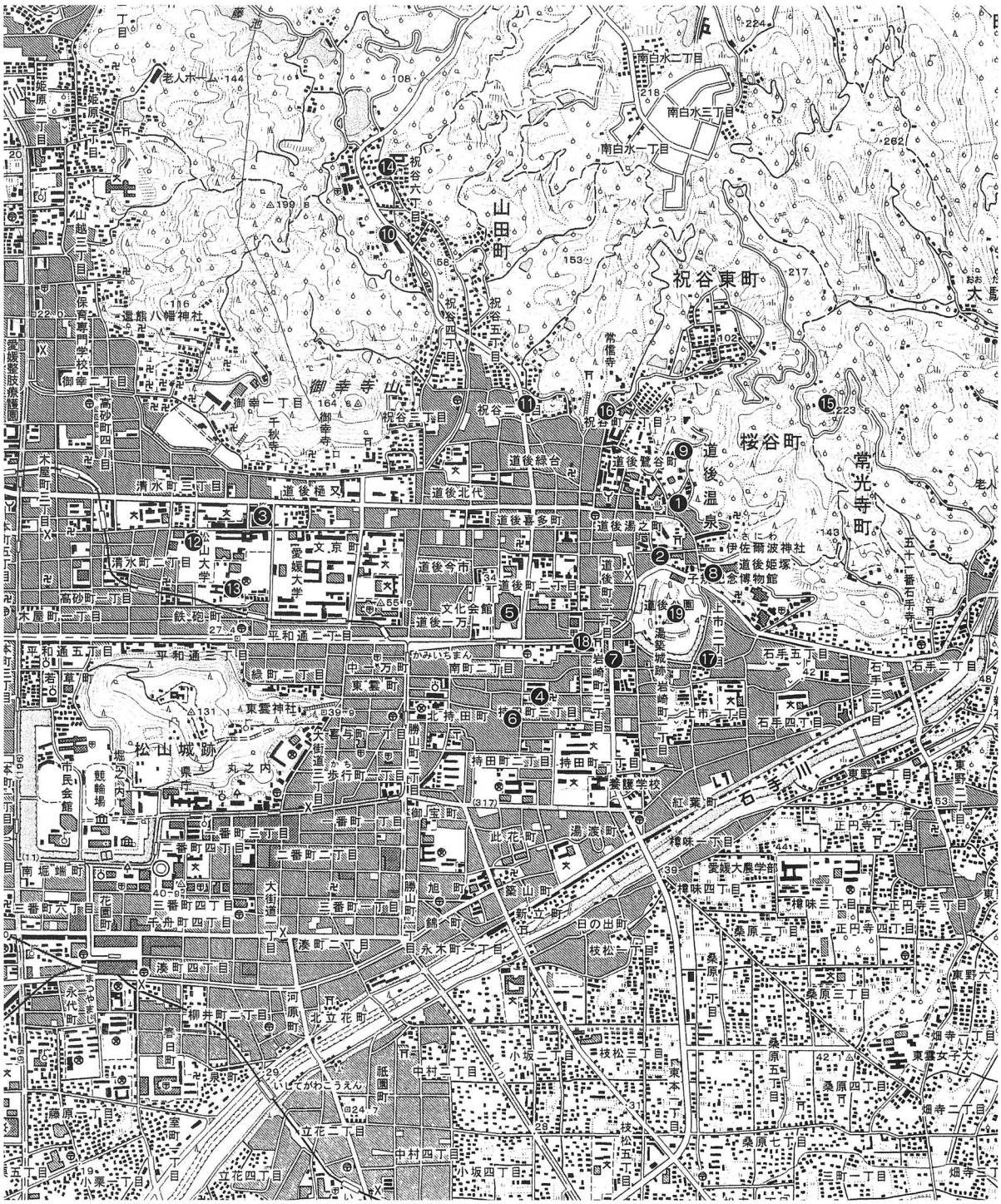
大化改新の前後、舒明11（639）年に舒明天皇、斎明７（661）年には斎明天皇の熟田津石湯（道後温泉）への行幸があったことが知られており、伊予国風土記逸文には聖徳太子が来県し、道後温泉本館南側にある伊佐爾波神社の丘に碑文を建てたという伝承が記されている。道後地区には白鳳期の創建とされる湯之町廃寺（16）や内代廃寺（17）が知られている。湯之町廃寺は現在の道後温泉北側１㎞の地点にあり、一町四方の寺域が推定されている。内代廃寺は湯築城跡の東側に位置し、複弁八弁蓮華文丸瓦や四重弧文軒平瓦が出土している。大宝律令制定以降、愛媛県は伊豫国と称され、国内には14郡が設置されていた。松山平野には５郡（伊予・和気・久米・温泉・浮穴）が置かれ、道後地区は温泉郡に属していたものとされる。近年の発掘調査では、岩崎遺跡にて奈良時代の区画溝や平安時代の掘立柱建物址が検出されているほか、道後町遺跡（18）では自然流路が検出されている。

中　世

道後今市遺跡（愛媛県県民文化会館）は弥生時代から中世に至る複合遺跡で、同９次調査や10次調査では13～14世紀を主体とする掘立柱建物址が検出され、同１次調査や５次調査では14～16世紀の溝や土坑、墓が検出されている。近年の調査では、岩崎遺跡にて13～15世紀の水田址が発見され、道後町遺跡では15世紀代の条里区画に沿った溝が報告されている。また、中世、河野氏の居城である湯築城跡（19）が存在する。道後地区には石手寺や義安寺、宝巌寺などの寺院が集中しており、門前町や現在遍路道となっている街道が発達していたことが推定される。さらに、湯築城の築城以降には『伊予湯築古城之図』によると、道後温泉周辺には湯之町、湯築城周辺には上市、上古市、今市などの地名がみられ、市町が形成されていたことが推測される。

【文　献】

① 愛媛県史編さん委員会　1980『愛媛県史　資料編考古』
② 松山市史料集編集委員会　1986『松山市史料集　第２巻考古編Ⅱ』
③ 眞鍋　昭文他　1985『持田町３丁目遺跡』埋蔵文化財調査報告書第58集
④ 宮内　慎一　1988『岩崎遺跡』松山市文化財調査報告書第71集
⑤ 宮崎　泰好　1991『祝谷六丁場遺跡』松山市文化財調査報告書第24集
⑥ 眞鍋　昭文　2002『祝谷畑中遺跡』埋蔵文化財調査報告書第101集
⑦ 宮内　慎一　1995『松山大学構内遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第49集
⑧ 眞鍋　昭文他　1995『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書２』埋蔵文化財調査報告書第55集
⑨ 梅木　謙一　1992『祝谷アイリ遺跡』松山市文化財調査報告書第25集
⑩ 三好　裕之他　2005『道後町遺跡Ⅱ』埋蔵文化財調査報告書第121集
⑪ 中野　良一　1998『湯築城跡』埋蔵文化財調査報告書第66集



第2図　遺跡分布図（S＝1:25,000）

4．調査の概要

（1）調査の経緯

道後湯月町遺跡は松山市道後湯月町甲1656-1外に所在し、道後温泉本館の東側に隣接する位置にある。一方、道後湯之町遺跡は松山市道後湯之町875-9外に所在し、湯築城跡の北側に位置する。両遺跡共に、調査以前はホテルや駐車場等に利用されていた場所である。

調　査：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは、平成16年度に道後湯月町遺跡、平成17年度には道後湯之町遺跡の発掘調査を実施した。調査は重機により表土層を除去し、その後、人力で包含層の掘り下げや遺構・遺物の検出、測量及び写真撮影等の記録作業をおこなった。遺物は主な遺構に限り測量図を作成し、その他はドット方式で取り上げた。なお、国土座標杭の設置業務を国際航業株式会社に委託し、遺構及び包含層出土遺物は国土座標で区画したグリット単位で取り上げた。このほか、土壌サンプルを採取し、株式会社古環境研究所に分析業務を委託した。

整　理：整理作業は平成17年度から発掘調査と併行しておこなった。17・18年度には調査で記録した測量図の合成や写真類の整理、及び出土した遺物の洗浄、注記、実測作業等をおこなった。19年度には本格的な整理作業と報告書作成作業を実施した。なお、整理作業中には出土遺物や層位、地形復元等に関する検討会をおこない、整理・報告書作成に役立てた。

説明会：道後湯月町遺跡の調査終了後には、現地にて遺跡説明会を開催した。説明会では地域住民や考古学ファンをはじめ、道路建設課や道後温泉事務局ならびに教育委員会の関係者など、総勢150名に及ぶ参加者を得て、埋蔵文化財に対する意識の高揚がはかられた。また、平成18年度には松山市考古館にて両遺跡から出土した遺物や発掘調査中の写真等を展示し、啓蒙普及に努めた。

（2）遺構と遺物

両遺跡からは、縄文時代から中近世までの遺構と遺物を確認した。以下、時代別に概要を説明する。縄文時代から弥生時代の遺構は未検出であるが、両遺跡共に、別時期の遺構や包含層中から縄文晩期から弥生後期までの土器片や石器が少量出土した。古墳時代の遺構は、道後湯之町遺跡から溝１条と土坑１基を検出した。出土遺物より古墳時代後期の遺構と考えられる。このほか、包含層中からはテンバコ（44×60×14cm）３箱分の遺物が出土した。古代の遺構は、道後湯月町遺跡より池状遺構１基（平安時代後期）を検出した。池状遺構内からは土師器、須恵器のほかに木器や動物遺存体などテンバコ３箱分の遺物が出土した。このほか包含層やトレンチ内より、土師器、須恵器、瓦等がテンバコ３箱分出土した。なお、暗文を施す土器片が10数点と古銭２点が含まれている。中世の遺構は、道後湯月町遺跡より池状遺構２基（鎌倉～室町）、道後湯之町遺跡からは溝２条、自然流路１条を検出した。池状遺構内からは大量の土器が出土し、遺物総数はテンバコ30箱分に及んだ。また、包含層やトレンチ内からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、国産陶磁器（備前焼、亀山焼）、輸入陶磁器（白磁・青磁）等がテンバコ５箱分出土した。近世の遺構は、道後湯月町遺跡より土坑１基を検出した。土坑は、甕を埋置して使用した埋甕遺構である。このほか、包含層やトレンチ内から土師器や磁器（清水焼、肥前焼）がテンバコ３箱分出土した。

表１　調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	備　考
道後湯月町遺跡	松山市道後湯月町甲1656-1外	177.20	H17.2.2～H17.3.31	道後42号線関連調査
道後湯之町遺跡	松山市道後湯之町875-9外	193.70	H17.6.1～H17.7.29	道後43号線関連調査

第２章　道後湯月町遺跡

１．調査の経緯

（１）調査の経緯

調査地は道後温泉の東側に位置し、調査以前はビジネスホテルと駐車場として利用されていた。以下、調査工程を略記する。

2005（平成17）年２月２日より重機による表土掘削作業を開始した。まず、調査区北半部にて岩盤層を検出し、その上面にて土坑と近現代の用水管を検出した。用水管の除去と共に、土坑の掘り下げをおこなった。２月14日より南半部の調査を開始した。表土除去後、南半部では径10～20cm大の円礫を含む土層が堆積しており、順次、掘り下げと遺物の取り上げをおこなった。２月17日、調査区内に東西及び南北方向のベルトを設定し、土層観察をおこなった。その結果、池状遺構と思われる遺構を数基確認した。そこで、今後の調査方法を検討した結果、池状遺構の調査を主体に進めることとなった。２月24日より池状遺構の掘り下げや遺物の取り上げをおこなった。最も時期の新しい池状遺構（池址３）掘り下げ時には、完形品を含む比較的遺存状態の良好な土器が集中する箇所が４箇所あったが、個別には図化せず、範囲のみを測量した。その後、池址２の調査を引き続き実施し、大量の土器や円礫が出土した。この時点で地表下1.5mほど掘り下げており、土砂の搬出作業が予想以上に時間を費やす結果となった。３月14日、最も古い時期の池状遺構（池址１）の調査を開始した。同日、地盤の軟化により、調査区西壁の一部が崩落した。その結果、西壁南西部にて石組が露出した。土層観察の結果、これまで検出した池状遺構とは別の遺構であることが分かり、池址４として調査をおこなった。調査終了日が近づいていたことから、池址１の掘り下げは調査区中央部のみ（1.5m×1.5mの範囲）となり、その部分のみの調査となった。なお、池址１の底面には黒色土が堆積しており、池址１掘り下げ後、黒色土の掘り下げをおこなった。なお、池址４は平面形状の確認はできず、土層観察より範囲のみを確認した。３月29日、完掘写真を撮影し、３月31日、屋外作業を終了した。年度が明け、４月９日に一般市民対象の現場説明会を開催した。

（２）調査組織

遺 跡 名：道後湯月町遺跡
所 在 地：松山市道後湯月町甲1656-１外
調査面積：177.20㎡
調査期間：2005（平成17）年２月２日～同年３月31日
調査要因：松山市道道後４２号線道路改良工事に伴う事前発掘調査
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：宮内　慎一・相原　秀仁

２．層　位（第３図）

（１）基本層位

調査地は松山平野北東部の丘陵に挟まれた谷部、標高44.6mに立地する。調査地の基本層位は、以下のとおりである。

第Ⅰ層：近現代の造成に伴う客土で、地表下1.0～1.9mまで開発がおこなわれている。

第Ⅱ層：にぶい黄褐色土で、調査区ほぼ全域にみられ層厚14～40cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅲ層：黄褐色土で、調査区北西部にみられ層厚10～30cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅳ層：やや砂質を帯びた茶褐色土で、調査区北西部にみられ層厚10～20cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅴ層：灰褐色を呈する砂質土で、調査区全域にみられ、層厚10～40cmを測る。調査壁の土層観察により、池址４は本層上面から掘削された遺構であることが判明した。なお、本層下面にて池址３を検出した。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅵ層：黒色を呈する粘質土で、調査区北側を除く地域にみられ、北東部から南西部に向けて傾斜堆積をなし、層厚40cm以上を測る。本層中からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器のほか石器、木器が出土した。

第Ⅶ層：黄褐色を呈する風化土で、いわゆる岩盤層である。本層上面は調査区北東部が最も高く、標高44mを測る。なお、本層上面が調査における最終遺構検出面となる。

なお、これらの土層以外に２つの土層（第３図：A層、B層）を検出した。調査の結果、A層とB層はそれぞれ池址１と池址２を埋め戻した際に使用されたものであることが判明した。また、検出遺構や出土遺物から、第Ⅵ層は古代、８世紀頃、第Ⅴ層は中世までに堆積したものと推測される。調査にあたり調査区内を５m四方のグリットに分けた。グリットは西から東へA･B、北から南へ１・２・３とし、A1・A2・・・B３といったグリット名を付した。

（２）検出遺構・遺物

調査では、縄文時代から近世までの遺構や遺物を検出した。遺構は平安時代から江戸時代までのもので、池址４基、土坑１基である。遺物は遺構及び包含層中などより、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器、陶磁器、木器、石器、古銭、動物遺存体が出土した。

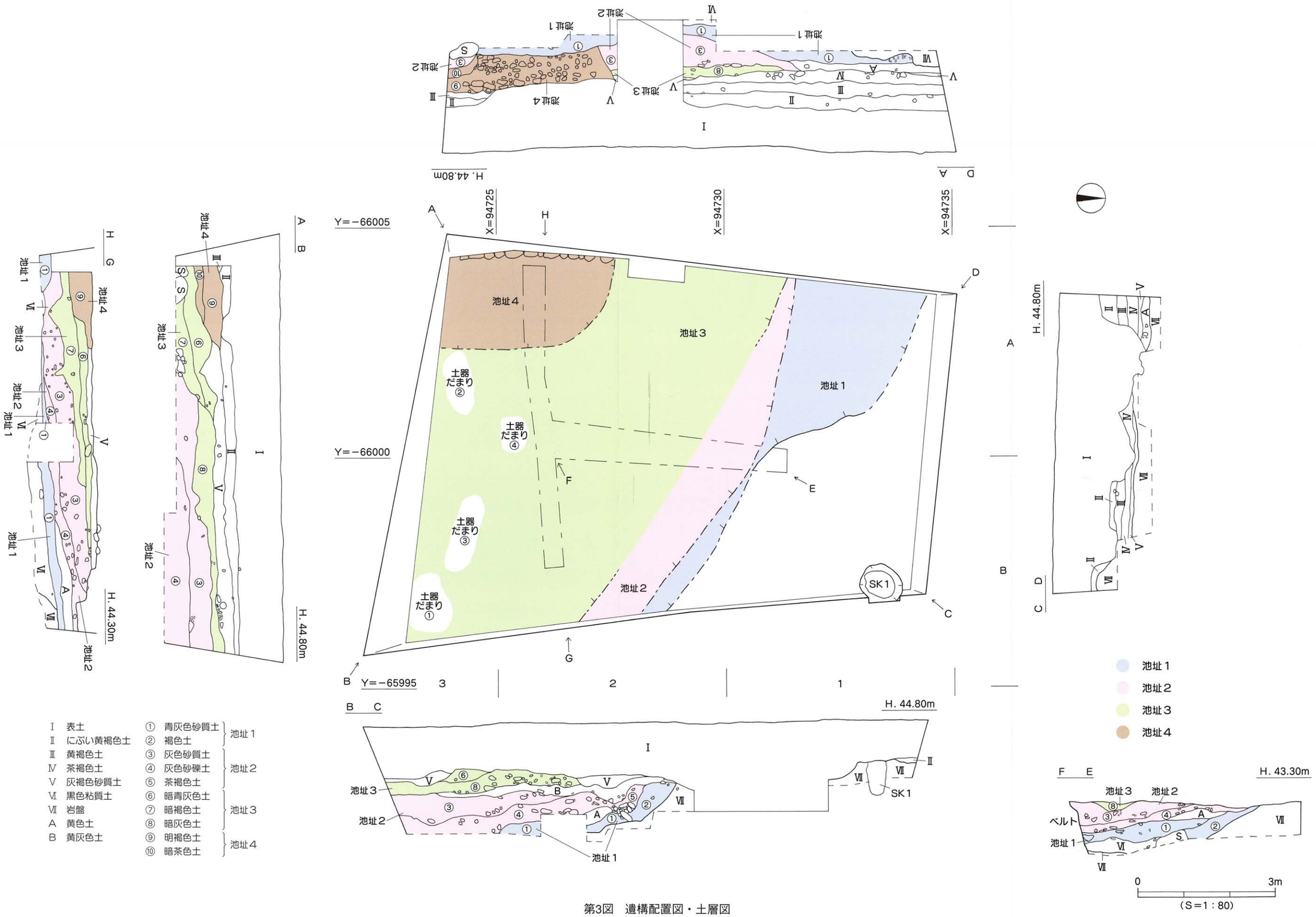
３．遺構と遺物

調査では池状遺構（池址と呼称）４基、土坑１基を検出した。ここでは、遺構別に説明する。なお、調査期間の都合上、池址は遺構全体を掘削しておらず、そのため、遺構の範囲は遺構配置図上では想定線で記載している。

（１）池状遺構（池址）

池址１（第３図、図版３・22）

調査地北西部から南西部、Ａ１～Ｂ３区で検出した。池址１の想定範囲を第３図に示している。東西検出長9.2m、南北検出長13.0m、深さ60～100cmを測る。調査区東壁の土層観察により、池址掘り方から内側に約30～50cmの地点に径10～20cm大の円礫を積み重ねて池垣とし、掘り方と池垣との間には褐色土（②層）を挿入し構築していることがわかった。第Ⅶ層を掘りくぼめ、深さは最深部で１m程度が残存している。池址１埋土は青灰色を呈する砂質土で、少量の微砂が混入する。池址底面は第Ⅵ層黒色粘質土に及んでいたが、調査期間の都合上、実際の掘り下げは調査区中央部付近（1.5m×1.5mの範囲）のみとなった。遺物は主に、平安時代中期から後期に時期比定される土師器のほか、古墳時代から奈良時代に時期比定される須恵器や土師器、瓦も少量であるが出土した。なお、後者の遺物は



第3図　遺構配置図・土層図

本来、第Ⅵ層出土品と考えられるものである。また、池垣に使用されたと思われる円礫も数点出土した。このほか、埋土下位からは棒状の木製品や加工痕の残る木片等が数点出土したほか、動物遺存体（イヌ・イノシシ・シカ・ウシ・ウマ）が出土した（図版22）。

出土遺物（第４～６図、図版８）

池址１の遺物は埋土上位と下位とで取り上げた。なお、池址１底面は第Ⅵ層黒色粘質土であったため、埋土下位出土品には第Ⅵ層遺物が混在している可能性がある。

（ⅰ）埋土上位出土品（１～37）

土師器（１～32）１～18は坏である。１～５は平底、８～18は円盤高台状の底部である。１～４は推定口径14～15cmを測り、底部切り離しは、すべて回転ヘラ切り技法による。８・９はそれぞれ推定口径14.4cm、13cm、10～12は推定口径10.2～10.8cmを測る。８～18の底部切り離しは、すべて回転ヘラ切り技法による。19～22は椀である。19は口縁部が外反し、20～22は長めの高台をもつ。21の底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。23～30は皿である。推定口径8.6cm～10.1cmを測り、底部切り離しは、すべて回転ヘラ切り技法による。形態は口縁部が内湾気味に立ち上がるもの（23～28）、外反するもの（29・30）があり、口縁端部は丸く仕上げる。器壁は比較的厚く、底部が４㎜前後を測るもの（23・24・27・28）もある。31・32は内黒椀で、口縁部は外反し、体部内面にヨコ方向の細かなヘラミガキ調整を施す。

陶磁器（33）33は亀山焼の甕で、口縁端部は上下方に肥厚し、口縁端面はナデ凹む。頸部外面にハケメ調整、胴部外面に格子叩きを施す。

瓦（34～37）34～36は平瓦、37は丸瓦である。34の凸面には細縄叩き、36は格子叩きを施す。35～37の凹面には布目痕が残る。

（ⅱ）埋土下位出土品（38～60）

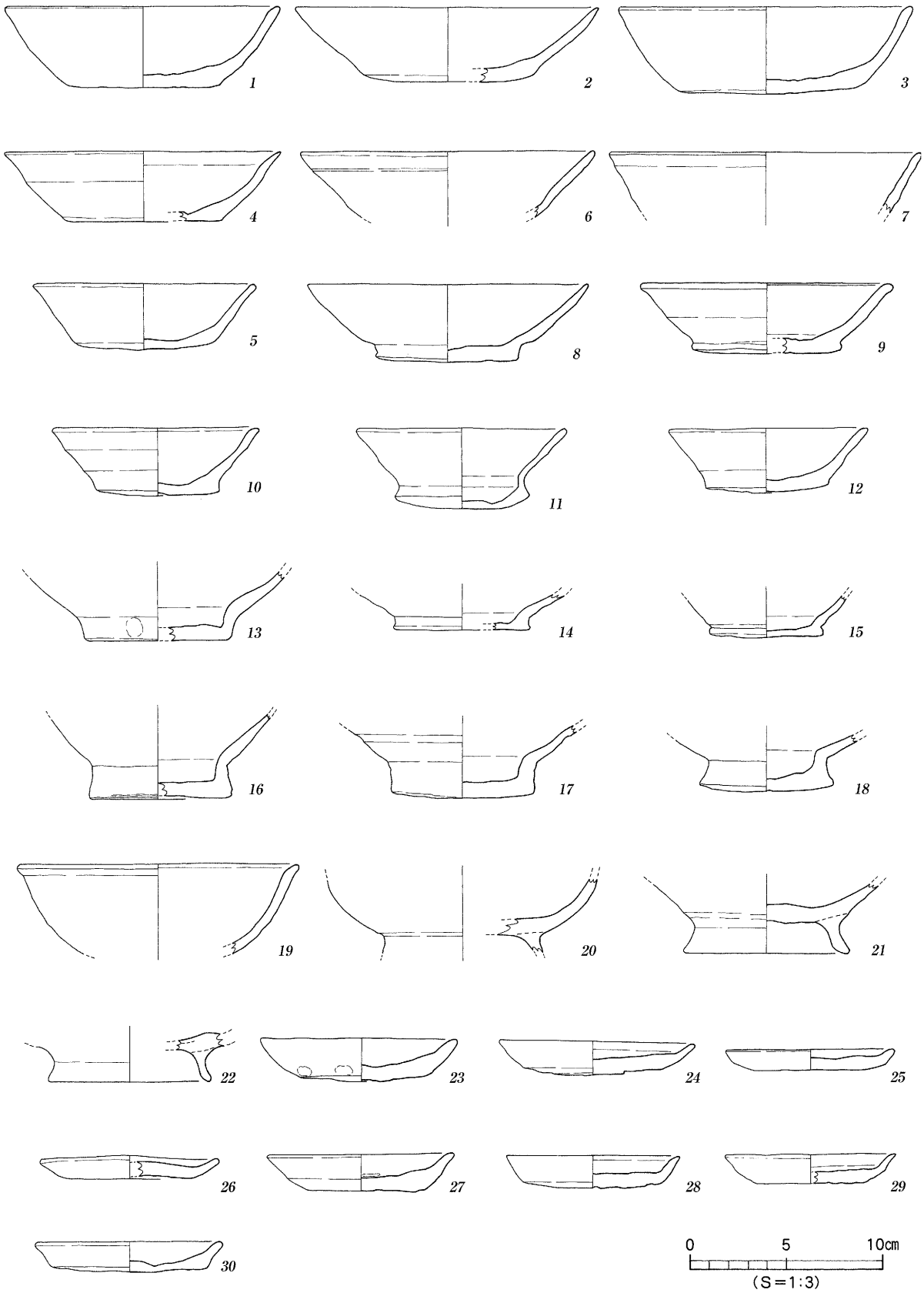
土師器（38～47）38～43は坏である。38は口縁部内面が内傾し、体部内面に放射状暗文を施す。底部外面にはナナメ方向のヘラミガキ調整を施す。39は体部内面にヨコ方向のヘラミガキ調整、内面に暗文を施す。40～43は口縁部片で、体部内面に暗文が残る。44は皿で、内面に暗文を施す。45・46は甕で、46の口縁端部は上方に肥厚する。47は小型壺で、胴部内面には指頭痕が顕著に残る。

須恵器（48～52）48～50は高坏である。48・49は無蓋高坏の坏部片で、坏下位に稜をもつ。50は脚部片で、脚端部は下方に屈曲する。51は壺の口縁部片で、口縁端部は珠玉状に仕上げる。52は須恵質の円筒埴輪片である。

弥生土器（53）53は弥生前期末の壺の肩部片で、ヘラ描沈線文と刺突文を施す。

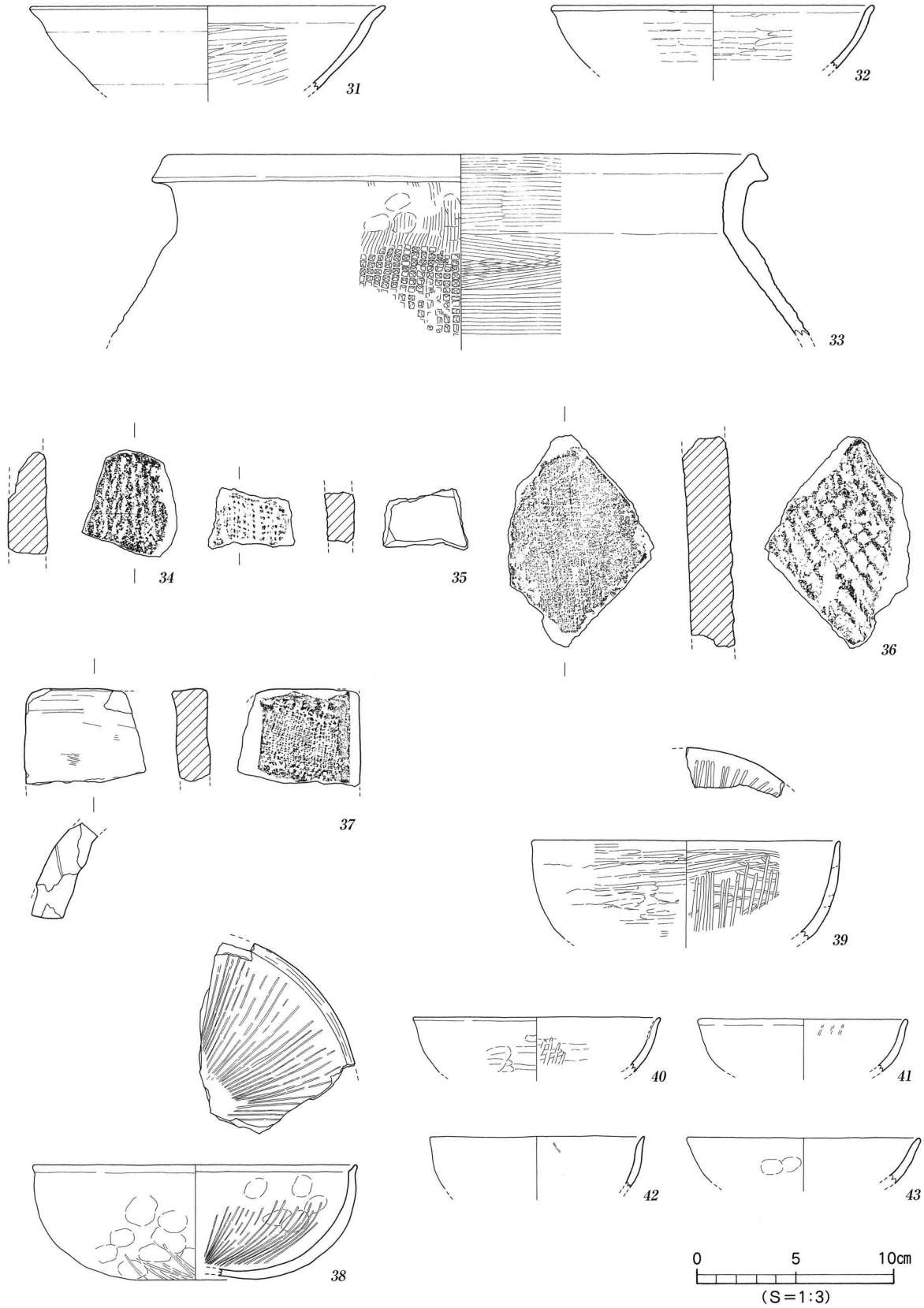
木　器（54～60）54は棒状の製品で、蒔への転用品である。55・56は板状の木片、57・58は加工痕の残る木片、59・60は削りかすである。樹種同定の結果、材質は54がヤブツバキ、55はスギ、その他はヒノキである。

時期：出土遺物の特徴より、平安時代後期、11世紀代の遺構とする。



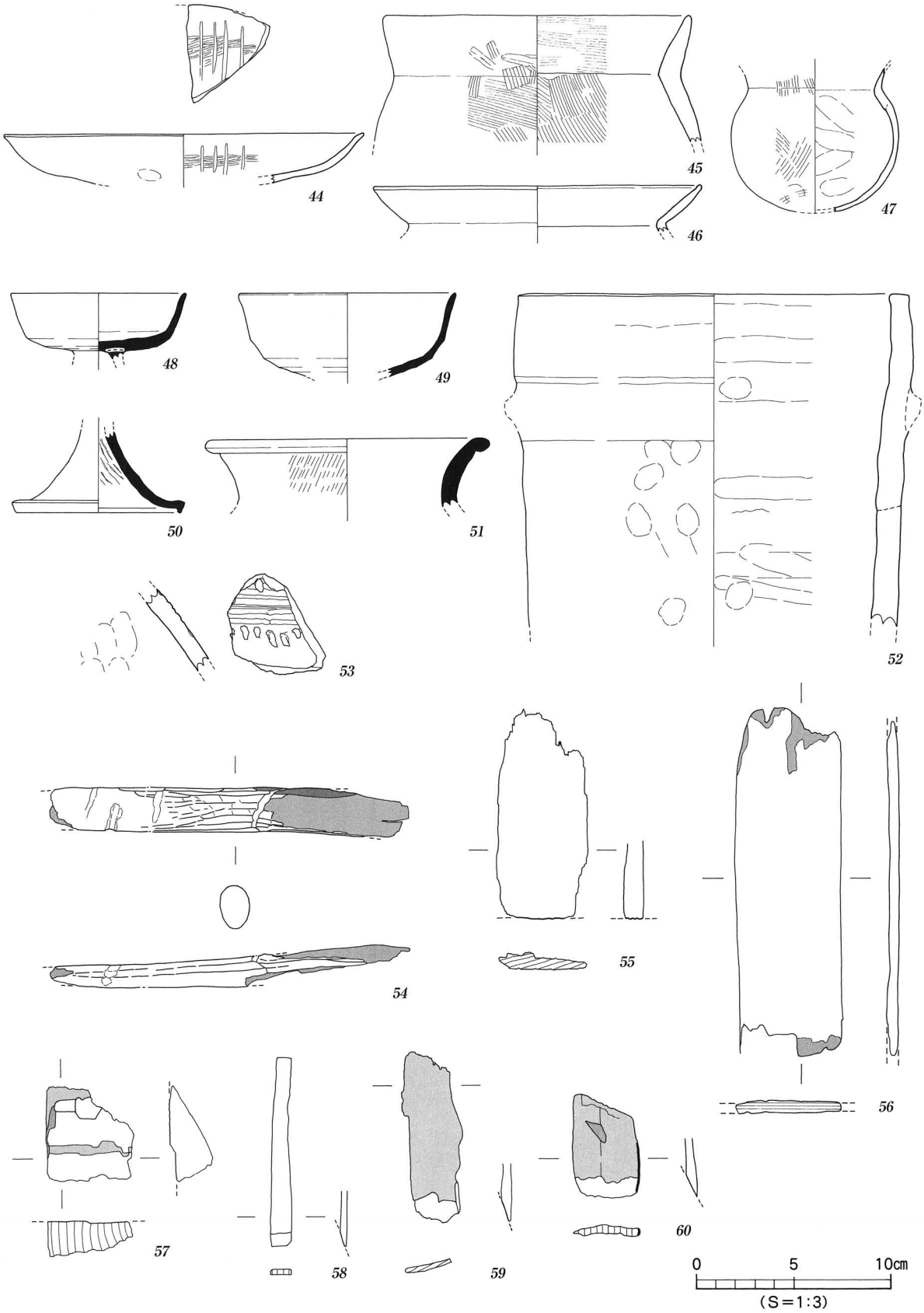
埋土上位：1～30

第4図　池址1 出土遺物実測図(1)



埋土上位：31～37
埋土下位：38～43

第5図　池址1 出土遺物実測図(2)



埋土下位：44～60

第6図　池址1 出土遺物実測図(3)

池址２（第３図、図版３・４）

調査地北西部から南東部、Ａ１～Ｂ３区で検出した。池址２の想定範囲を第３図に示している。東西検出長9.2m、南北検出長9.6m、深さ80～100cmを測る。調査区東壁の土層観察により、池址２は池址１と同様の方法で構築されている〔池址掘り方と池垣との間には茶褐色土（⑤層）を充填〕。また、池址２は黄灰色土（Ｂ層：厚さ20～30cm）による池址１埋め戻し後に造られており、池址１よりやや内側に池址２の掘り方を検出した。池址２の埋土は、上層が灰色を呈する粗砂（③層：厚さ40～60cm）で、下層は径2～５cm大の円礫を含む灰色砂礫層（④層：厚さ20～40cm）である。埋土の状況から、池址２は洪水もしくは自然災害等により埋没したものと推測される。遺物は埋土上層から鎌倉時代から室町時代までに時期比定される土師器や瓦器のほか、瓦や径20～30cm大の円礫50点余りが散在して出土した。埋土下層からは同時期の土器類のほか、弥生時代から平安時代までに時期比定される遺物が混在して出土した。下層出土品は、本来は池址１または第Ⅵ層に帰属するものと考えられる。

出土遺物（第７～12図、図版９・10）

（ⅰ）③層出土品（61～127）

土師器（61～114）61～96は坏である。83～89は平底で、83～87は口縁部が内湾し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。90～96は円盤高台状の底部をもち、96は底部に焼成前穿孔を施す。底部切り離しは、回転糸切り技法（83・84・86・88・89・94～96）と、回転ヘラ切り技法（87・90～93）によるものとに分かれる。97～100は椀である。97・98は長めの高台をもち、99・100は短い断面三角形状の高台をもつ。101～114は皿である。推定口径7.2～10.2cmを測り、器壁は２～３mm程度である。102・106・111は完存品である。底部と体部との境界は明瞭であり、口縁部は直立気味に立ち上がるもの（101～110）と内湾するもの（111～114）とに分かれる。底部切り離しは105が回転ヘラ切り技法、その他は回転糸切り技法による。

瓦　器（115～122）115～122は瓦器椀である。115～119は和泉型瓦器椀で、体部上位に稜をもち、体部外面には指頭痕、内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。体部内面には斜格子状の暗文を施すもの（115・119・121）と直線状の暗文を施すもの（122）がある。

陶磁器（123・124）123は白磁碗Ⅳ類、124は天目茶碗である。123は12世紀、124は17世紀。

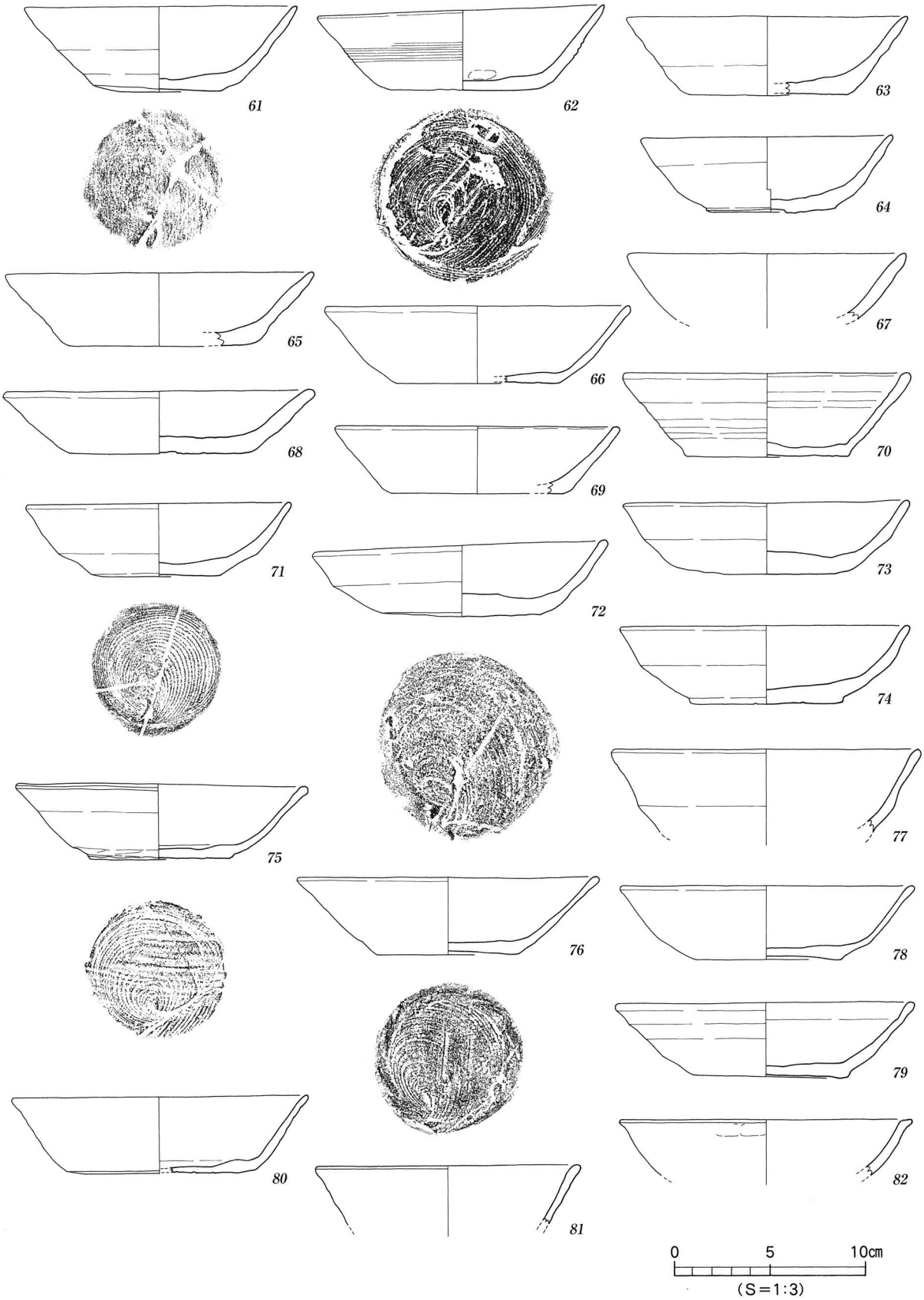
須恵器（125）125は東播系のこね鉢で、口縁部は下方に肥厚し、口縁端面はナデ凹む。13世紀。

瓦（126・127）126は平瓦で、凸面に細縄叩きと格子叩き、凹面には布目痕と粘土とじ痕を残す。８世紀。127は近世の軒丸瓦で、凹面に木挽きによる痕跡が残る。18世紀後半。

（ⅱ）④層出土品（128～166）

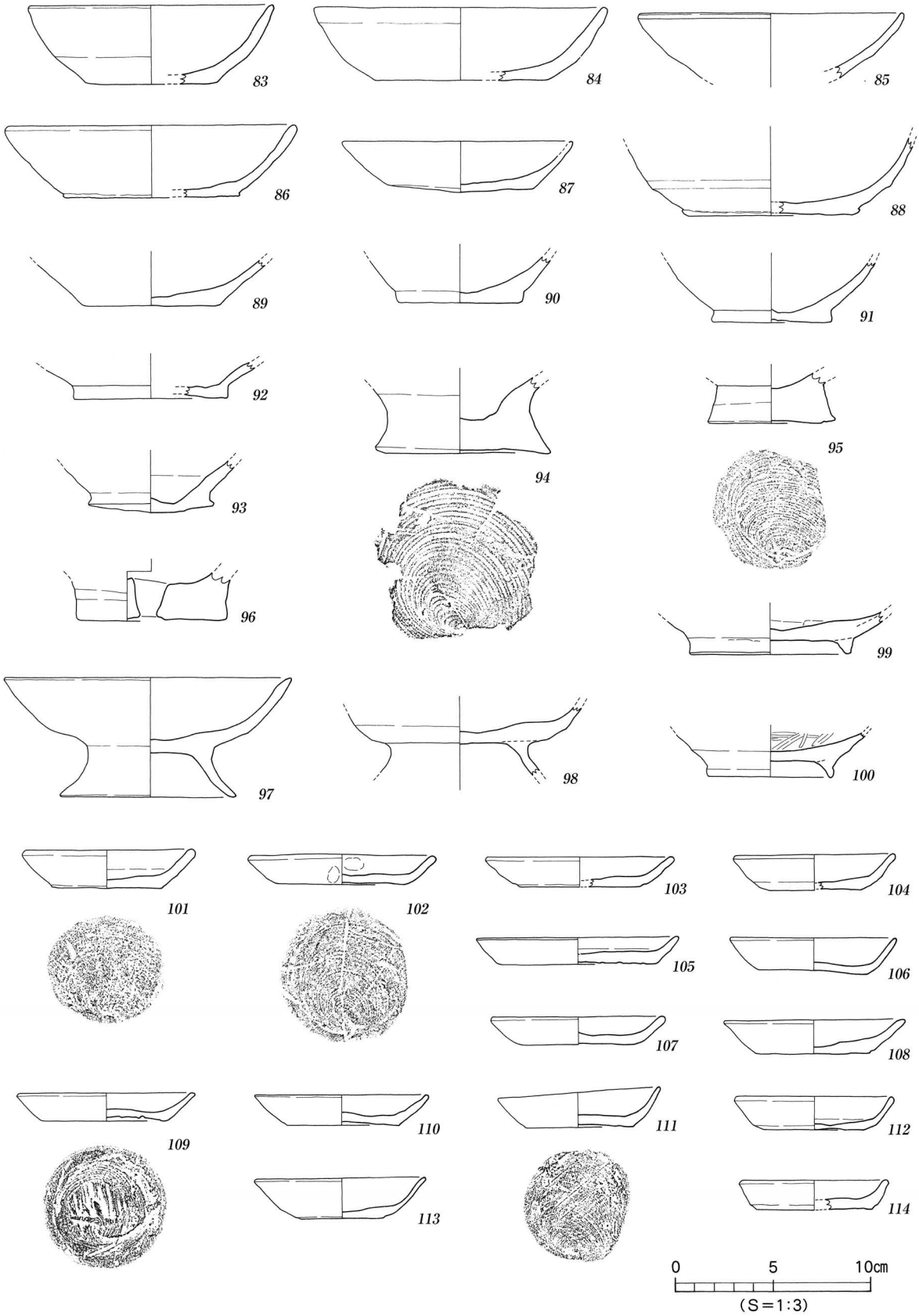
土師器（128～145）128～133は坏である。128～131の体部は内湾し、口縁部はわずかに外反する。130の体部外面には粘土紐巻上げ痕を顕著に残す。132・133の底部切り離しは回転糸切り技法による。137～141は７～８世紀代の坏である。口縁部は内傾し、体部内面に放射状暗文を施す。137は体部外面上位にヨコ方向のヘラミガキ、体部下位から底部にかけてはヘラケズリ調整を施す。142は椀、143は大型の鉢である。142の体部内面にはヘラミガキ調整を施す。144・145は古墳時代の甕で、口縁端部は内傾斜する。５世紀後半。

須恵器（146～162）146～150は坏蓋である。146～148は７世紀前半の坏蓋で、146の口縁部外面には刻目状の圧痕を残す。149・150は坏Bの蓋で、149の口縁端部は下方に屈曲する。149は８世紀前半、150は７世紀後半。151・152は坏身である。７世紀前半。153は坏Bで、方形状の高台をもつ。154・155



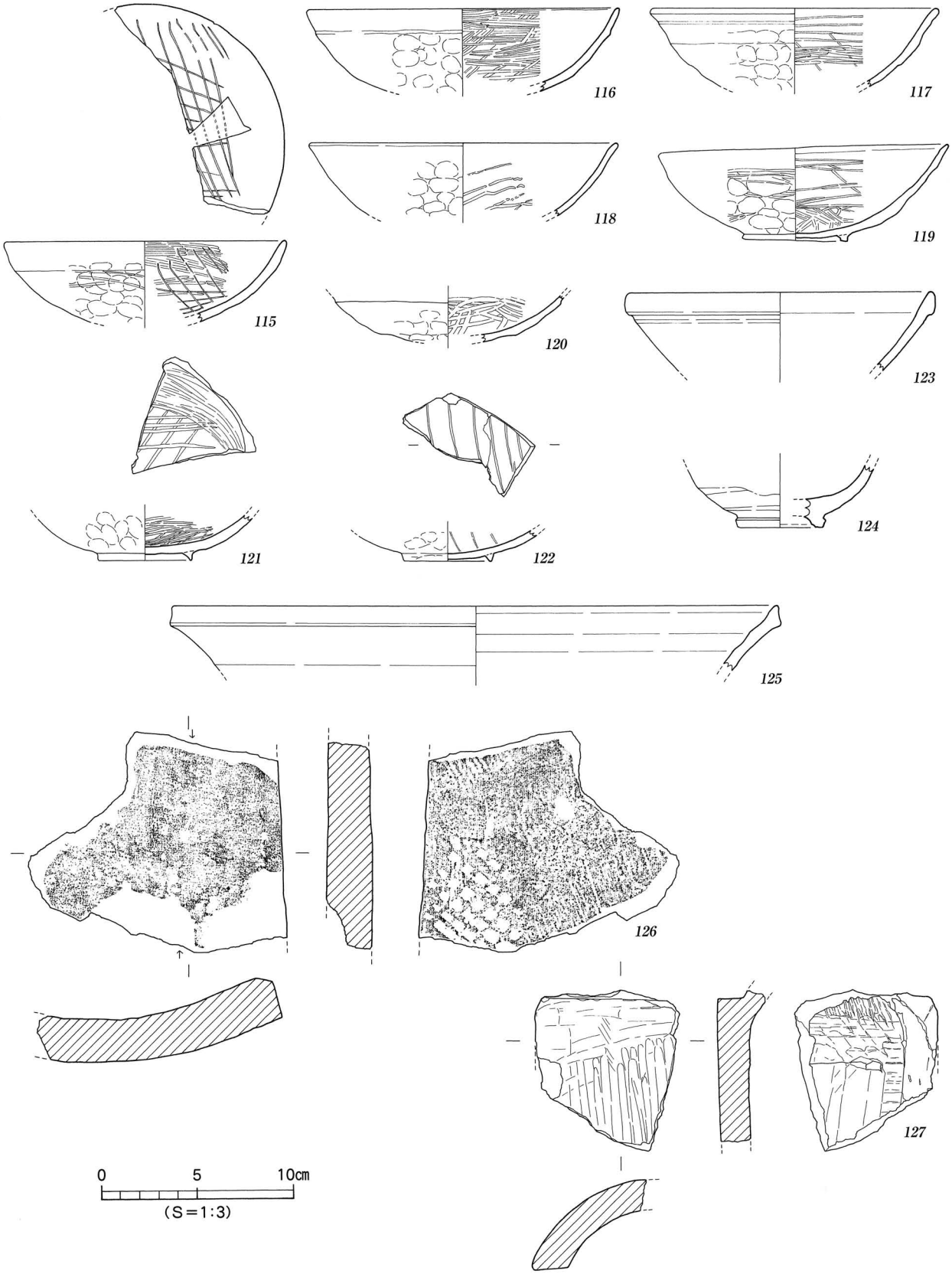
③層：61～82

第7図　池址2 出土遺物実測図(1)



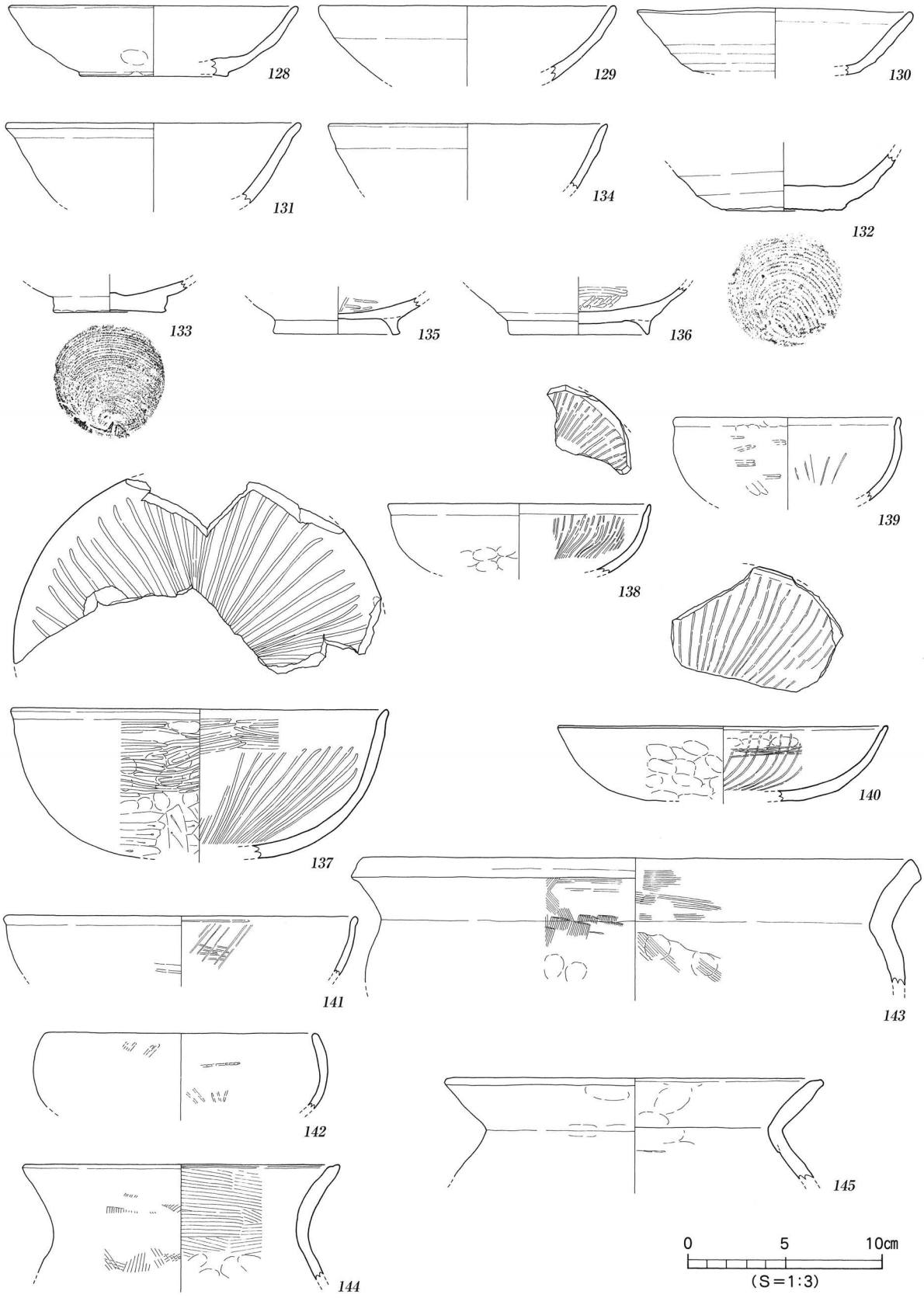
③層：83～114

第8図　池址2 出土遺物実測図(2)



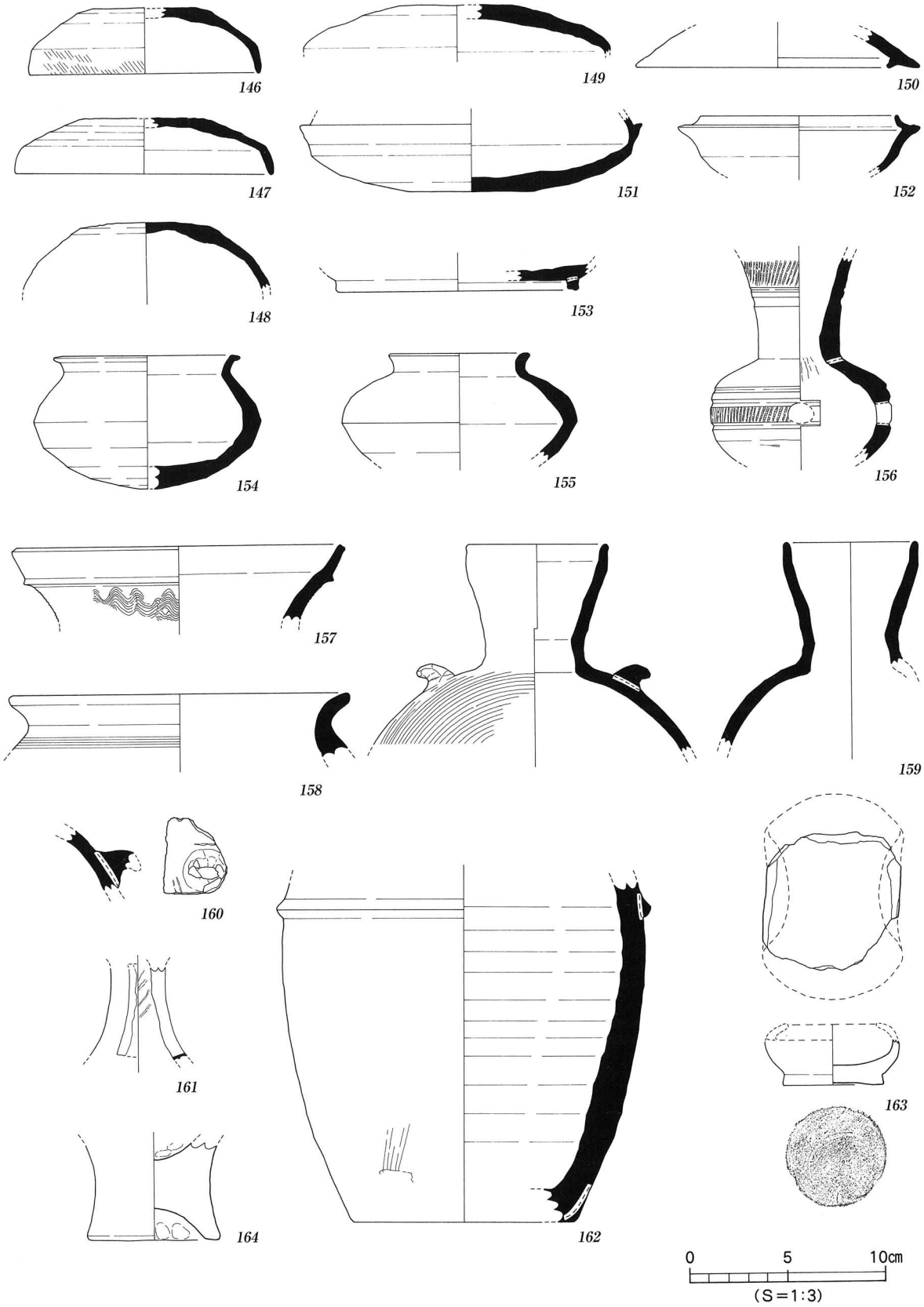
③層：115～127

第9図　池址2 出土遺物実測図(3)



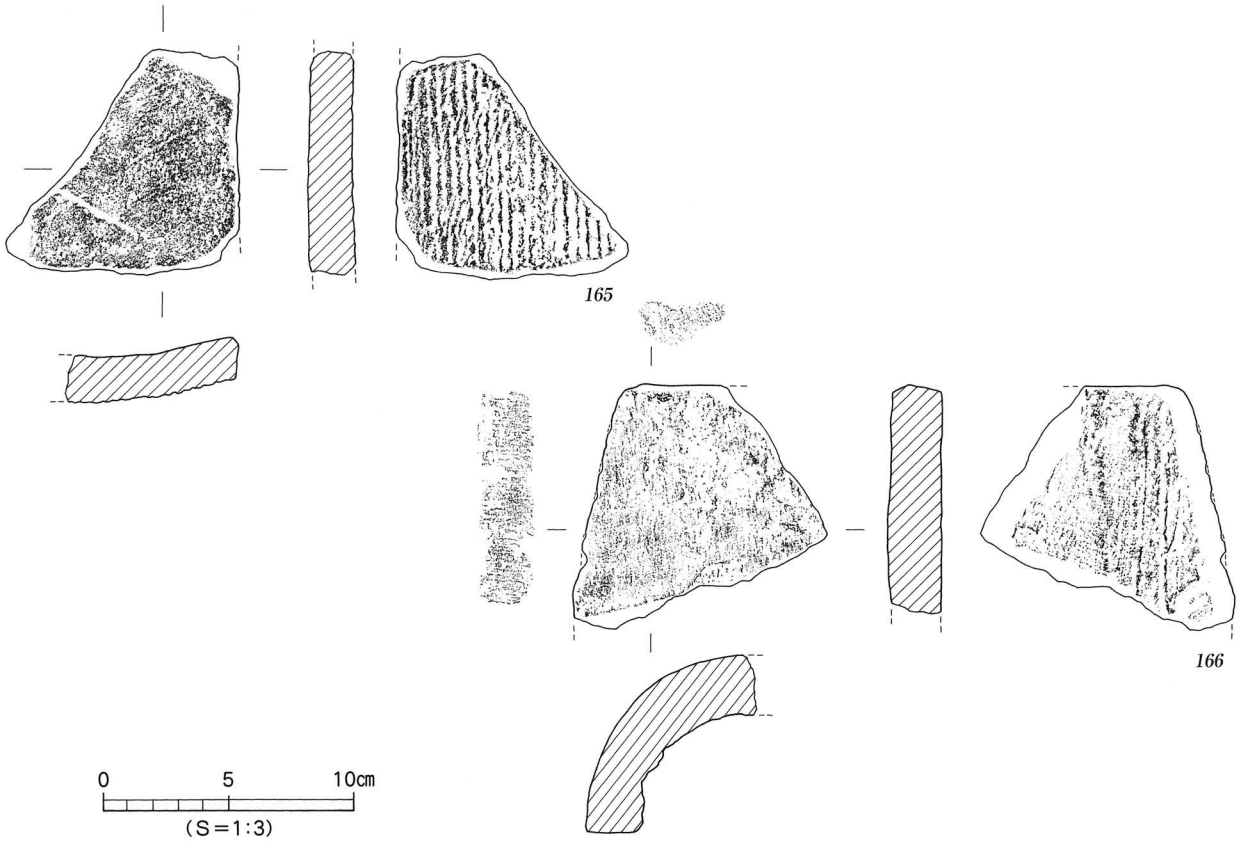
④層：128～145

第10図　池址2 出土遺物実測図(4)



④層：146～164

第11図　池址2 出土遺物実測図(5)



④層：165・166

第12図　池址2 出土遺物実測図(6)

は短頸壺で、口縁部は外方に拡張する。7世紀前半。156は甕で、頸部及び胴部に沈線と刺突文を施す。7世紀前半。157は壺の口縁部片で、頸部に波状文を施す。5世紀後半。158は甕の口縁部片で、肩部にカキメ調整を施す。7世紀。159・160は提瓶で、カギ状の把手をもつ。7世紀前半。161は高坏の脚部片、162は瓶である。161は7世紀、162は8世紀。

緑釉陶器（163）163は耳皿で、底部切り離しは回転糸切り技法による。胎土は灰白色を呈する。11世紀。

弥生土器（164）164は弥生中期後半の甕形土器の底部で、上げ底となる。

瓦（165・166）165は須恵質の平瓦で、凸面に細縄叩きを施し、表面に粗砂が混入する。12世紀。166は須恵質の丸瓦で、凹面に布目痕を残す。8世紀。

時期：埋土上層出土遺物の特徴より、鎌倉時代後期、13世紀代の遺構とする。

池址３（第３図、図版５）

調査地北西部から南東部、Ａ１～Ｂ３区で検出した。池址３の想定範囲を第３図に示した。東西検出長9.2m、南北検出長9.3m、深さ50～90cmを測る。池址３上面は第Ⅴ層が覆う。構築方法は不明であるが、池址１と同様、池址２を埋め戻した後に造られており、埋め戻しには黄灰色土（B層：厚さ10～30cm）を使用している。池址３の掘り方は池址２より、やや内側にて検出した。池址３の埋土は３層に分層され、埋土上位から順に暗青灰色土（⑥層：厚さ10～40cm）、暗褐色土（⑦層：厚さ20～40cm）、暗灰色土（⑧層：厚さ10～50cm）である。このうち、⑥層掘り下げ時に、遺物がまとまって出土した地点が４箇所あり、これらを土器溜まり（①～④）として範囲のみを図化し、遺物を取り上げた。遺物は各層ごとに散在して出土したが、最終的な土層観察結果によると、実際には池址３下面に池址２や池址１、または第Ⅵ層が存在することから、各層で取り上げた遺物は、これらの遺構や包含層帰属品と混在している可能性が高い。出土品は、埋土上位にある⑥層中からは主に室町時代、⑦層以下からは鎌倉時代から室町時代までの土師器や須恵器、瓦器、陶磁器等が多数出土した。とりわけ、⑧層掘り下げ時に検出した土器溜まりからは、完存品を含む比較的遺存状態の良好な土器類が出土しており、池址に関わる土器の廃棄、あるいは祭祀的行為の表れではないかと推測される。

出土遺物（第13～23図、図版10～13）

（ⅰ）⑥層上位出土品（167～174）

土師器（167～170）167は坏で、底部に焼成前の穿孔（径７㎜）を施す。168は土釜または土鍋の底部、169は脚部片である。170は土壁の一部と思われるもので、表面に植物繊維の痕跡がわずかに残る。

瓦質土器（171）171は瓦質の鉢で、口縁部は内傾する。

瓦　器（172）172は楠葉型瓦器椀で、口縁部内面に１条の沈線が巡る。体部上位に稜をもち、内外面共にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

陶磁器（173）173は備前焼の擂鉢で、口縁部に凹線２条、体部内面に条線が残る。16世紀。

須恵器（174）174は器台の坏部片で、凸線間に波状文を施す。５世紀後半。

（ⅱ）⑥層下位出土品（175～189）

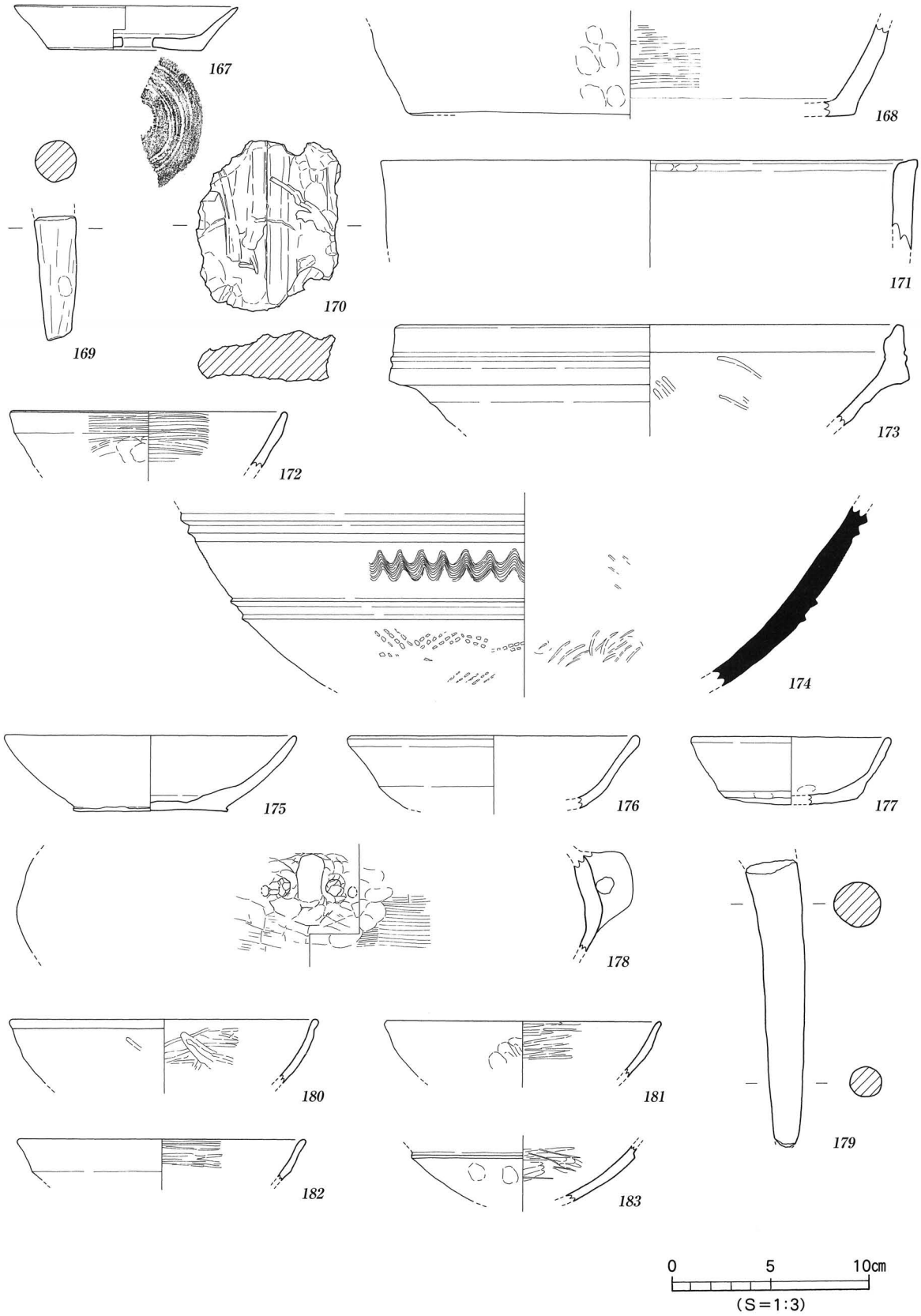
土師器（175～179）175～177は坏である。175の底部切り離しは回転糸切り技法による。177は小型の坏で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。11世紀。177は茶釜で、把手部に径８㎜大の孔を穿ち、孔内に金属塊が付着する。178は土釜または土鍋の脚部片である。13世紀。

瓦　器（180～183）180～183は和泉型瓦器椀で、体部内面にヨコまたはナナメ方向のヘラミガキが残る。12～13世紀。

陶磁器（184～186）184は亀山焼の甕で、口縁端面はナデ凹む。185は備前焼の擂鉢である。16世紀。186は肥前系の碗で、全面に施釉される。18世紀。

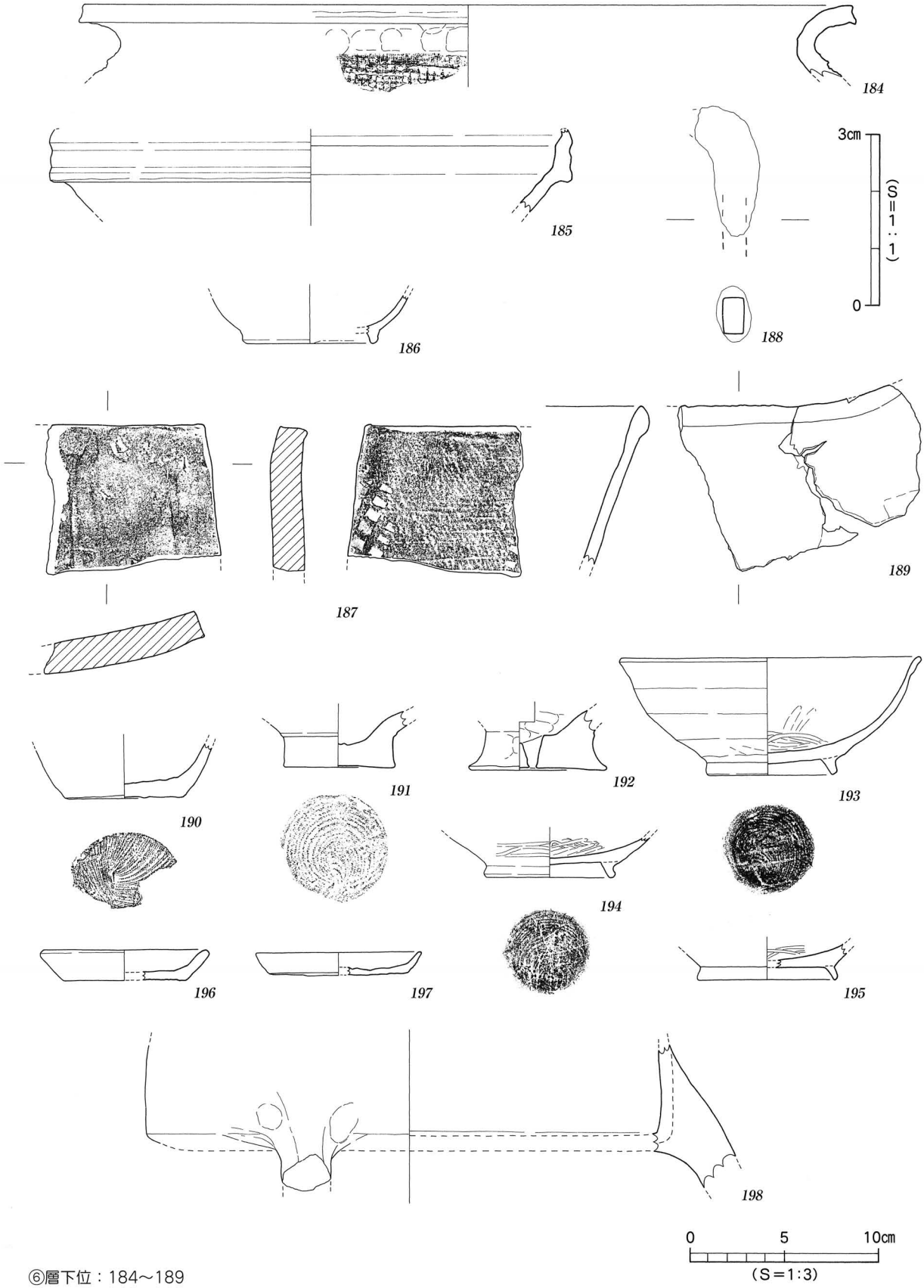
瓦（187）187は平瓦で、凸面に細縄叩きと格子叩きを施す。８世紀。

鉄製品（188・189）188は鉄釘、189は鉄鍋の口縁部片である。



⑥層上位：167～174
⑥層下位：175～183

第13図　池址3 出土遺物実測図(1)



⑥層下位：184～189
⑦　　層：190～198

第14図　池址3 出土遺物実測図(2)

（ⅲ）⑦層出土品（190～204）

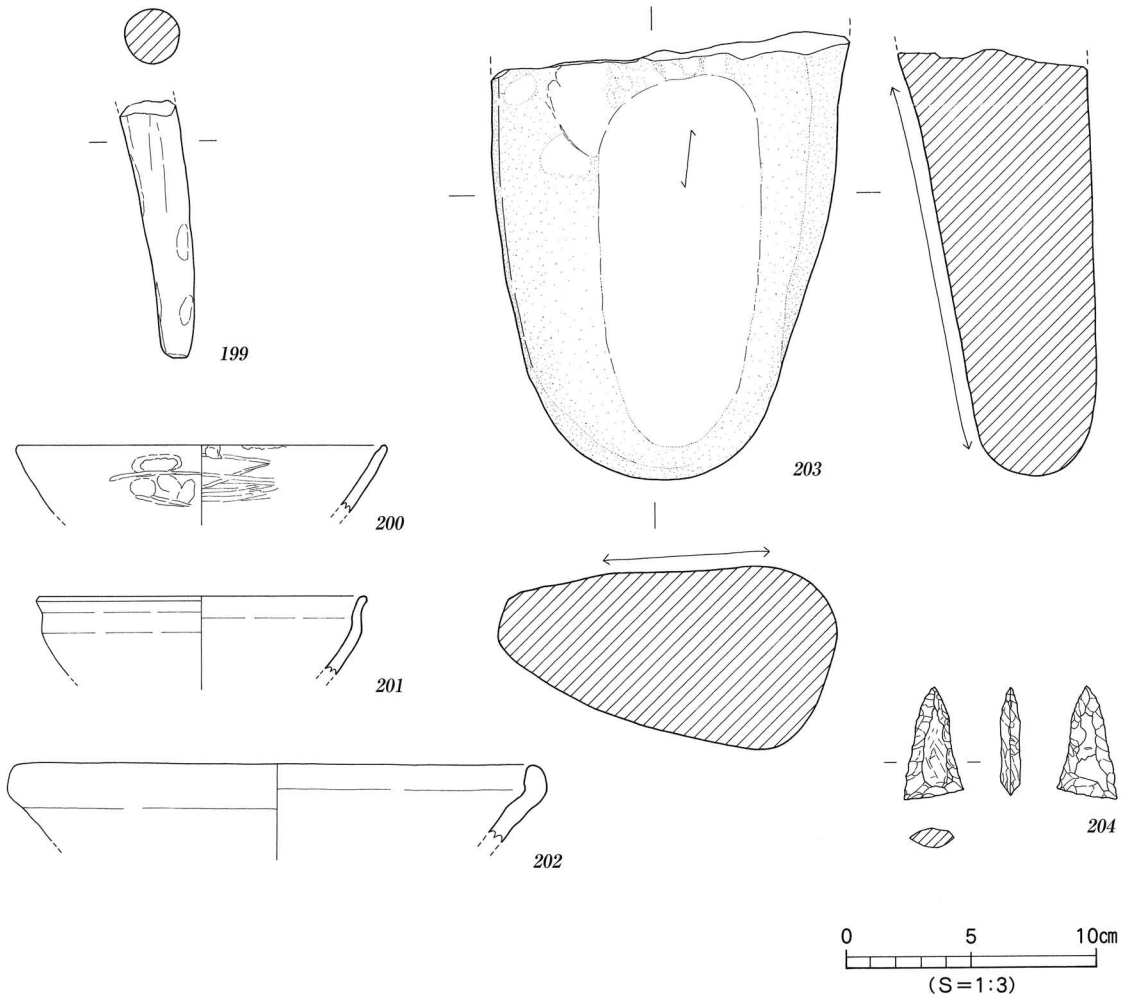
土師器（190～199）190～192は坏である。190の底部切り離しは静止糸切り技法による。15世紀。191・192の底部切り離しは回転糸切り技法によるもので、192の底部には焼成前の穿孔（径0.4～1.0cm）を施す。12世紀。193～195は椀である。短い高台をもち、底部内面にヘラミガキ調整を施す。194の底部外面には線刻が残る。底部切り離しは回転糸切り技法による。12世紀後半。196・197は皿で、体底部境界は明瞭である。底部切り離しは、196が回転糸切り、197は回転ヘラ切り技法による。12世紀。198は三足付土釜で、底部断面形態は方形状となる。199は土釜の脚部片で、断面三角形状を呈する。15世紀。

瓦　器（200）200は和泉型瓦器椀で、体部内面にヨコ方向のヘラミガキが残る。13世紀。

陶磁器（201）201は天目茶碗で、内外面に鉄釉を施す。18世紀。

須恵器（202）202は東播系のこね鉢で、口縁部は上内方に肥厚する。14世紀。

石　器（203・204）203は結晶片岩製の砥石で、１面の砥面をもつ。204は弥生時代中期の平基無茎鏃で、平面形態は５角形を呈する。石材は不明。



⑦層：199～204

第15図　池址3 出土遺物実測図(3)

（ⅳ）⑧層出土品（205～222）

土師器（205～222）205～213は坏である。205～207は平底で、底部切り離しは回転糸切り技法による。208～213は円盤高台を呈する坏で、底部切り離しは213が回転ヘラ切り、その他は回転糸切り技法による。209の底部内面には沈線状の凹みが巡る。214～220は椀である。216・219・220は底部内面にヘラミガキ調整を施す。221・222は皿である。円盤高台状の底部をもち、口縁部は上外方に直線的にのびる。

（ⅴ）土器溜まり①出土品（223～230）

土師器（223～225）223は坏、224・225は皿である。底部切り離しは223が回転糸切り、224・225は回転ヘラ切り技法による。

瓦　器（226・227）226は楠葉型、227は和泉型瓦器椀である。内外面共にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。12～13世紀。

須恵器（228）228は坏Bの底部片で、断面方形状の高台をもつ。8世紀。

弥生土器（229）229は弥生中期後半の甕形土器の底部で、上げ底となる。

瓦（230）230は須恵質の平瓦で、凸面に細縄叩きをナデ消した後、格子叩きを施す。8世紀。

（ⅵ）土器溜まり②出土品（231～298）

土師器（231～293）

231～264は坏である。231～247は平底、248～254は円盤高台状の底部をもつものである。口径13～15cm、器高3.0～6.2cmを測り、底部切り離しは回転ヘラ切り技法によるもの（231～233、235～237、239～242、245～247、249～253）と回転糸切り技法によるもの（234、238、243、244、248）がある。234の体部内面には土器重ね焼きの痕跡が残る。246は胎土に金ウンモを多く含み、色調は黄褐色を呈する。256～264は底部で、256～263は平底、264は円盤高台状の底部である。底部切り離しは回転ヘラ切り技法によるもの（256、260、261、263）と回転糸切り技法によるもの（257～259、262、264）がある。265～267は椀で、長めの高台をもつ。268～284は皿である。この中には、完存品3点（270、271、278）、ほぼ完形品2点（268、269）がある。体底部の境界は不明瞭なものが多く、器壁は3～4㎜大のものと2㎜程度のものとに分かれる。底部切り離しは回転ヘラ切り技法によるもの（268、269、271～278、280、282）と回転糸切り技法によるもの（270、279、281、284）がある。このうち、3点（272、273、278）の内外面には煤が付着する。285～288は土鍋である。口縁部は外反し、内外面共に指頭痕が顕著に残る。12～13世紀。289～293は内黒椀である。291・293の底部外面には高台接合のための目印と思われる沈線が2条残る。12世紀後半。

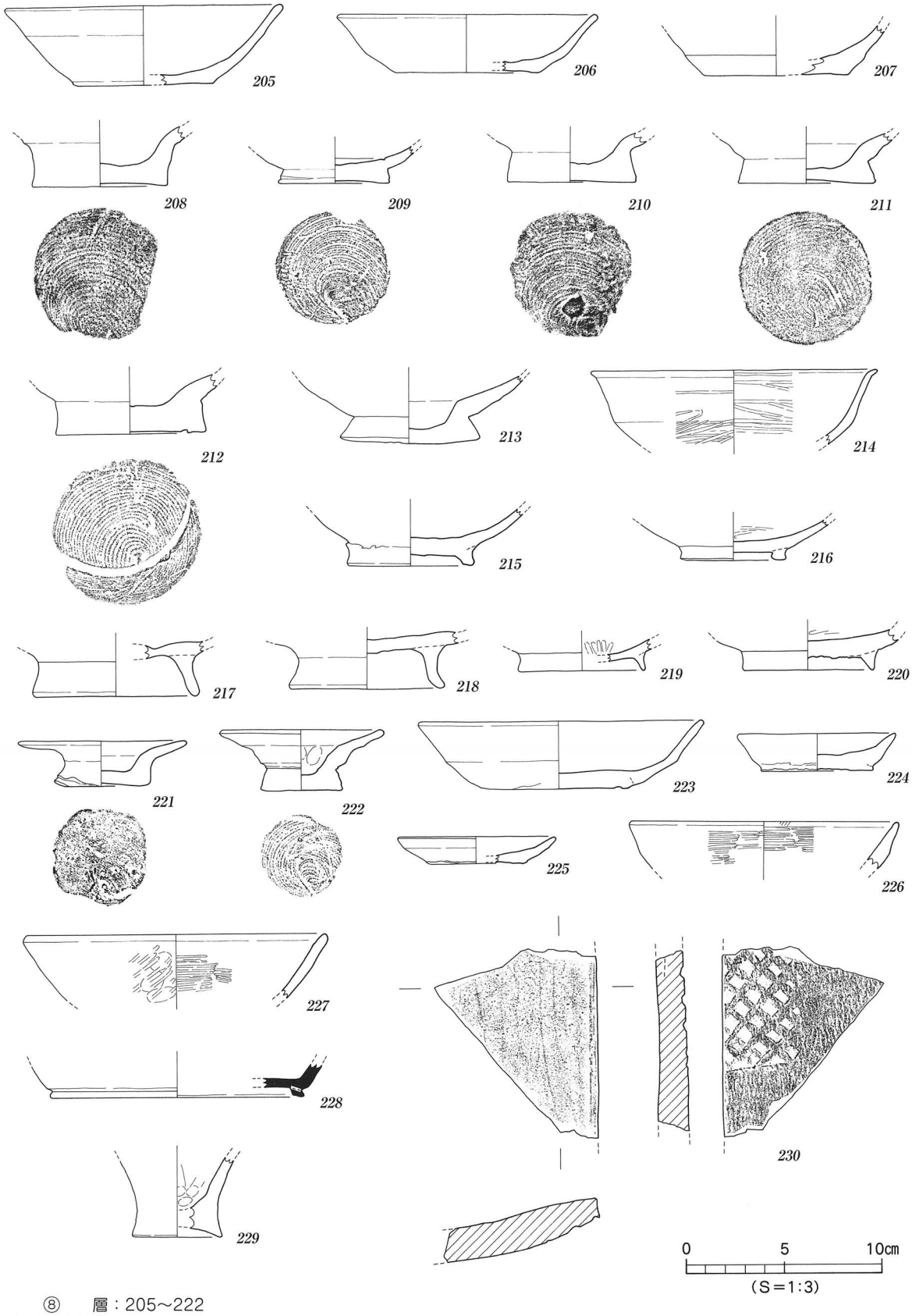
瓦　器（294・295）294は和泉型瓦器椀で、体部外面に指頭痕、内面にヨコ及びナナメ方向のヘラミガキ調整を施す。295は皿で、内面にナナメ方向のヘラミガキが残る。12～13世紀。

瓦（296・297）296・297は平瓦で、296の凸面には細縄叩きをナデ消した後、格子叩きを施し、凹面には布とじ痕が残る。8世紀。297は一枚作りで、凸面には太縄叩きを施す。12世紀。

石　器（298）298は小型の砥石で、1面の砥面をもつ。石材は不明。

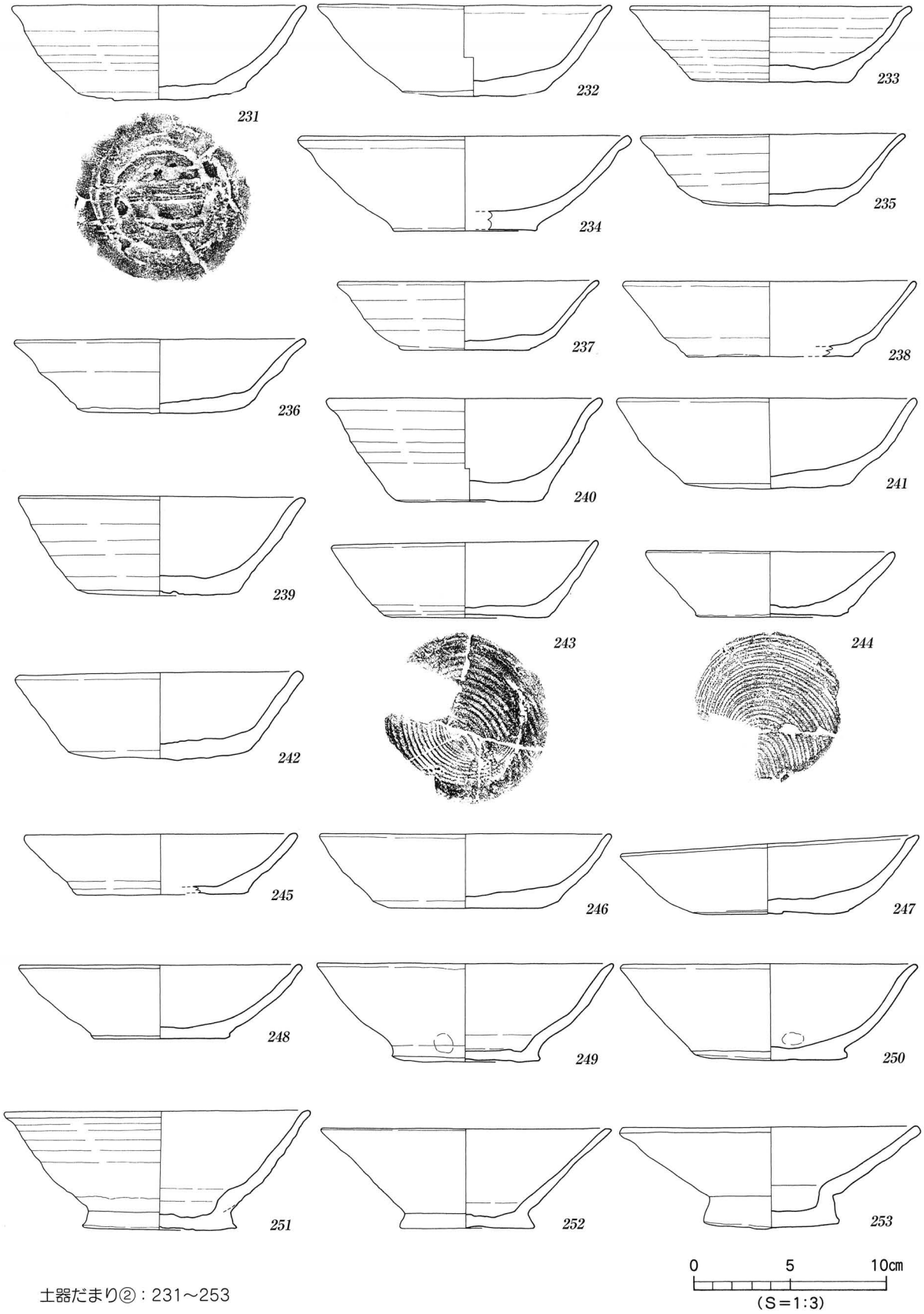
（ⅶ）土器溜まり③出土品（299～312）

土師器（299～305）299～304は坏である。299～303は平底、304は円盤高台状の底部をもつ。底部切り離しは回転糸切り技法によるもの（299、301、303、304）、回転ヘラ切り技法によるもの（300）がある。304の底部外面には切り込み状の線刻が残る。305は皿で、口縁部外面に煤が付着する。



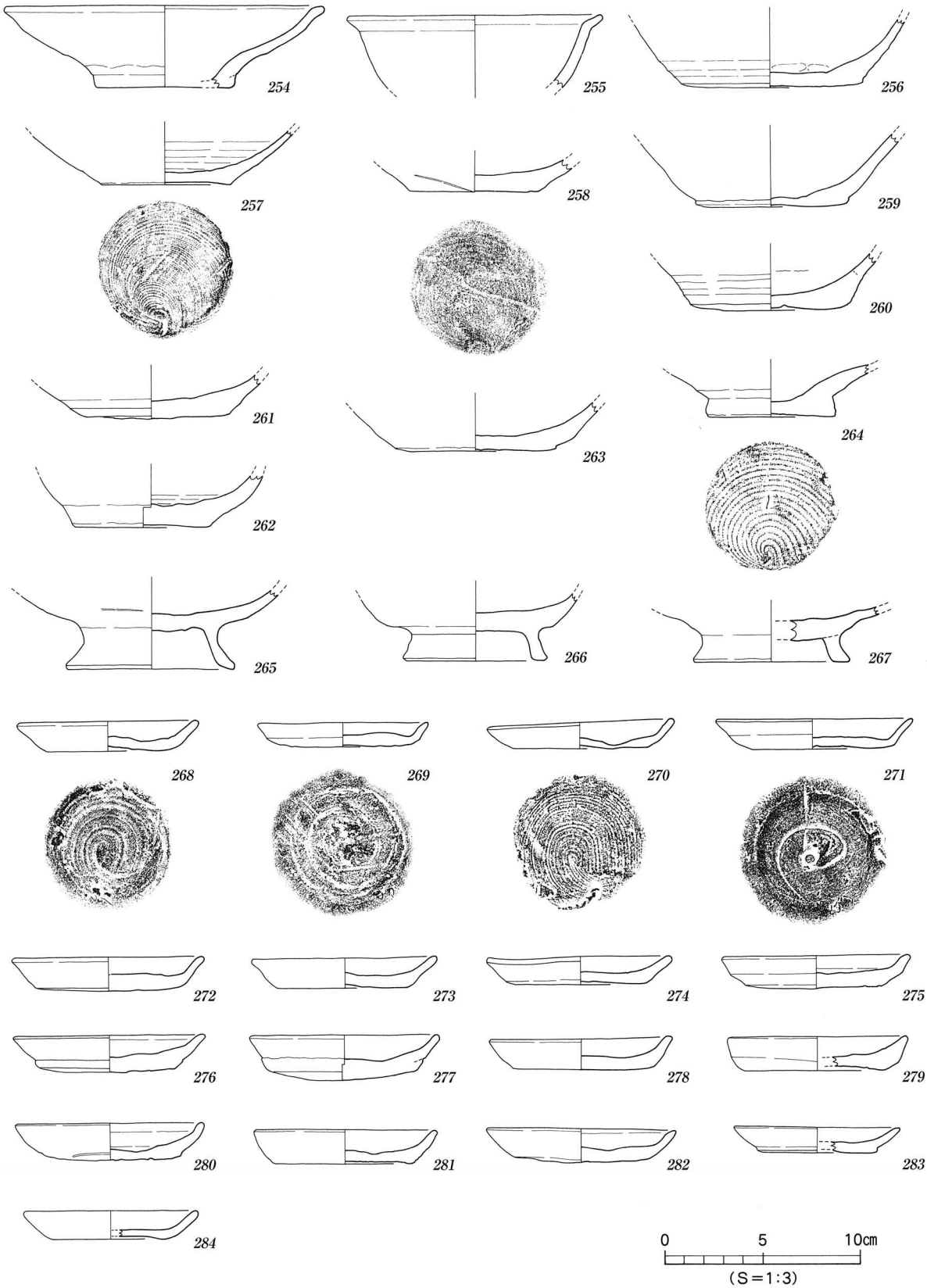
⑧　　層：205～222
土器だまり①：223～230

第16図　池址3 出土遺物実測図(4)



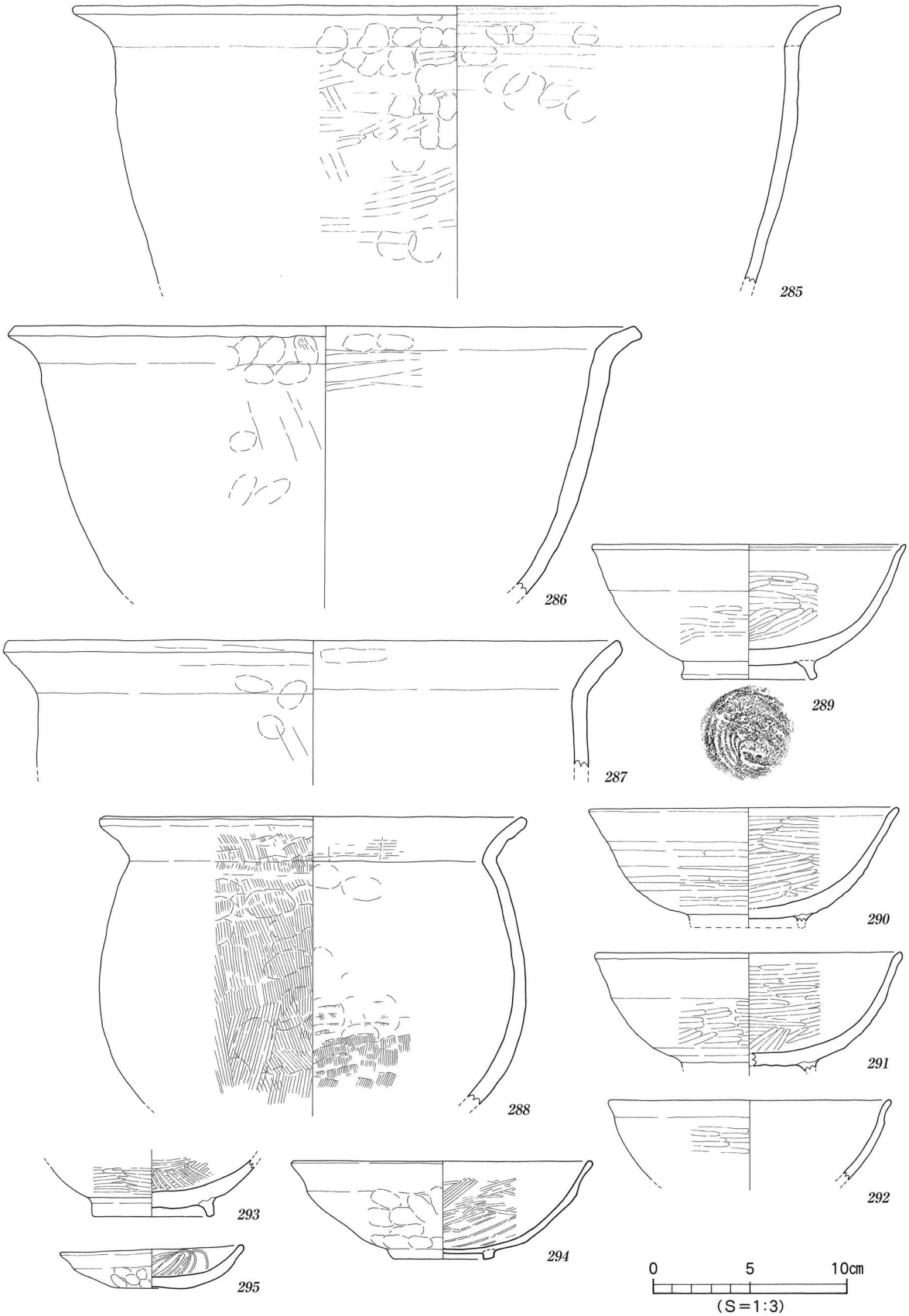
土器だまり②：231～253

第17図　池址3 出土遺物実測図(5)



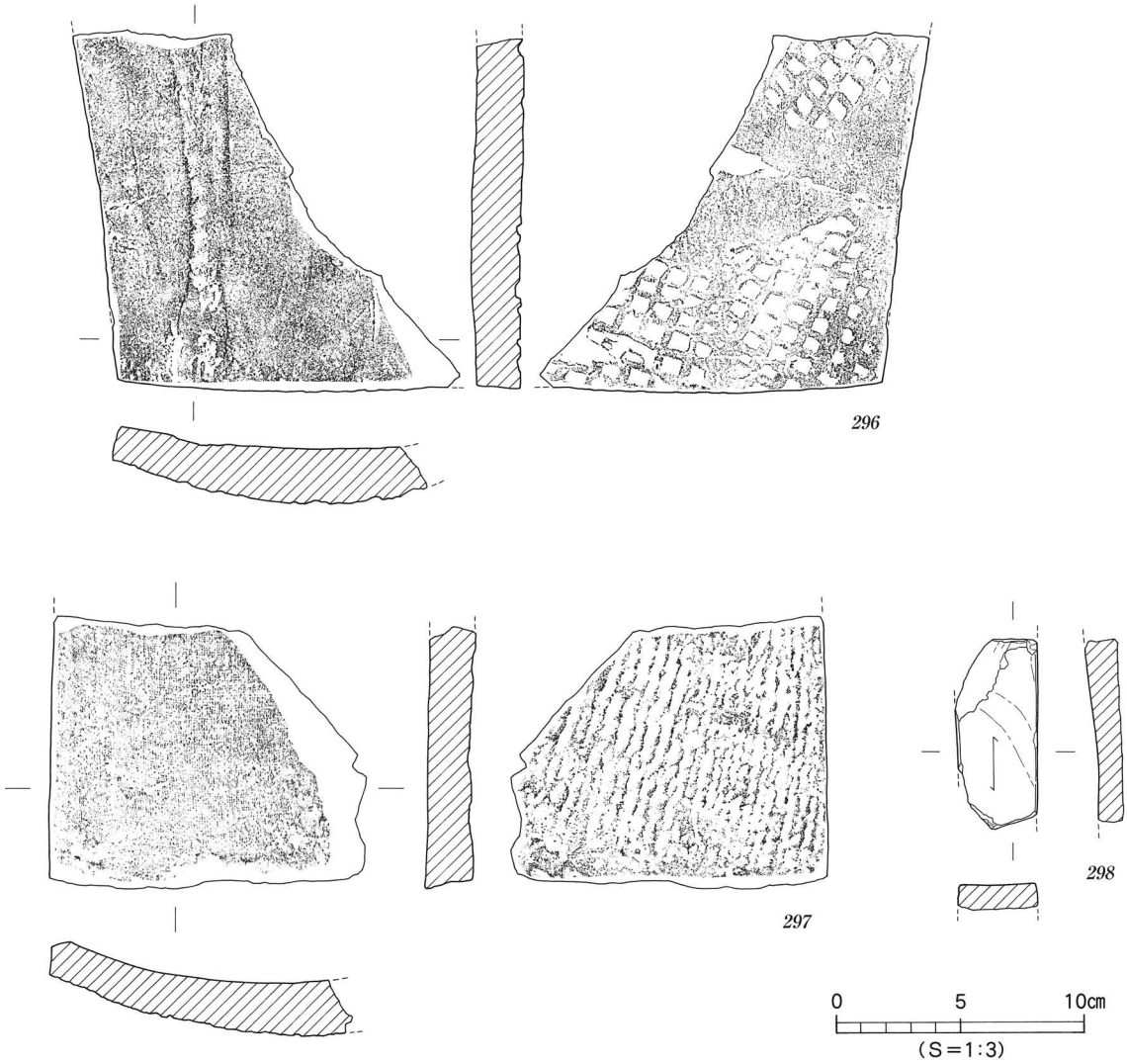
土器だまり②：254～284

第18図　池址3 出土遺物実測図(6)



土器だまり②：285～295

第19図　池址3 出土遺物実測図(7)



土器だまり②：296～298

第20図　池址3 出土遺物実測図(8)

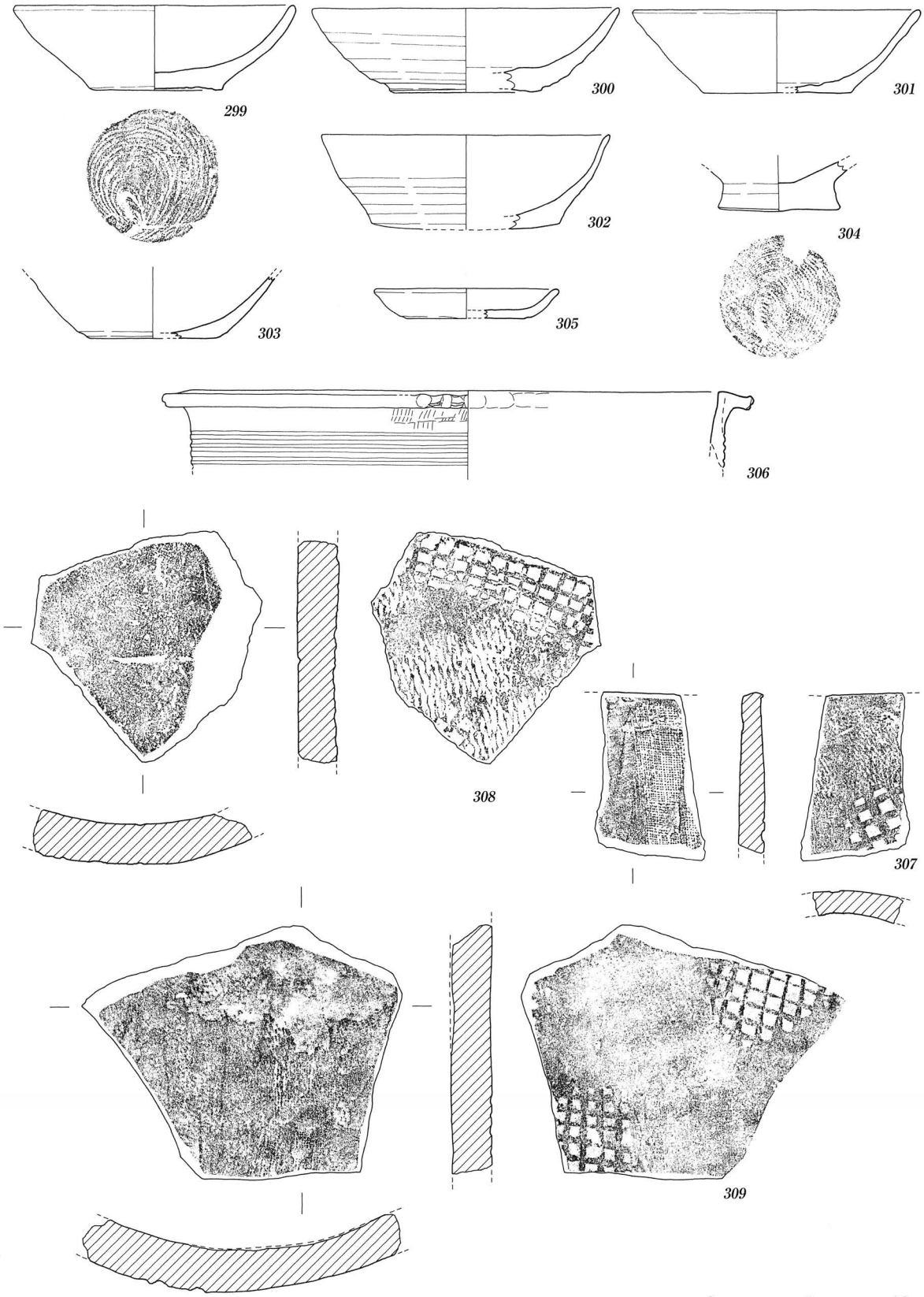
弥生土器（306）306は弥生前期末に時期比定される甕形土器で、胴部にヘラ描き沈線文４条以上、口縁端面に刻目を施す。

瓦（307～311）307は丸瓦、308～312は平瓦である。307・309・311は須恵質で、307～309の凸面には細縄叩きをナデ消した後、格子叩きを施す。８世紀。310・311は一枚作りで、凸面には太縄叩きを施す。９世紀。

石　器（312）312はサヌカイト製の平基無茎石鏃である。

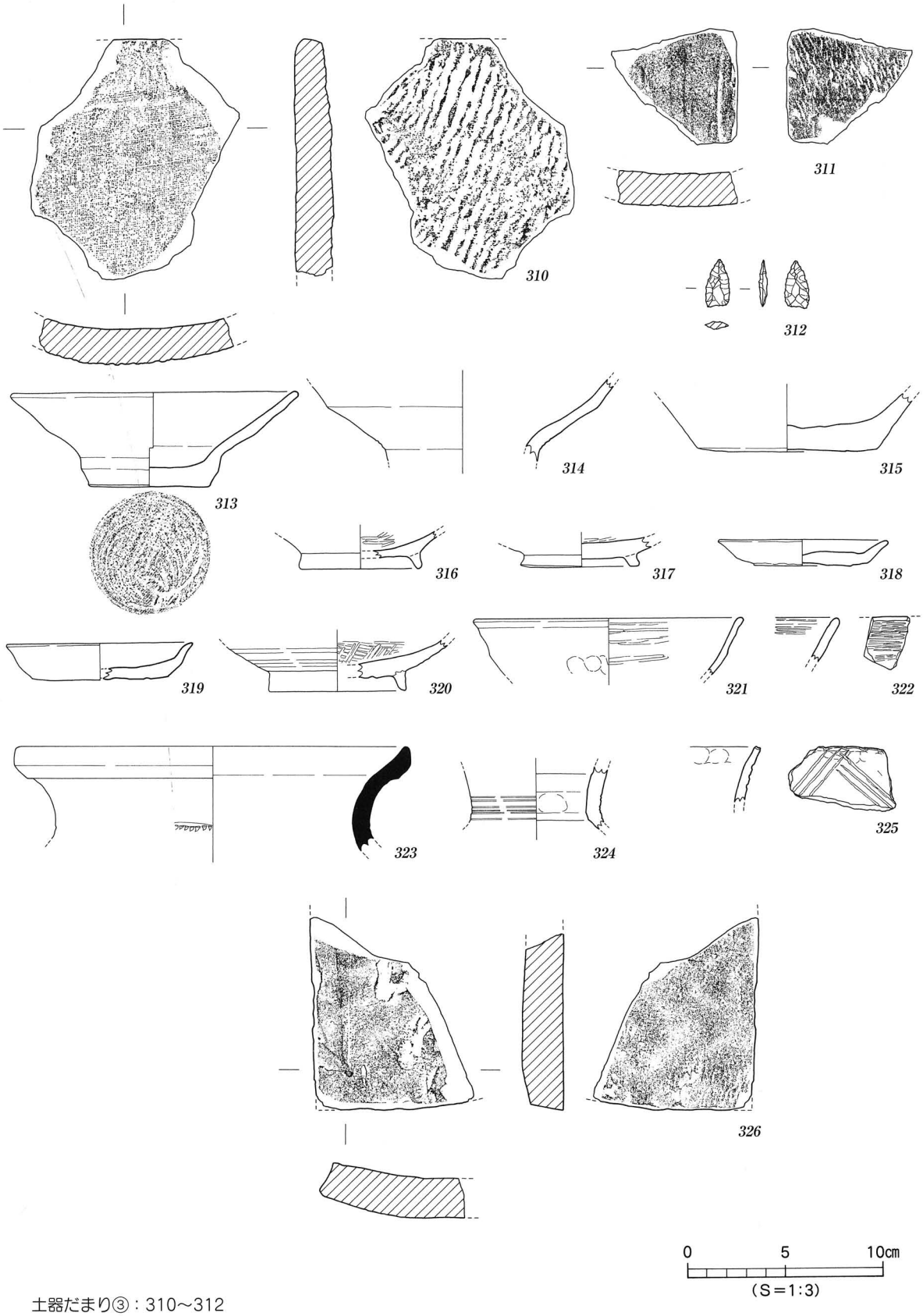
（Ⅷ）土器溜まり④出土品（313～330）

土師器（313～320）313～315は坏である。313は円盤高台状の底部をもち、底部外面に回転糸切り痕が残る。12世紀。316・317は椀である。317は色調が乳白色を呈し、精製された胎土であることから搬入品の可能性がある。318・319は皿で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。320は内黒椀で、高台接合面に２条の線刻が残る。11世紀末。



土器だまり③：299～309

第21図　池址3 出土遺物実測図(9)



土器だまり③：310～312
土器だまり④：313～326

第22図　池址3 出土遺物実測図(10)

瓦　器（321・322）321・322は和泉型瓦器椀で、体部内面にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

須恵器（323）323は甕の口頸部片で、頸部外面に三角形状の工具痕が残る。7世紀。

弥生土器（324）324は壺形土器の頸部片で、沈線状の凹みが巡る。弥生後期。

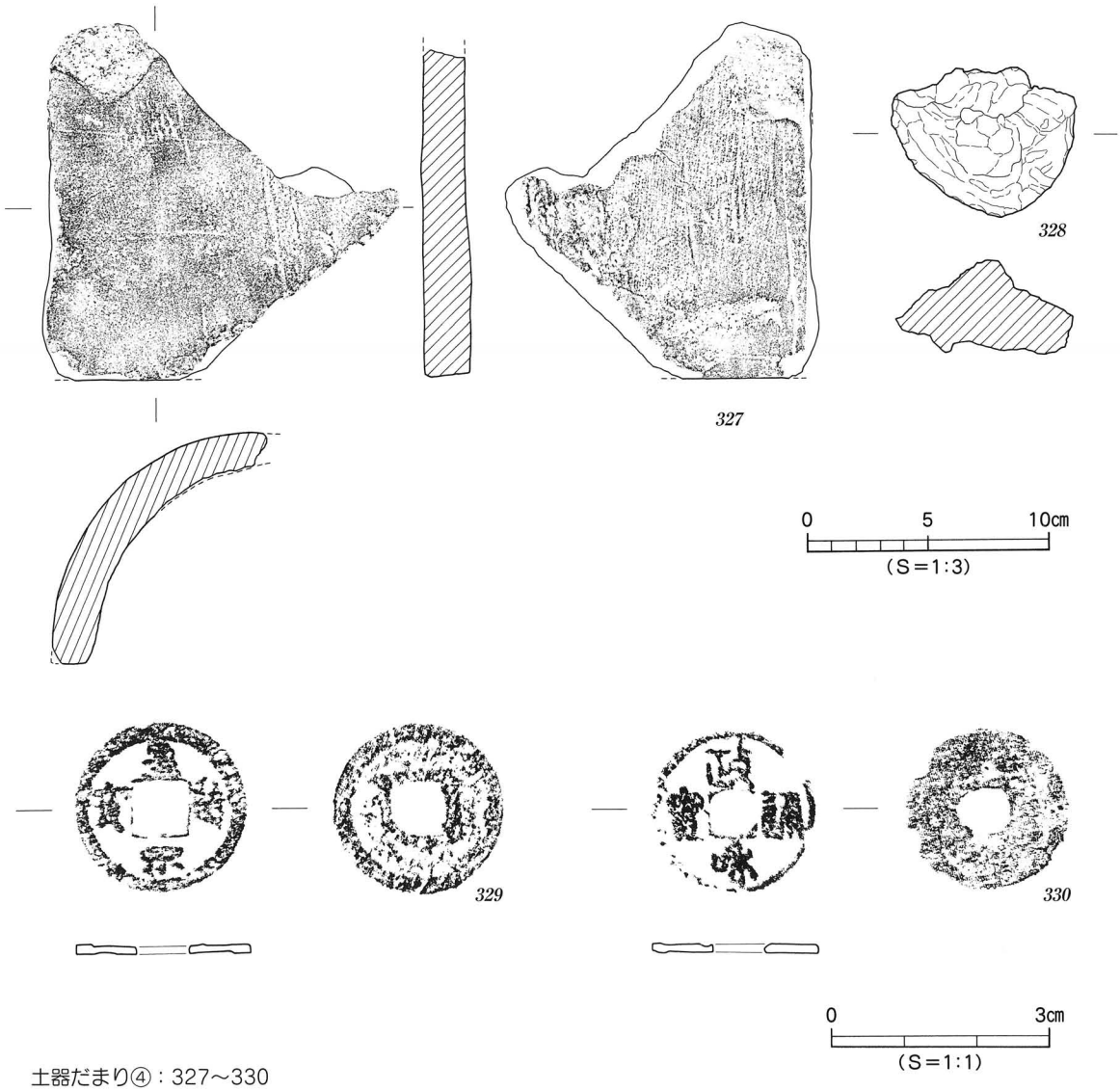
縄文土器（325）325は縄文晩期の深鉢片で、3条の沈線文を施す。

瓦（326・327）326は平瓦で、凸面に細縄叩きを施す。327は丸瓦で、凸面は細縄叩きをナデ消している。

鉄（328）328は鉄宰で、重量142.49gを測る。

銭　貨（329・330）329は皇栄通寶、330は政和通寶で、年号はそれぞれ西暦1039年、1111年である。

時期：埋土上位出土品の特徴より、室町時代後期、15世紀代の遺構とする。



土器だまり④：327～330

第23図　池址3 出土遺物実測図(11)

池址４（第３図、図版５）

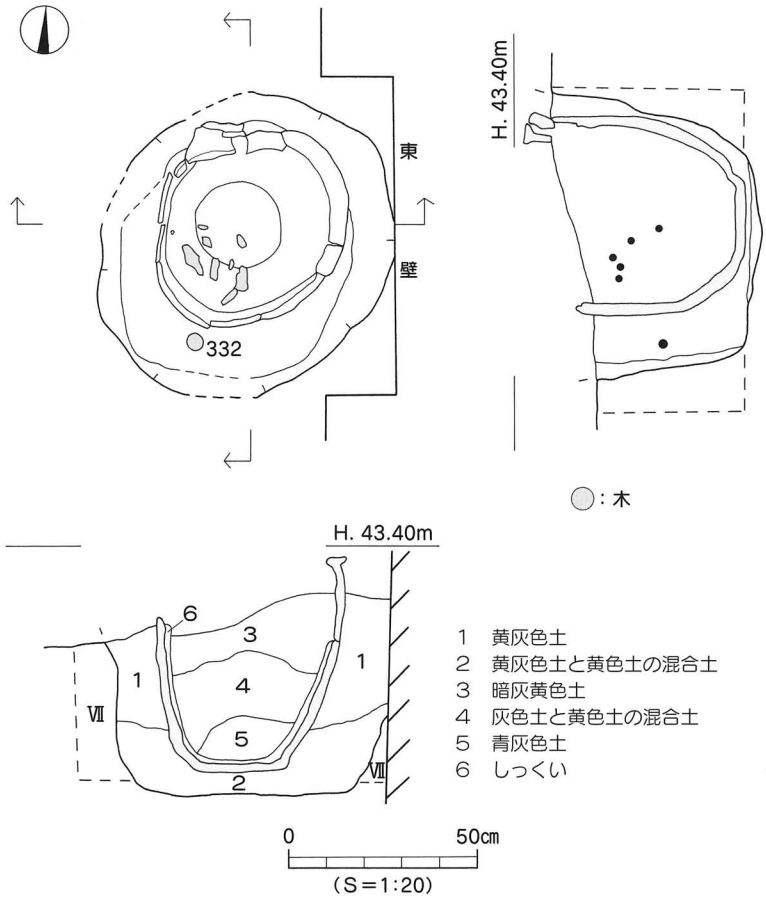
調査地南西部、Ａ２・３区で検出した。想定範囲を第３図に示した。掘り方の平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、掘り方規模は、東西検出長2.4m、南北検出長3.9m、深さ80cmを測る。池址４上面は第Ⅲ層黄褐色土が覆う。調査区西壁の崩落により検出した池址で、調査区西壁、南壁及び東西ベルトの土層観察により池址１や池址２と同様、掘り方と池垣との間に明褐色土（⑨層：厚さ40～60cm）と暗茶色土（⑩層：厚さ10～20cm）を充填し構築されている。池垣は径10～20cm大の円礫を7～９段程度積み重ね、高さ80cm余りとなっている。池址４からは遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期特定は困難であるが、池址３埋没後に構築されていることから、概ね16世紀以降の遺構とする。

（２）土坑

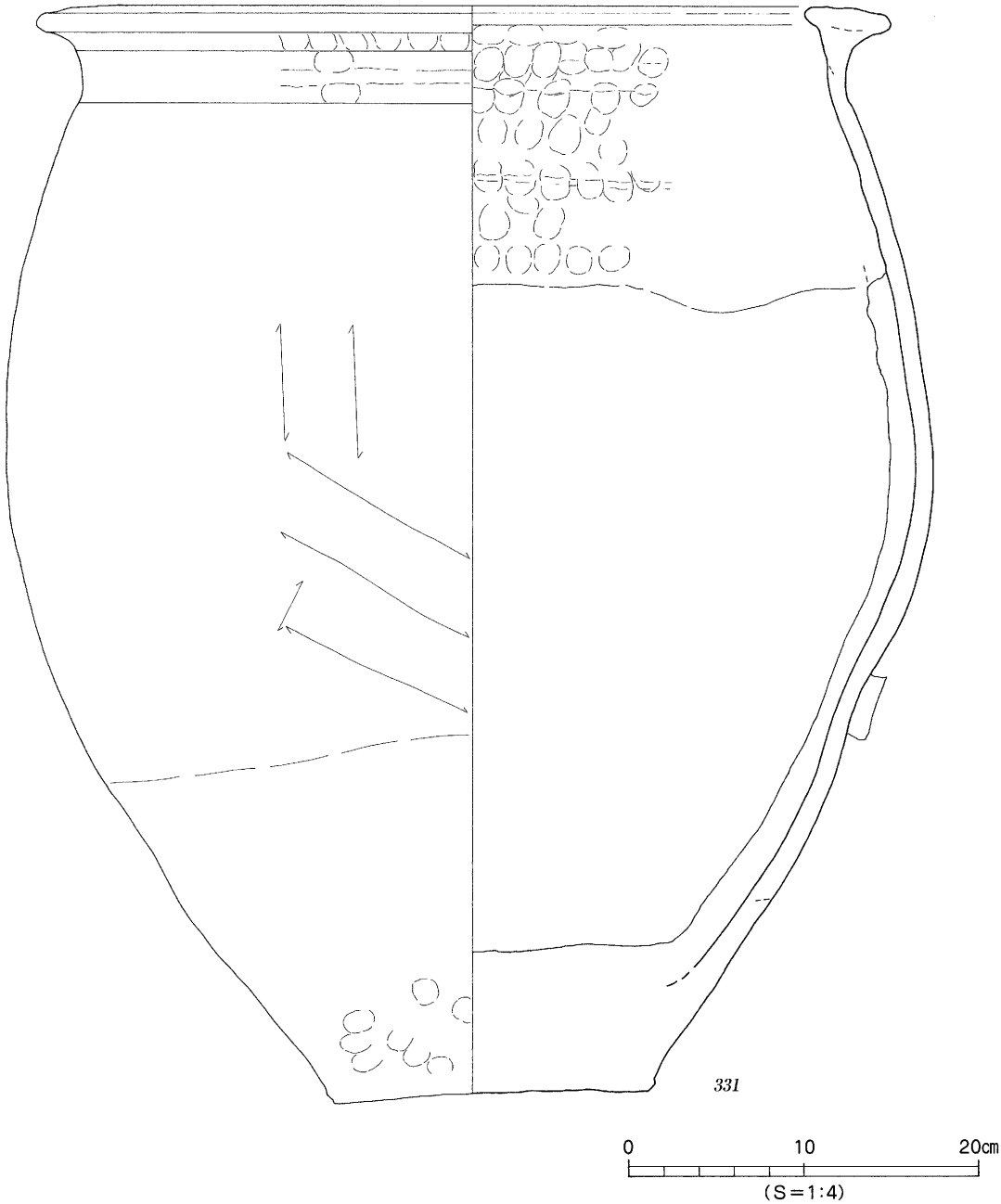
ＳＫ１（第３・24図、図版６）

調査区北東部、Ｂ１区で検出した。第Ⅶ層（岩盤）上面での検出であり、遺構上部は第Ⅰ層が覆う。ＳＫ１は甕を土坑内に埋置した、いわゆる埋甕遺構である。土坑掘り方の平面形態は楕円形を呈し、規模は長径84cm、短径74cm、深さは検出面下55cmを測る。

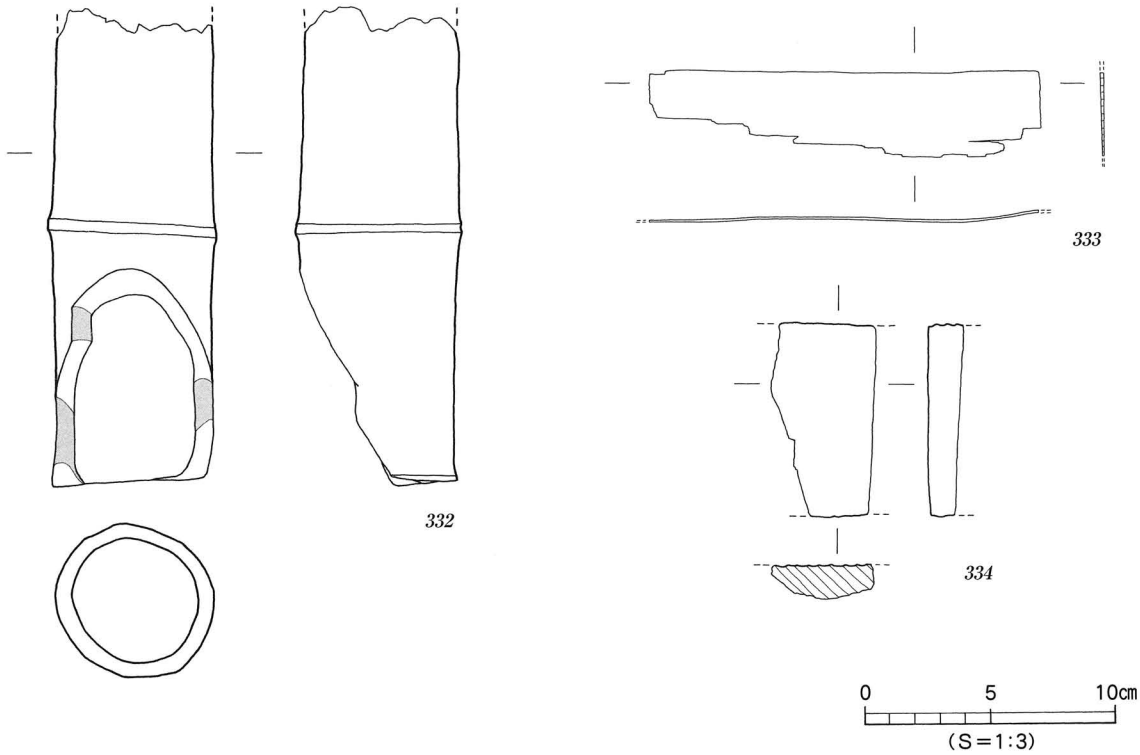


第24図　SK1測量図

断面形態は逆台形状を呈するが、壁体中位はやや筒状となる。掘り方底面はほぼ平坦で、壁体及び底面は第Ⅶ層となる。掘り方埋土は上層が黄灰色土（１層）、下層が黄灰色土と黄色土の混合土（２層）である。使用する甕は肥前焼の製品で、土坑掘り方壁体より内側に10～20cm、底面からは６cm程度の位置に埋置されている。甕は重機による表土掘削時に口縁部の一部を欠損したが、ほぼ完形品で、甕の内側には胴部から底部にかけて、厚さ１cm程度の漆喰が塗られていた。甕内の埋土は３層に分層され、上位から順に暗灰黄色土（３層）、灰色土と黄色土の混合土（４層）、青灰色土（５層）である。なお、４層中からは木製品や切りクズが数点出土した。また、掘り方埋土中からは竹の棒が突き刺さ



第25図　SK1 出土遺物実測図(1)



第26図　SK1 出土遺物実測図(2)

った状態で出土した。このほか、甕内の土壌を採取し、分析をおこなった結果、寄生虫卵を検出した。土坑の性格は断定できないが、分析結果や木類の出土等からトイレとして利用された遺構の可能性が高い。

出土遺物（第25・26図、図版13）

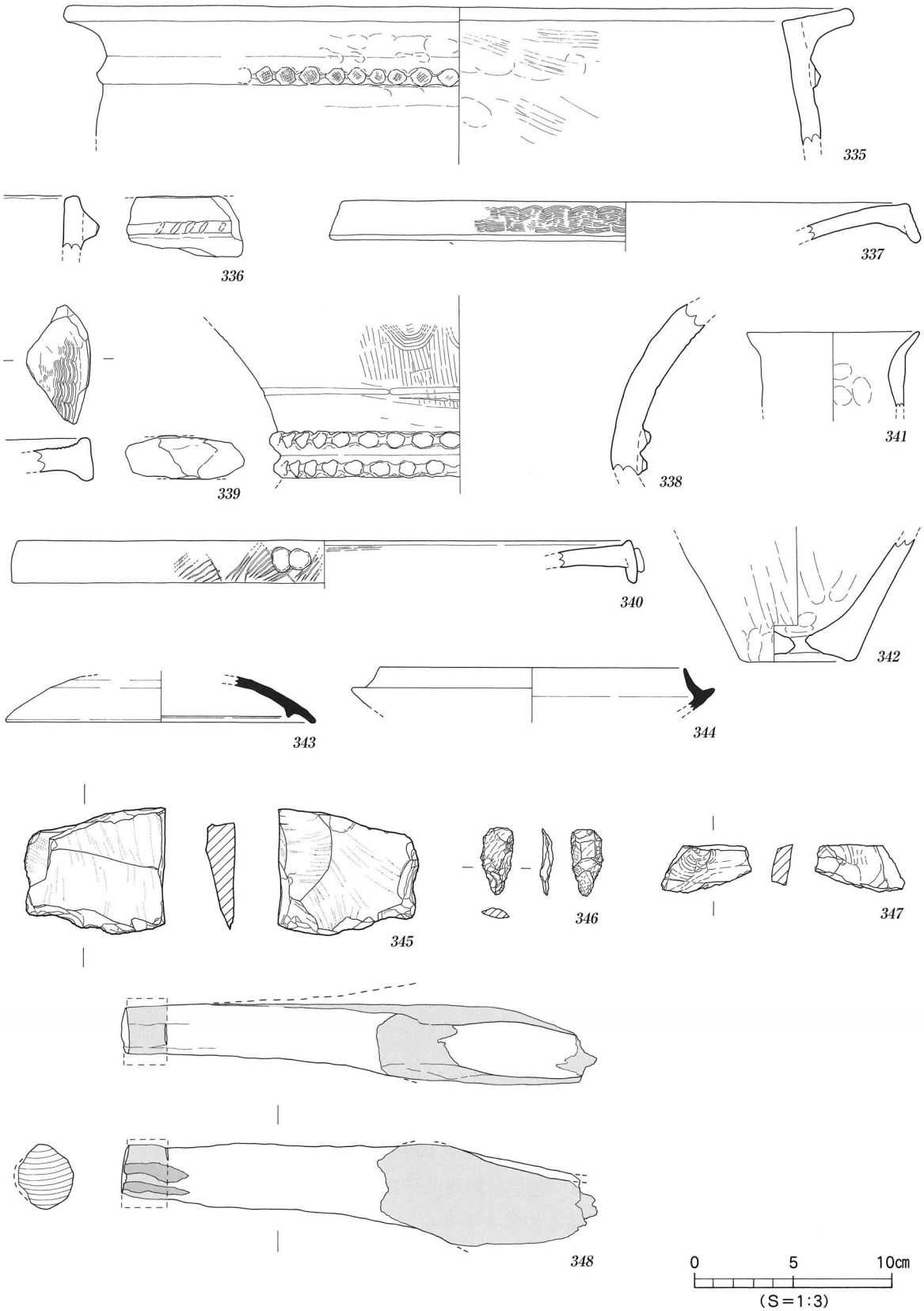
331は肥前系の甕である。口縁部は一部欠損するものの、ほぼ完形品で、口径39.4cm、底径19.0cm、器高62.9cmを測る。胴部内面上位から底部にかけて、厚さ５～８㎜程度の漆喰が貼り付けられている。322はＳＫ１掘り方埋土から出土した竹棒で、残存長18.9cmを測る。333・334は甕内埋土出土品で、333は薄板（厚さ１㎜）、334は切りくずである。

時期：出土した甕の特徴より、江戸時代後期、18世紀代の遺構とする。

（３） その他の遺構と遺物（第27～33図、図版７・14）

１）第Ⅵ層出土遺物（335～348）

弥生土器（335～342）335・336は甕形土器である。335は貼付口縁で、口縁下に凸帯を貼付、凸帯上に押圧文を施す。弥生中期中葉。336は口縁下に刻目凸帯文を貼り付ける。弥生前期末。337・338は壺形土器で、337は口縁部が垂下し、櫛描き波状文８条を施す。弥生後期末。338は頸部に波状文と沈線文、貼付による押圧凸帯文を施す。弥生中期中葉。339・340は器台形土器で、339は坏部上面に櫛描き波状文６条以上を施す。340は口縁端面に２ケ１組の円形浮文と三角形状の斜線文を施す。弥生後期後半。341は鉢形土器で、胴部内面に指頭痕が顕著に残る。342は所謂コシキ形土器で、甕形土器の転用品である。底部に焼成前穿孔（径６㎜）を施す。弥生後期。



第27図　第Ⅵ層 出土遺物実測図

須恵器（343・344）343は坏Ｂの蓋で、たちあがり端部は尖る。７世紀後半。344は坏身片である。

石　器（345～347）345は石庖丁で、敲打段階の未成品である。サヌカイト製。346はほぼ完形の打製石錐である。サヌカイト製。347は赤色珪質岩製の剥片である。

木　器（348）348は用途不明の容器で、断面円形を呈する。ヒノキ製。

２）トレンチ出土遺物（349～443）

土師器（349～401）349～372は坏である。349～361は平底、362～372は円盤高台状の底部をもつものである。357は完存品、349・350はほぼ完形品である。底部切り離しは回転糸切り技法によるもの（349～353、357、359、363、368、369、371）、回転ヘラ切り技法によるもの（354～356、360、361、365～367、370）、不明なもの（358、362、364、372）がある。このうち、369の底部には焼成前穿孔（径８㎜）が施される。372の体底部境界付近外面には籾圧痕が残る。373～380は椀である。377の内面には土器重ね焼き痕が残る。379は白色系土師器椀で、底部内面に暗文状のミガキを施す。380は内黒椀である。381～394は皿である。381は円盤高台状の底部を持ち、底部切り離しは回転糸切り技法による。その他の皿の底部切り離しは、回転ヘラ切り技法によるもの（382～385、392～394）、回転糸切り技法によるもの（387～391）、不明なもの（386）である。395・396は土鍋で、395は口縁端部に三角形状の凸帯が巡る。396は鍔上面に未貫通の円孔を穿つ。13世紀。397・398は古墳時代中期後半の甕形土器で、397の胴部内面にはヘラケズリ調整を施す。399は鉢形土器で、内外面共には指頭痕が顕著に残る。400は皿で、底部外面に指頭痕が残り、内面には放射状暗文を施す。400は高坏で、坏底部外面にヘラミガキ、内面には放射状暗文を施す。８世紀。

瓦　器（402～409）402～408は和泉型瓦器椀で、402～406は体部上位に稜をもち、体部外面には指頭痕、内面にはヘラミガキを施す。409は皿で、体部中位に稜をもち、内面にジグザグ状のヘラミガキを施す。

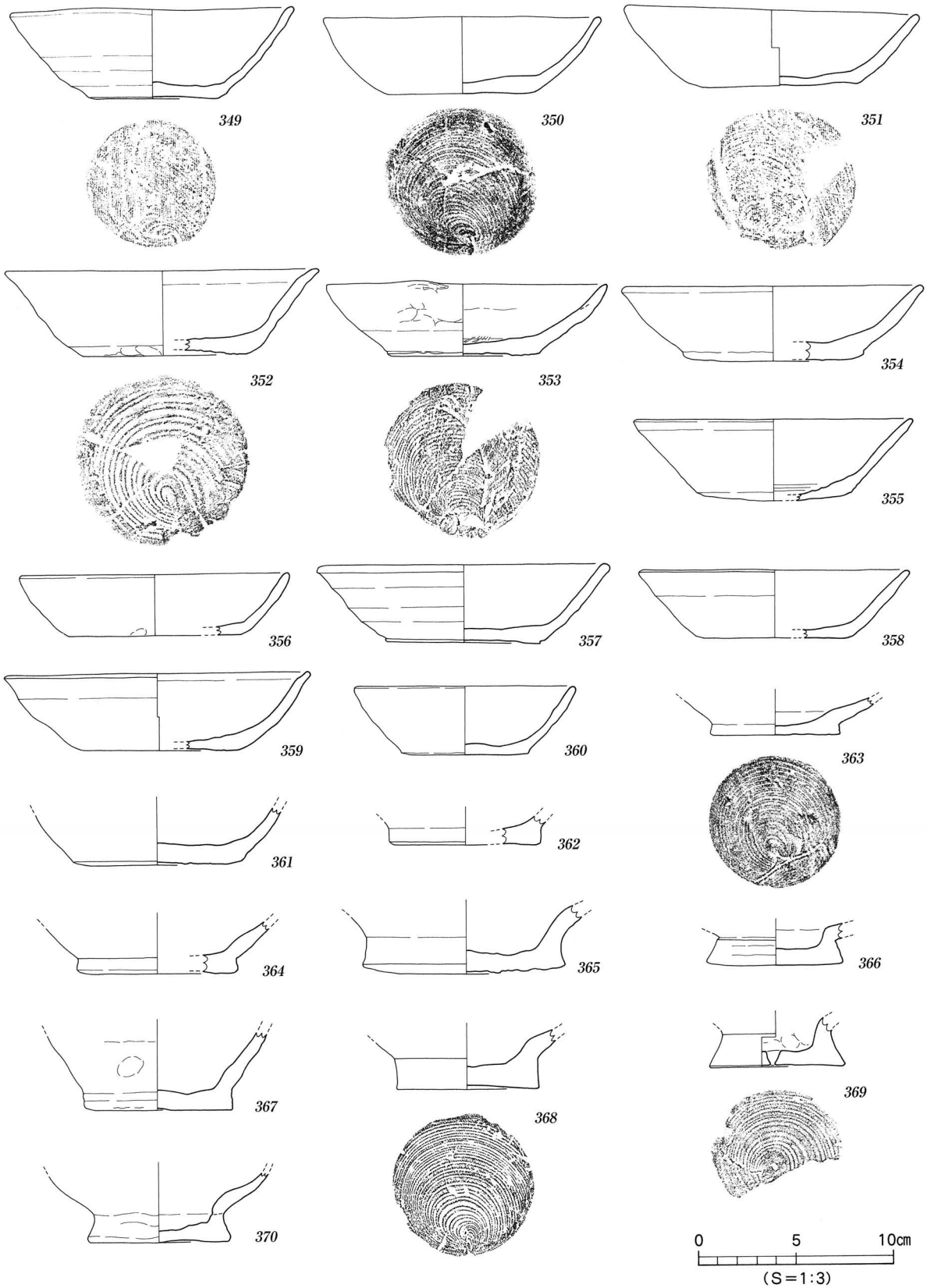
陶磁器（410～415）410は白磁碗Ⅳ類、411は青磁香炉である。12世紀。412は暗茶色を呈する破片で、口縁部内面のみに施釉される。時期、器種共に不明。413はこね鉢、414は京焼きの碗で、414の底部外面には「清水」の銘を施す。18世紀。

須恵器（416～421）416・417は坏蓋片、418～420は坏身片である。420の底部外面にヘラ記号が残る。421は壺の肩胴部片で、肩部に沈線文と斜線文を施す。422は提瓶の口縁部である。６～７世紀。

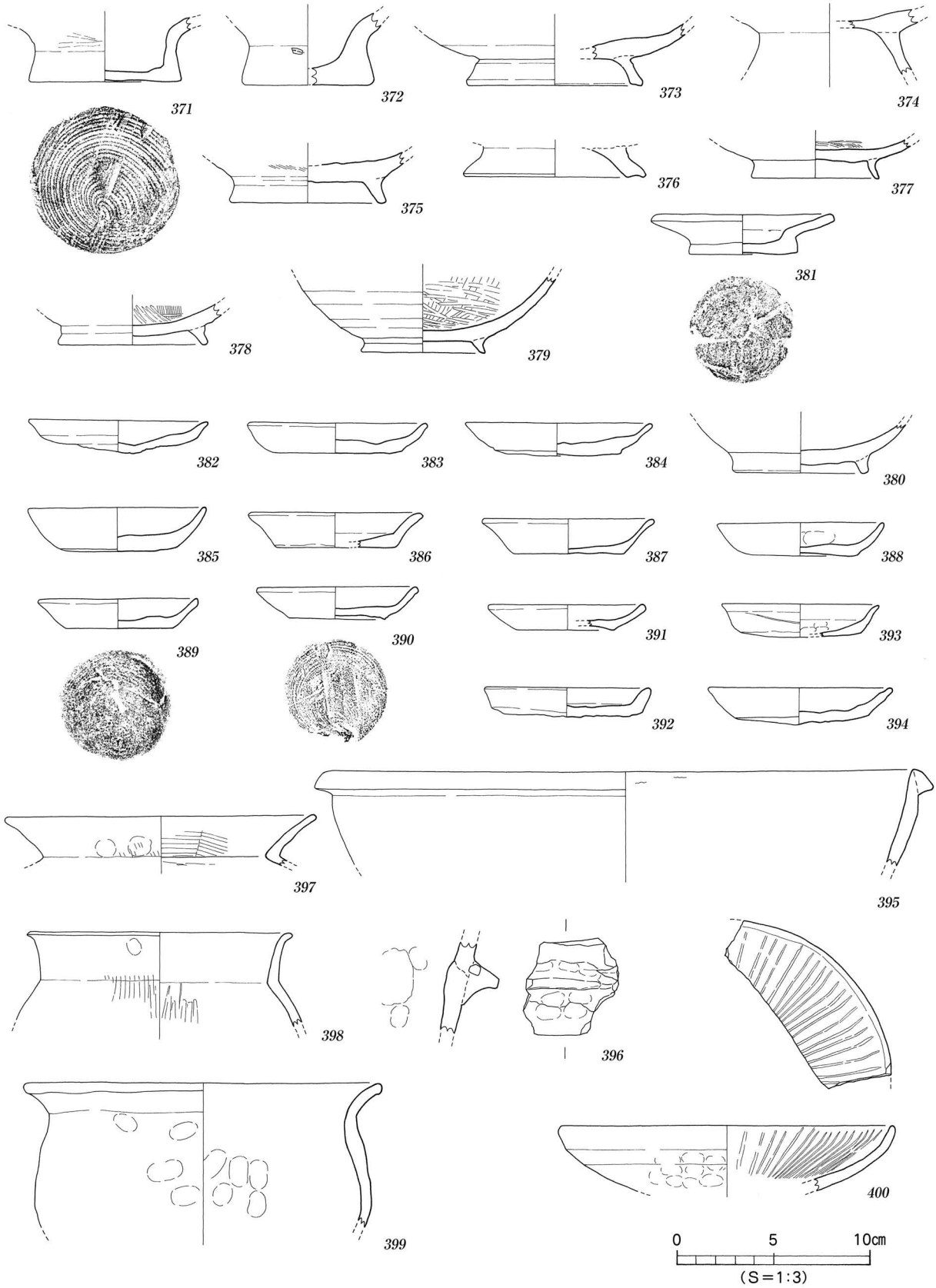
弥生土器（423～429）423～427は壺形土器である。423は弥生前期末の口縁部片で、口縁内面に貼付凸帯文１条、口縁端面に無軸の羽状文を施す。424は複合口縁壺で、口縁部に波状文を施す。弥生後期後半。425は頸部片で、凸帯上に斜格子目文を施す。426は胴部片で、貝殻施文による沈線文と押圧凸帯文を施す。弥生前期末。427は壺形土器、428は甕形土器の底部である。429は器台形土器の柱部片で、径２㎝大の円孔を穿つ。弥生後期後半。

土師器（430）430は坏で、内面に暗文を施す。８世紀。

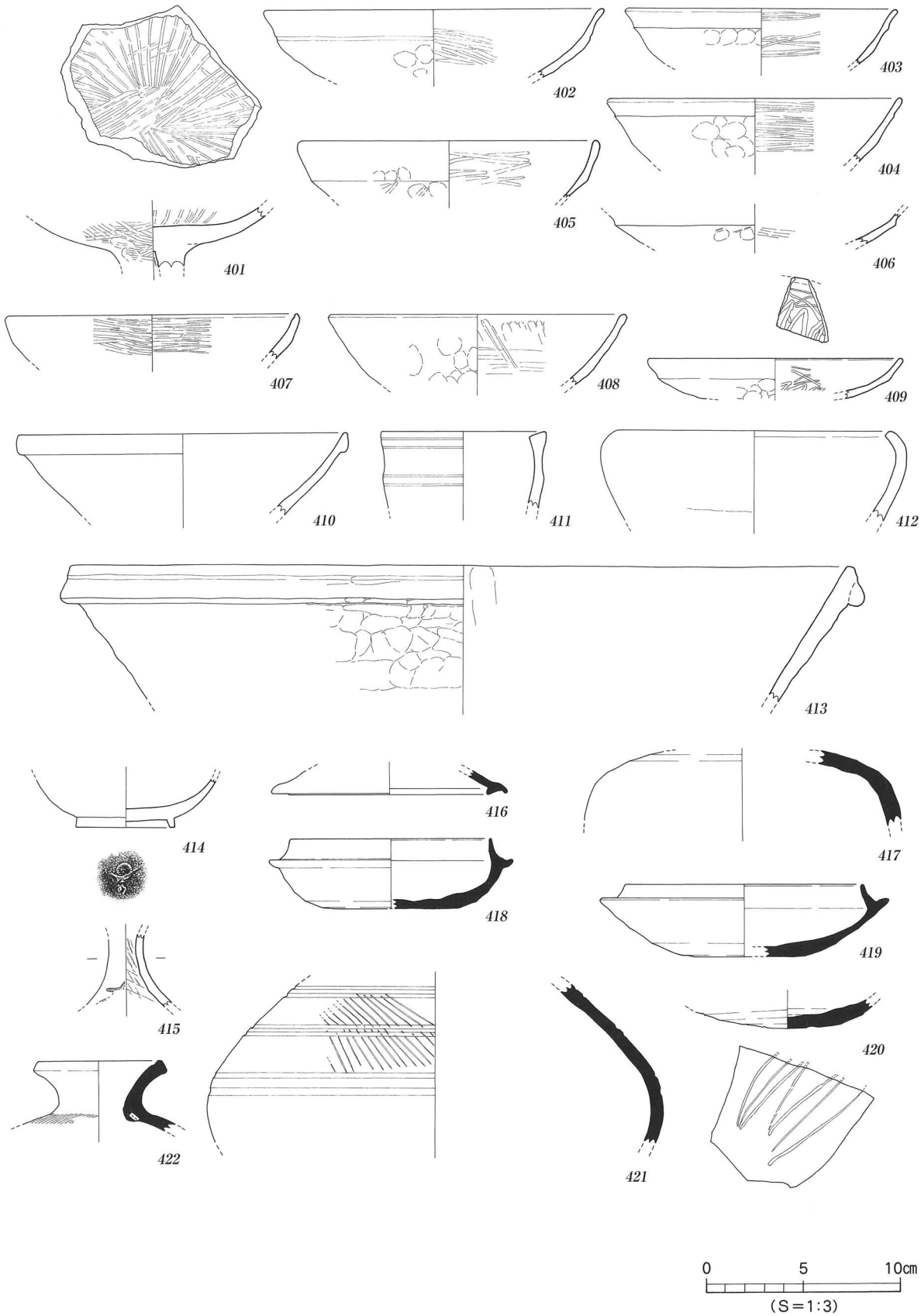
瓦（431～438）431～436は平瓦、437・438は丸瓦である。431は凸面に格子叩き、凹面は布目痕をナデ消している。432は凸面に細縄叩きをナデ消した後、格子叩き、凹面にはタテ方向の一部ヘラケズリを施す。433は桶巻作りで、凸面に格子叩き、凹面には摸骨痕が残る。434は一枚作りで、凸面に細縄叩きを施す。435は凸面に細縄叩きを施した後、すり消している。436は桶巻作りで、凹面に斜め方向の切り離し痕が残る。438は近世瓦である。



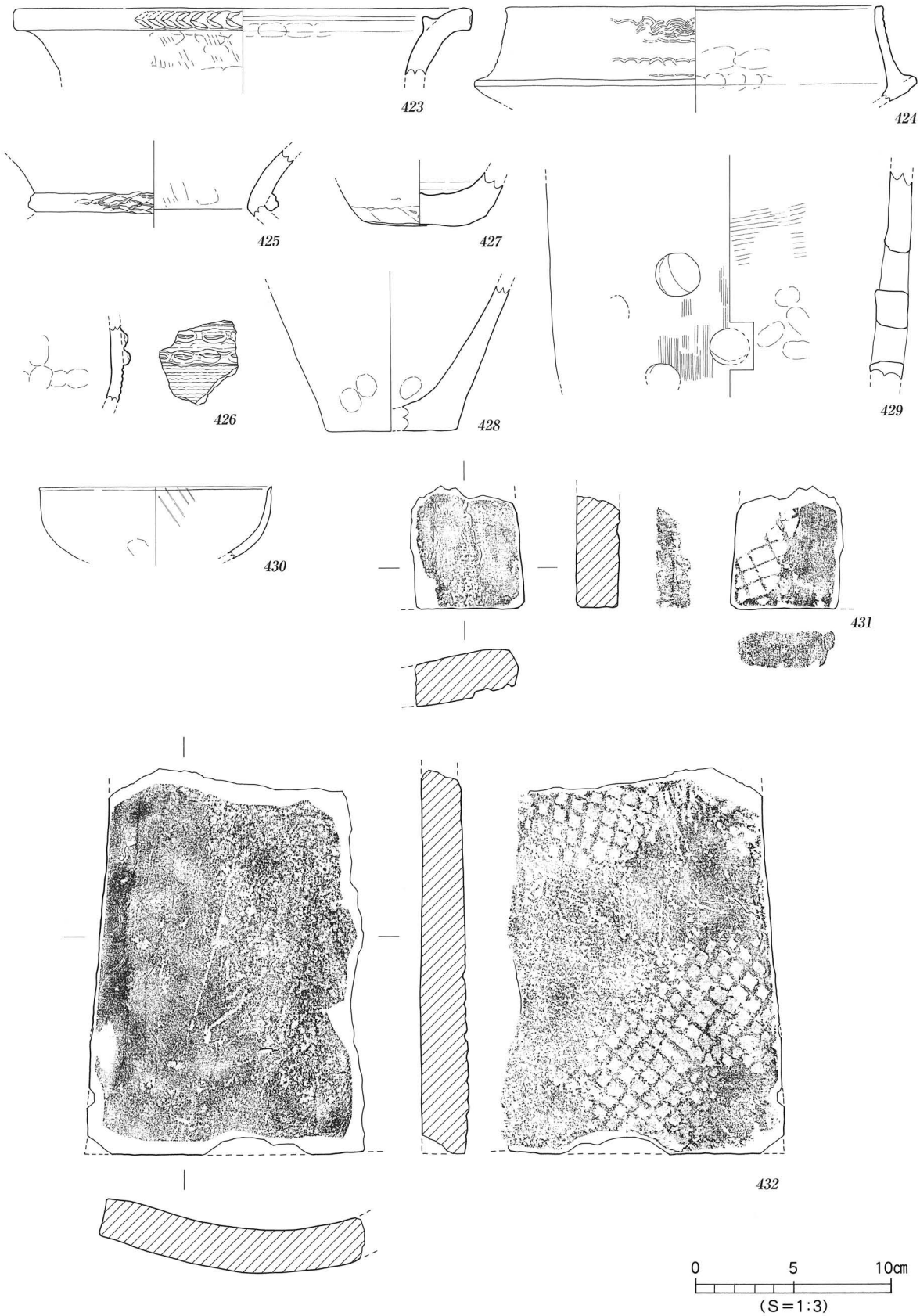
第28図　トレンチ出土遺物実測図(1)



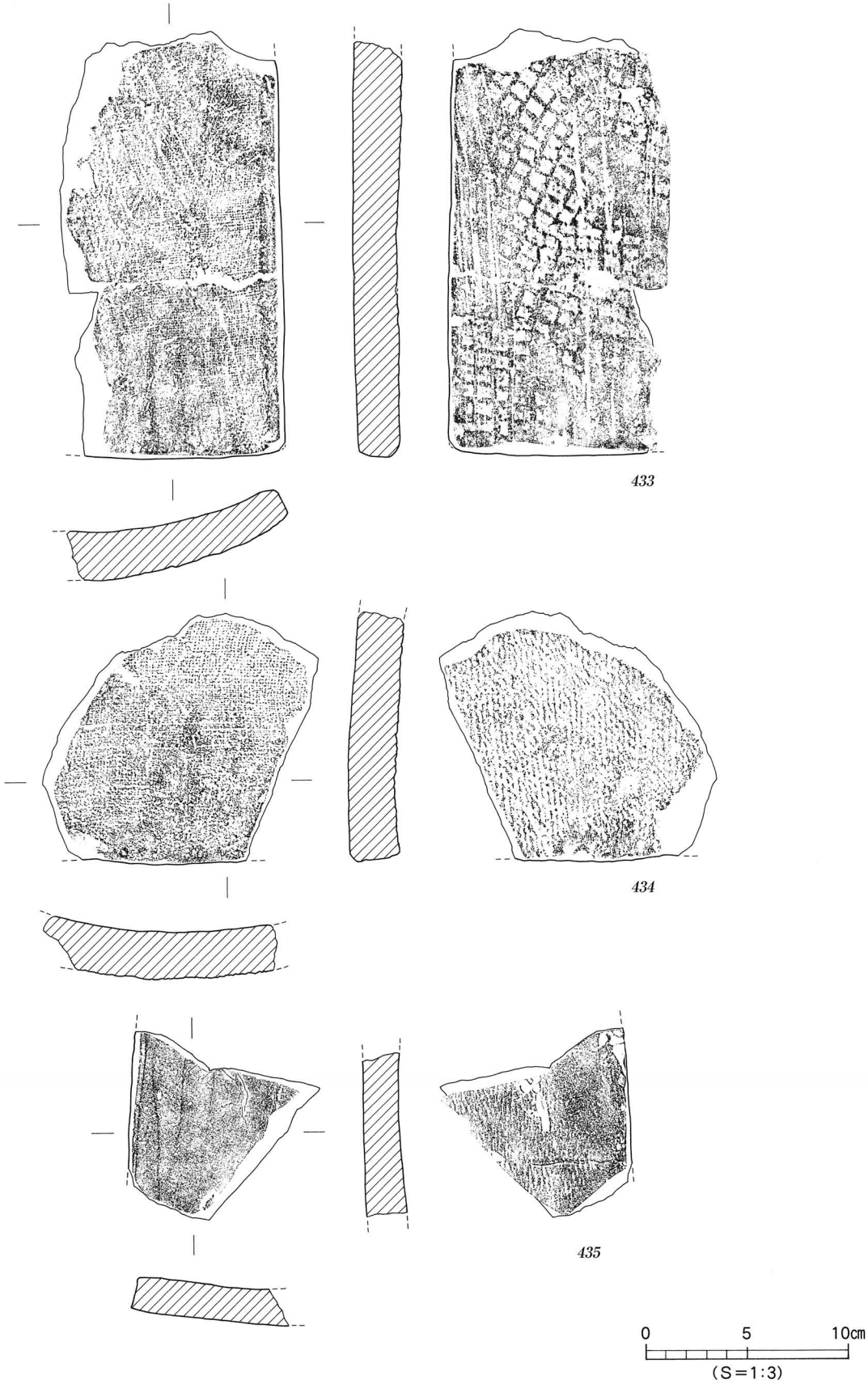
第29図　トレンチ出土遺物実測図(2)



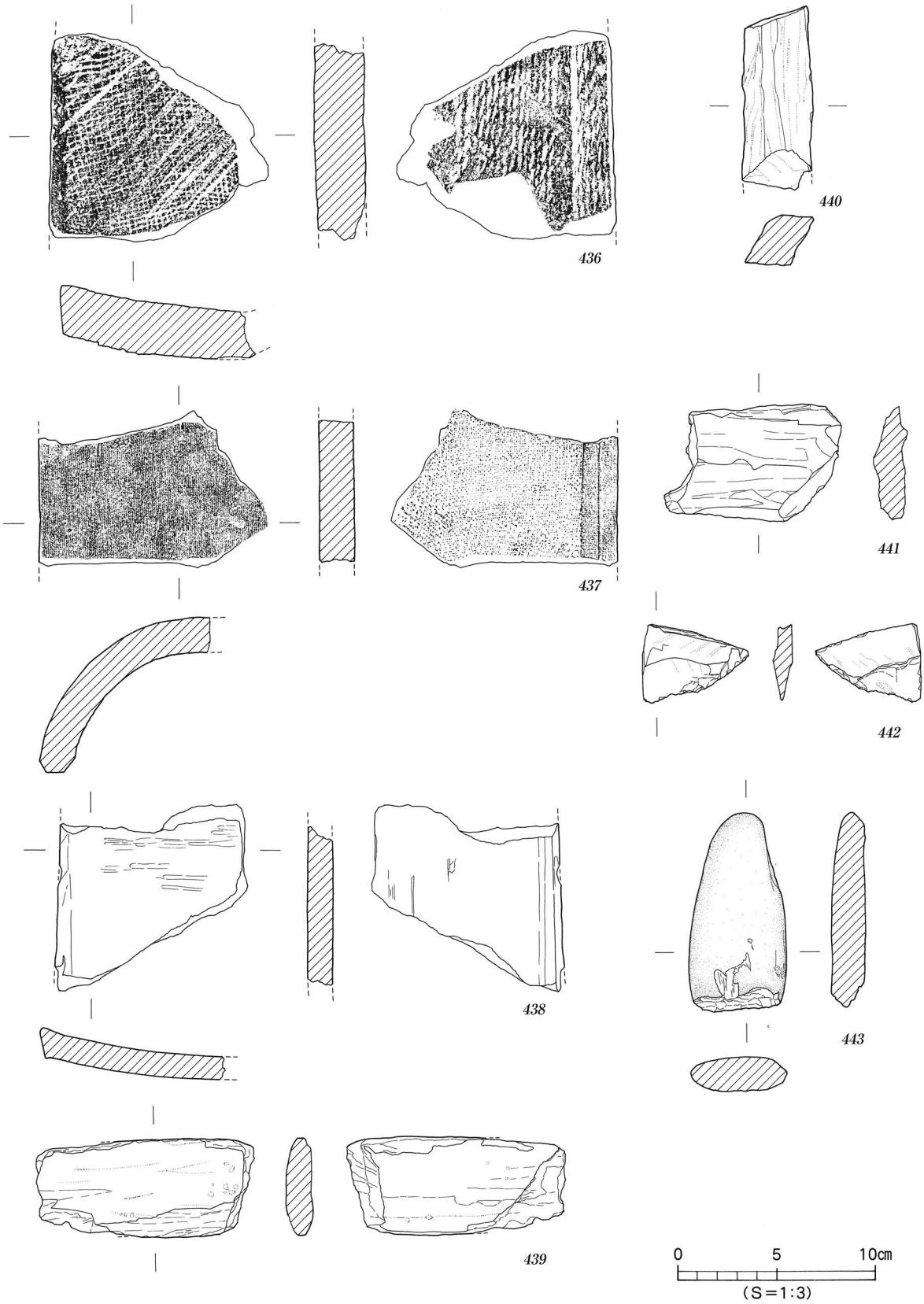
第30図　トレンチ出土遺物実測図(3)



第31図　トレンチ出土遺物実測図(4)



第32図　トレンチ出土遺物実測図(5)



第33図　トレンチ出土遺物実測図(6)

石　器（439～443）439は敲打段階の石庖丁未成品である。結晶片岩製。440・441は結晶片岩製の石器素材、442はサヌカイト製の剥片である。443は緑色片岩製の敲石で、敲打面を顕著に残す。

4．小　結

本調査では、縄文時代から近世までの遺構と遺物を確認した。遺構は古代から近世までのもので、池状遺構と土坑を検出した。

（1）縄文時代～古代

縄文時代から古墳時代までの遺構は未検出であるが、池址３より縄文時代晩期や弥生時代前期の土器片や、池址１や池址２、及び第Ⅵ層黒色粘質土中より、弥生時代中期から奈良時代までの土器片が数点出土した。このうち、暗文を施す土器片が全体で13点出土している。道後地区の調査において暗文土師器の検出例は数例あるが、１遺跡の出土数としては比較的多いものとなる。

一方、遺構では池址を検出した。池址１は掘り方内部に径10～20cm大の円礫を積み重ねて池垣とし、あたかも石室築造と同様、裏込土として粘性の強い土を掘り方と池垣との間に充填している。平面形態や施設等、全体像は不明であるが、構築方法がわかる貴重な資料である。なお、池址内からは土器類のほかに多数の木器や木製品が出土しており、これらの遺物がなんらかの形で、池址の構築あるいは施設として関わっていた可能性も考えられる。

（2）中　世

中世では池址２基を検出した。全体像は不明であるが、池址２は池址１と同様の構築方法で造られていることがわかった。さらに、池址２は池址１を埋め戻した後に構築され、池址３は池址２を埋め戻した後に構築されていた。池址内からは大量の土器類のほかに、径10～30cm大の円礫が散在して出土した。これらの礫は、本来、池垣として使用されたものである可能性がある。特に、池址３からは完形品や一部破損品を含む大量の土師器、瓦器等が出土し、さらに、完形品がまとまって出土した土器溜まりの存在から、池址内にて土器の一括廃棄、あるいは祭祀的な行為がおこなわれた可能性がある。

（3）近　世

近世では土坑を検出した。ＳＫ１は甕を埋置して利用する江戸時代中期、18世紀代の埋甕遺構で、遺構内からは木製品や木片のほか、科学分析より寄生虫卵が検出された。このことから、ＳＫ１はトイレとして利用された可能性が高い遺構である。また、池址４は時期特定しうる遺物が出土しておらず、断言はできないが、文献資料から、明治時代に存在した「かみよの御いけ」の一部である可能性がある。

以上、簡単ではあるが調査のまとめをおこなった。調査期間の都合上、池址は全掘することができず、その全容を解明するには至らなかった。本稿では池状遺構として報告したが、第４章自然科学分析の報告結果では、池址内から通常検出されないイオウ成分が検出された。このことは池状遺構が温泉に関係するなんらかの施設であった可能性も充分考えられる。

表２　池址１出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏	口径（13.8） 器高　4.2	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳灰色	密 ◎		
2	坏	口径（15.4） 残高　3.8	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳灰茶色 乳灰茶色	密 ◎	黒斑	
3	坏	口径（15.0） 器高　4.5	回転ヘラ切り。3／5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 乳黄褐色	密 ◎		
4	坏	口径（14.1） 器高　3.6	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄色 乳赤褐色	密 ◎		
5	坏	口径　11.1 器高　3.5	回転ヘラ切り。2／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		8
6	坏	口径（15.1） 残高　3.4	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	石(1)金 ◎		
7	坏	口径（16.0） 残高　3.1	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 黒色	密 ◎	黒斑	
8	坏	口径（14.4） 器高　4.0	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	密 ◎	黒斑	8
9	坏	口径（13.0） 器高　3.6	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
10	坏	口径（10.2） 器高　3.5	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ◎		
11	坏	口径　10.8 器高　4.2	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		8
12	坏	口径（10.2） 器高　3.3	回転ヘラ切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		8
13	坏	底径　（7.4） 残高　3.5	底部1／3の残存。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ	乳灰色 淡灰黒色	密 ◎	黒斑	
14	坏	底径　（7.0） 残高　1.8	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
15	坏	底径　5.8 残高　2.1	回転ヘラ切り。スノコ痕。	ヨコナデ･工具痕	ヨコナデ	暗灰褐色 暗黄褐色	密･金 ◎	黒斑	
16	坏	底径　7.3 残高　4.3	回転ヘラ切り。口縁部欠損。	ナデ･ヨコナデ	ヨコナデ	乳白灰色 乳白灰色	石･長(1) ◎		
17	坏	底径　7.2 残高　3.8	回転ヘラ切り。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
18	坏	底径　6.9 残高　2.9	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 淡褐色	密 ◎		
19	椀	口径（14.0） 残高　4.6	口縁部外反。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
20	椀	残高　3.8	長めの高台をもつ。	ヨコナデ (底)ナデ	ヨコナデ (底)ナデ	褐色 褐色	密・金 ◎		
21	椀	底径　（8.4） 残高　3.6	高台は外反気味。	ヨコナデ･粘土紐巻上げ痕	ヨコナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	密・金 ◎		
22	椀	底径　（8.3） 残高　2.5	高台は外反気味。	ヨコナデ	ナデ(マメツ)	乳褐色 乳褐色	密 ◎		
23	皿	口径（10.1） 器高　2.2	回転ヘラ切り。4／5の残存。	ナデ	ヨコナデ	暗灰黄色 淡灰黄色	密 ◎		
24	皿	口径　（9.8） 器高　1.8	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白灰色 乳白灰色	密 ◎		
25	皿	口径　（8.6） 器高　1.1	回転ヘラ切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密･金 ◎	黒斑？	
26	皿	口径　（9.0） 器高　1.2	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
27	皿	口径　（9.7） 器高　2.0	回転ヘラ切り。2／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		8
28	皿	口径　（8.9） 器高　1.7	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
29	皿	口径　（8.8） 器高　1.5	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
30	皿	口径　（9.7） 器高　1.6	回転ヘラ切り。2／3の残存。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密 ◎	黒斑	8
31	椀	口径（16.8） 残高　4.2	内黒椀。口縁部は外反。	ヨコナデ	ミガキ	乳白褐色 黒色	密 ◎	黒斑	
32	椀	口径（16.0） 残高　3.2	内黒椀。口縁部はやや外反。	(口)ヨコナデ (体)マメツ(ミガキ?)	ミガキ・ナデ	灰色 黒色	石･長(1) ◎	黒斑	

池址１出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
33	甕	口径 29.2 残高 9.1	亀山焼。口縁部は上下方に拡張。	頸ハケ(8本/cm) 胴格子タタキ	口ハケ→ヨコナデ ハケ(5~8本/cm)	暗茶色 暗茶色	密・金？ ◎		8
34	瓦	残長 5.1 厚さ 1.9	平瓦。凸面：細縄叩き。	マメツ	細縄叩き	黒色 黒色	石・長(1~3)金 ○		
35	瓦	残長 3.0 厚さ 1.4	平瓦。	布目痕	叩き(マメツ)	淡褐色 淡褐色	石(1~2) ○		
36	瓦	残長 10.6 厚さ 2.2	平瓦。桶巻き作り。	布目痕	格子叩き	乳茶色 乳褐色	石・長(1~3) ◎		
37	瓦	残長 4.8 厚さ 1.8	丸瓦。	布目痕	ナデ	淡乳灰色 淡乳灰色	密・金 ◎		
38	坏	口径 (16.0) 器高 5.8	口縁端部は内傾。暗文。	ヨコナデ・ナデ 底一部ミガキ	ヨコナデ・ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密 ◎		
39	坏	口径 (15.4) 残高 5.0	暗文。	ヨコナデ ミガキ	ミガキ	暗灰色 灰褐色	石・長(1)金 ◎		
40	坏	口径 (12.3) 残高 2.7	口縁部はやや外反。暗文。小片。	ナデ→ミガキ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	密 ◎		
41	坏	口径 (10.5) 残高 2.6	暗文。小片。	マメツ	マメツ	淡橙黄色 淡橙黄色	密 ◎		
42	坏	口径 (10.7) 残高 2.6	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	密 ◎		
43	坏	口径 (11.6) 残高 2.3	小片。	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	淡茶褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		
44	皿	口径 (18.3) 残高 2.5	暗文。小片。	ナデ	ミガキ	暗茶褐色 暗茶褐色	密 ◎	黒斑	
45	甕	口径 (15.6) 残高 6.4	土師器。口縁端部は尖り気味。	口ヨコナデ 胴ハケ(7本/cm)	ハケ(6~7本/cm)	明茶褐色 暗黄褐色	石・長(1)金 ◎	煤付着	
46	甕	口径 (18.6) 残高 2.3	口縁端部はわずかに上方に肥厚。	ヨコナデ	工具ナデ？ ヨコナデ	灰乳色 乳灰色	石・長(1~2)金 ◎		
47	壺	残高 7.2	小型品。内面に指頭痕。	ハケ(マメツ)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~6) ◎	黒斑	
48	高坏	口径 (8.9) 残高 3.3	無蓋高坏。坏部1／2の残存。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
49	高坏	口径 (10.9) 残高 4.3	無蓋高坏。坏部1／2の残存。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
50	高坏	底径 (8.2) 残高 4.1	脚部小片。	回転ナデ	シボリ痕 回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
51	壺	口径 (14.4) 残高 3.5	口縁端部は珠玉状。	口ハケ →回転ナデ	回転ナデ	黒褐色 黒褐色	密 ◎	自然釉	
52	埴輪	口径 (19.8) 残高 16.9	須恵質。タガは剥離。	ヨコナデ・ナデ	ナデ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
53	壺	残高 4.1	ヘラ沈線文4条＋刺突文。	マメツ	ナデ	灰褐色 灰茶褐色	石・長(1~3)金 ◎		

表３　池址１出土遺物観察表　　木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 その他	備考	図版
54	棒状製品	——	ヤブツバキ	18.3	2.2	1.5		薪に転用	21
55	板状	——	スギ	10.7	4.5	1.0			21
56	板状	——	ヒノキ	17.7	5.4	0.6			21
57	加工木片	——	ヒノキ	4.9	4.4	1.8			21
58	加工カス	——	ヒノキ	9.6	1.0	0.3			
59	削りカス	——	ヒノキ	8.7	3.0	0.3			
60	チップ	——	ヒノキ	5.3	3.3	0.4			21

表４　池址２（③層）出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
61	坏	口径 (14.0) 器高 4.4	回転糸切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ 底ヨコナデ→ナデ	乳黄褐色 乳灰白色	密 ◎		
62	坏	口径 14.6 器高 4.4	回転糸切り。スノコ痕。 2／3の残存。	ヨコナデ・ 沈線状工具痕	ヨコナデ 底ヨコナデ→ナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		9

池址２（③層）出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
63	坏	口径（14.4） 器高　4.0	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密 ◎		
64	坏	口径　12.8 器高　4.0	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ （マメツ）	ヨコナデ	乳黄白色 乳白色	密 ◎		9
65	坏	口径（15.7） 器高　3.8	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	黒斑	
66	坏	口径（15.6） 器高　4.0	回転糸切り。スノコ痕。 1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
67	坏	口径（14.4） 残高　3.4	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
68	坏	口径（16.0） 器高　3.3	回転糸切り。1／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		
69	坏	口径（14.3） 器高　3.4	回転糸切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
70	坏	口径（14.8） 器高　4.3	回転糸切り。粘土紐巻き上げ痕。	ヨコナデ・ 粘土紐巻上げ痕	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
71	坏	口径（13.5） 器高　3.7	回転糸切り。口縁部のみ一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	密・金 ◎		
72	坏	口径　15.2 器高　4.0	回転糸切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳灰茶色 乳黄茶色	密・金 ◎		
73	坏	口径　14.4 器高　3.8	回転糸切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄茶色 乳黄色	密 ◎		9
74	坏	口径（15.0） 器高　4.0	回転糸切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳茶色 乳茶色	密 ◎		
75	坏	口径　14.9 器高　4.0	回転糸切り。スノコ痕。ほぼ完形。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		9
76	坏	口径（15.5） 器高　4.0	回転糸切り。スノコ痕。 1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎		
77	坏	口径（15.6） 残高　4.3	小片。	ヨコナデ	マメツ （ヨコナデ）	淡乳黄色 淡乳黄色	密 ◎		
78	坏	口径　14.9 器高　3.8	回転糸切り。ほぼ完形。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密・金 ◎		
79	坏	口径（14.8） 器高　4.0	回転糸切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡白橙色 淡白黄色	密・金 ◎		
80	坏	口径（15.0） 器高　3.9	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ （マメツ）	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	密・金 ◎		
81	坏	口径（13.4） 残高　3.0	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙茶褐色 乳橙褐色	石・長(1) ◎		
82	坏	口径（15.1） 残高　2.9	小片。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 乳灰褐色	密・金 ◎		
83	坏	口径（12.2） 器高　4.0	回転糸切り。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
84	坏	口径（14.8） 器高　3.7	回転糸切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
85	坏	口径（13.3） 残高　3.3	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ （マメツ）	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
86	坏	口径（14.4） 器高　3.6	回転糸切り。1／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
87	坏	口径（11.5） 器高　2.5	回転ヘラ切り。口縁部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ （マメツ）	乳灰褐色 乳灰褐色	密・金 ◎		
88	坏	底径　(8.2) 残高　3.9	回転糸切り。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
89	坏	底径　6.9 残高　2.3	回転糸切り。	マメツ	マメツ(ナデ)	乳茶褐色 乳茶褐色	密・金 ◎		
90	坏	底径　(6.3) 残高　2.3	回転ヘラ切り。	ヨコナデ （マメツ）	ヨコナデ （マメツ）	淡黄褐色 淡黄褐色	密・金 ◎		
91	坏	底径　6.0 残高　3.0	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ （マメツ）	暗灰色 黄灰色	密 ◎	黒斑	
92	坏	底径　(7.7) 残高　1.8	回転ヘラ切り。小片。	ヨコナデ （工具痕）	ヨコナデ	淡褐色 淡乳橙色	密 ◎		
93	坏	底径　6.3 残高　2.6	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
94	坏	底径　(8.8) 残高　3.8	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎	黒斑	

池址２（③層）出土遺物観察表　　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
95	坏	底径 6.4 残高 2.5	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密 ◎		
96	坏	底径 7.6 残高 2.4	回転糸切り。焼成前穿孔(φ1.7cm)。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
97	椀	口径 (14.4) 器高 6.0	外反する高台。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石・長(1～3) ◎		9
98	椀	残高 3.4	底部完形。高台欠損。	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密・金 ◎		
99	椀	底径 8.2 残高 2.1	断面三角形状の高台。	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1～2)金 ◎		
100	椀	底径 (6.2) 残高 2.2	回転糸切り。断面三角形状の高台。	ヨコナデ	ナデ→ミガキ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
101	皿	口径 (8.4) 器高 1.9	回転糸切り。4／5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1) ◎		
102	皿	口径 9.2 器高 1.4	回転糸切り。完存品。	ヨコナデ・ 指頭痕	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		9
103	皿	口径 (9.5) 器高 1.5	回転糸切り。1／4の残存。	ヨコナデ	ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
104	皿	口径 (8.0) 器高 1.8	回転糸切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		
105	皿	口径 (10.2) 器高 1.4	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		
106	皿	口径 8.2 器高 1.8	回転糸切り。完存品。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ナデ	淡白橙色 淡白橙色	石・長(1～2)金 ◎		
107	皿	口径 (8.5) 器高 1.4	回転糸切り。口縁部のみ1／3欠損。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		
108	皿	口径 (9.1) 器高 1.7	回転糸切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎		
109	皿	口径 9.0 器高 1.4	回転糸切り。スノコ痕。ほぼ完形。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎		9
110	皿	口径 8.5 器高 1.6	回転糸切り。完存品。	ヨコナデ	ヨコナデ マメツ	淡白褐色 淡白褐色	石・長(1)金 ◎		
111	皿	口径 8.2 器高 2.0	回転糸切り。スノコ痕。完存品。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密・金 ◎		
112	皿	口径 (7.8) 器高 1.6	回転糸切り。スノコ痕。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		
113	皿	口径 8.5 器高 2.0	回転糸切り。口縁部のみ1／4欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密・金 ◎		
114	皿	口径 (7.2) 器高 1.5	回転糸切り。1／2の残存。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎		
115	椀	口径 (14.4) 残高 4.2	和泉型瓦器椀。1／2の残存。	(口)ヨコナデ (体)ナデ・一部ミガキ	ミガキ・ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
116	椀	口径 (16.0) 残高 4.3	和泉型瓦器椀。1／5の残存。	(口)ヨコナデ (体)ナデ・一部ミガキ	ミガキ	黒色 黒色	密 ◎		
117	椀	口径 (14.8) 残高 4.1	和泉型瓦器椀。小片。	ナデ・ヨコナデ	ミガキ→ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
118	椀	口径 (15.8) 残高 3.7	和泉型瓦器椀。小片。	(口)ヨコナデ (体)ナデ	ヨコナデ・ ミガキ	黒色 暗灰色	密 ◎		
119	椀	口径 15.2 器高 5.5	和泉型瓦器椀。2／3の残存。	(口)ヨコナデ (体)ミガキ→ナデ	ヨコナデ →ミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		9
120	椀	残高 2.4	小片。	ナデ・ヨコナデ	ミガキ	淡灰色 黒灰色	密 ◎		
121	椀	底径 (4.8) 残高 2.3	小片。	ナデ (底)ナデ・ヨコナデ	ミガキ	濃灰色 濃灰色	密 ◎		
122	椀	底径 (4.4) 残高 1.6	小片。	ナデ (底)ナデ・ヨコナデ	ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
123	碗	口径 (15.5) 残高 4.1	白磁碗。	施釉	施釉	白灰色 白灰色	密 ◎	胎土:灰白色 釉調:透明	
124	碗	底径 (4.4) 残高 3.2	天目茶碗。	施釉 (底)ケズリ	施釉	緑茶褐色 暗茶褐色	密 ◎	胎土:茶褐色 釉調:透明	
125	こね鉢	口径 (31.2) 残高 3.3	東播系須恵器。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色・黒灰色 青灰色	密・金 ◎		
126	瓦	残長 10.6 厚さ 2.3	平瓦。凹面に粘土とじ痕。	布目痕	細縄叩き→ナデ 格子叩き	暗灰色 灰色	密・金 ◎		10
127	瓦	残長 8.3 厚さ 1.6	軒丸瓦。凹面に木挽き痕。	ナデ・ミガキ	布目痕？ナデ 工具後ナデ	黒色 黒色	密 ◎		

表5　池址2（④層）出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
128	坏	口径（14.5） 器高　3.6	回転糸切り。小片。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ (マメツ)	乳黄灰色 乳黄色	密・金 ◎		
129	坏	口径（14.9） 残高　3.8	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
130	坏	口径　14.0 残高　3.4	1／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎	煤付着	
131	坏	口径（14.8） 残高　4.1	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
132	坏	底径　5.9 残高　2.9	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳灰色 乳黄灰色	密 ◎	黒斑	
133	坏	底径　5.6 残高　1.6	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
134	椀	口径（14.0） 残高　3.3	内黒椀。小片。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	乳灰色 黒色	密 ◎		
135	椀	底径　6.3 残高　1.9	内黒椀。底部1／2の残存。	ヨコナデ	ミガキ	乳黄色 黒色	密・金 ◎		
136	椀	底径　7.1 残高　2.4	内黒椀。底部完形。	ヨコナデ	ミガキ	乳黄色 乳黄色	密 ◎	煤？	
137	坏	口径（19.0） 残高　7.6	放射状暗文。1／3の残存。	(体上)ナデ→ミガキ (体下)ケズリ	(口)ヨコナデ・ミガキ (体)ヨコナデ・ナデ	茶褐色 茶褐色	密・金 ◎		10
138	坏	口径（13.2） 残高　3.5	放射状暗文。小片。	ヨコナデ (体)ナデ	ヨコナデ	灰茶褐色 茶褐色	密・金 ◎		10
139	坏	口径（11.2） 残高　4.2	暗文。小片。	ヨコナデ →ミガキ？	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密 ◎	煤付着	
140	坏	口径（16.8） 残高　3.8	放射状暗文。小片。	(口)ヨコナデ ナデ	(口)暗文→ヨコミガキ ナデ	淡黄褐色 淡黄茶色	密・金 ◎		10
141	坏	口径（17.5） 残高　3.0	暗文。小片。	ヨコナデ 一部ミガキ	ヨコナデ →ミガキ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		
142	椀	口径（13.4） 残高　3.8	小片。	ヨコナデ →ミガキ？	ヨコナデ・ 工具痕	褐色 褐色	密 ◎	煤付着	
143	鉢	口径（27.8） 残高　6.5	大型品。小片。	ヨコナデ・ハケ (胴)ナデ	(口)ハケ(マメツ) (胴)ハケ・ナデ	乳褐色 明橙褐色	石・長(1～5)金 ◎		
144	甕	口径（15.8） 残高　5.9	口縁端面は凹む。	ハケ(7本／cm) →ナデ	ナデ・ハケ (胴)ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～5) ◎		
145	甕	口径（19.2） 残高　5.2	口縁端部は内傾。	(口)ヨコナデ ナデ	ヨコナデ マメツ(ナデ)	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1～3)金 ◎		
146	坏蓋	口径（11.6） 器高　3.3	口唇部に刻目。1／2の残存。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	(天)回転ナデ・ナデ (口)回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
147	坏蓋	口径（12.8） 器高　2.8	1／4の残存。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	(天)ナデ (口)回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
148	坏蓋	残高　3.4	1／4の残存。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ→ナデ 回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
149	坏蓋	残高　2.5	1／4の残存。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
150	坏蓋	口径（14.2） 残高　1.9	小片。	回転ナデ？	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
151	坏身	底径　(6.2) 残高　3.7	底部1／2の残存。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ (底)ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
152	坏身	口径（10.0） 残高　2.9	赤焼け。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰橙色 明橙色	密 ◎		
153	坏	底径（12.0） 残高　1.3	直立高台。小片。	回転ナデ (底)ケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
154	短頸壺	口径　(9.2) 器高　6.7	口縁部は外方に拡張。1／4の残存。	(胴上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ (底)ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
155	短頸壺	口径　(7.1) 残高　5.4	外反する口縁部。1／3の残存。	(胴上)回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
156	甕	残高　10.2	刺突文＋沈線文。1／2の残存。	回転ナデ (胴下)回転ヘラケズリ	回転ナデ (頸)ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
157	壺	口径（16.3） 残高　3.7	頸部に7～9条の波状文。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰赤色 灰色	密 ◎	自然釉	
158	甕	口径（17.0） 残高　3.3	外反口縁。小片。	(口)回転ナデ (胴)カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
159	提瓶	口径　(6.9) 残高　10.4	カギ状の把手。	(口)回転ナデ (胴)カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

池址２（④層）出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
160	提瓶	残高 3.0	小片。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ○		
161	高坏	残高 4.7	脚部小片。3方向のスカシ。	回転ナデ	回転ナデ シボリ痕	暗灰色 灰色	密 ◎		
162	瓶	底径 (11.1) 残高 17.1	胴部に凸帯1条。	回転ナデ (一部工具痕)	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
163	耳皿	底径 5.0 残高 2.2	緑釉陶器。	回転ナデ 施釉	回転ナデ	淡黄緑色 淡黄緑色	密 ◎	胎土： 灰白色	10
164	甕	底径 6.3 残高 4.9	上げ底。	マメツ・ナデ	ナデ	赤褐色 淡褐色	密 ◎		
165	瓦	残長 9.0 厚さ 1.8	平瓦。凹面に離れ砂。	布目痕	細縄叩き	乳白色 乳白灰色	密 ◎		10
166	瓦	残長 9.6 厚さ 2.4	丸瓦。行基式。	ナデ	布目痕	灰色 灰色	密 ◎		

表６　池址３（⑥層）出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
167	坏	口径 (11.0) 器高 2.2	焼成前穿孔(φ0.7cm)。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	密 ◎		
168	土鍋	残高 5.0	小片。	ナデ	ハケ→ナデ？	褐色 褐黄色	長(1～3)金 ◎	煤付着	10
169	土釜	残高 6.2	断面三角形。	ナデ	—	暗褐色	石･長(1～2)金 ◎		
170	土壁？	残長 8.5 厚さ 2.5	植物繊維痕。	—	—	暗茶褐色	石･長(1～6)金 ○		
171	鉢	口径 (26.2) 残高 4.4	瓦質。	マメツ	ナデ	黒色 黒色	石･長(1)金 ◎		
172	椀	口径 (13.5) 残高 2.8	楠葉型瓦器椀。小片。	㊐ミガキ ミガキ→ナデ？	ミガキ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
173	擂鉢	口径 (25.3) 残高 5.1	備前焼。条線あり。	回転ナデ	回転ナデ	茶褐色 茶褐色	密･金 ◎		10
174	器台	残高 9.0	凸線4条＋波状文11条。	回転ナデ 格子タタキ→回転ナデ	回転ナデ 無文タタキ→回転ナデ	濃青灰色 灰色	密 ◎		
175	坏	口径 (14.6) 器高 3.8	回転糸切り。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ ㊡ヨコナデ→ナデ	乳白黄茶色 乳白茶色	密 ◎		
176	坏	口径 (14.2) 残高 3.6	小片。	㊐ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳茶褐色	密･金 ◎		
177	坏	口径 (9.8) 残高 3.4	回転ヘラ切り。スノコ痕。	ヨコナデ･ナデ	ヨコナデ･ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ◎		
178	土釜	残高 5.0	把手に穿孔(φ0.8cm)。円孔2ヶ。	ナデ 板ナデ？	ナデ ハケ(5～7本／cm)	暗茶色 茶色	密 ◎	煤付着	10
179	土釜	残高 14.4	断面三角形。	ナデ	—	茶褐色	密･金 ◎	煤付着	
180	椀	口径 (15.1) 残高 3.2	和泉型瓦器椀。小片。	ヨコナデ (ミガキ？)	㊐ヨコナデ ㊗ミガキ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
181	椀	口径 (17.8) 残高 2.8	和泉型瓦器椀。小片。	㊐ヨコナデ ナデ(ミガキ)	ミガキ	黒灰色 黒灰色	密･金 ◎		
182	椀	口径 (14.2) 残高 2.0	和泉型瓦器椀。小片。	ナデ	ミガキ	黒灰色 黒灰色	密･金 ◎		
183	椀	残高 2.4	和泉型瓦器椀。小片。	ヨコナデ ㊥ナデ	ミガキ	灰色 灰色	密･金 ◎		
184	甕	口径 (40.4) 残高 3.7	亀山焼。	㊐ヨコナデ ㊗格子タタキ	ヨコナデ	暗灰色 淡灰色	密 ◎		10
185	擂鉢	残高 4.3	備前焼。小片。	回転ナデ	回転ナデ	茶色 茶色	密･金 ◎		
186	碗	底径 (6.6) 残高 2.5	肥前系。小片。	施釉	施釉	乳白色 乳白色	密 ◎	胎土： 橙色	
187	瓦	残長 7.8 厚さ 1.7	平瓦。	ナデ(ミガキ)	細縄叩き→ 一部格子叩き	灰色 灰色	密 ◎		

表７　池址３（⑥層）出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
188	釘	一部欠損	鉄	2.3	0.4	0.6	3.32		
189	鍋	小片	鉄	12.7	9.8	1.0	199.15		

表8　池址３（⑦層）出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
190	坏	底径 (6.2) 残高 2.8	静止糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	煤付着	
191	坏	底径 5.6 残高 2.9	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 淡桃色	密 ◎		
192	坏	底径 (7.2) 残高 3.2	回転糸切り。焼成前穿孔(φ1.0cm)。	ナデ	ナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
193	椀	口径 (15.5) 器高 6.1	回転糸切り。口縁部欠損。	ヨコナデ (工具痕)	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ミガキ	乳白色 乳黄色	密 ◎		11
194	椀	底径 6.6 残高 2.1	回転糸切り。底部外面に線刻。	ヨコナデ →ミガキ	ヨコナデ →ミガキ	乳白色 乳白色	密 ◎	煤付着?	
195	椀	底径 (7.3) 残高 1.8	回転糸切り。	ヨコナデ	ミガキ	乳白色 乳黄色	密 ◎	黒斑？	
196	皿	口径 (8.4) 器高 1.6	回転糸切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
197	皿	口径 (8.6) 器高 1.2	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎	煤付着	
198	土釜	残高 7.6	小片。	ナデ	ヨコナデ (底)ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	煤付着	
199	土釜	残高 10.2	断面三角形。	ナデ	—	暗褐色	石・長(1)金 ◎	煤付着	
200	椀	口径 (14.4) 残高 2.7	和泉型瓦器椀。小片。	ナデ→ミガキ	ミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
201	碗	口径 (13.0) 残高 3.1	天目茶碗。小片。	施釉	施釉	茶色・黒色 茶色・黒色	密 ◎	胎土： 乳色	
202	こね鉢	口径 (21.2) 残高 3.1	東播系。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 淡黄褐色	密・金 ◎		

表9　池址３（⑦層）出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
203	砥石	1／2	結晶片岩	17.7	13.3	7.2	2500.0		
204	石鏃	完形	不明	4.4	3.4	0.7	6.6	打製・平基無茎式	

表10　池址３（⑧層）出土遺物観察表　　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
205	坏	口径 14.1 器高 4.0	回転糸切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
206	坏	口径 (12.9) 器高 2.9	回転糸切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎		
207	坏	底径 (7.2) 残高 2.5	回転糸切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	密 ◎		
208	坏	底径 6.8 残高 3.0	回転糸切り。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳灰白色	密・金 ◎		
209	坏	底径 5.6 残高 1.8	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	煤付着	
210	坏	底径 (6.5) 残高 2.5	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	煤付着	
211	坏	底径 7.0 残高 2.5	回転糸切り。	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	明褐色 淡褐色	密・金 ◎		
212	坏	底径 7.6 残高 2.9	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳茶色	密・金 ◎		
213	坏	底径 7.1 残高 3.4	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	淡乳黄色 淡乳黄色	密 ◎	煤付着	
214	椀	口径 (14.5) 残高 3.8	小片。	(口)ヨコナデ ヨコナデ→ミガキ	ヨコナデ →ミガキ	淡黄白色 淡黄白色	密 ◎		
215	椀	底径 6.2 残高 2.8	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密 ◎		
216	椀	底径 5.3 残高 2.0	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ →ミガキ？	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
217	椀	底径 (8.4) 残高 2.7	底部1／2の残存。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ →ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
218	椀	底径 7.9 残高 2.9	底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ →ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		

池址３（⑧層）出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
219	椀	底径 (6.4) 残高 1.5	小片。	ヨコナデ	ミガキ	乳白色 乳白色	密 ◎		
220	椀	底径 6.5 残高 2.0	底部完形。	ヨコナデ	ミガキ (マメツ)	淡灰色 黒色	密 ◎	黒斑	
221	皿	口径 (8.5) 器高 2.3	口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎	黒斑	
222	皿	口径 8.0 器高 3.1	口縁部一部欠損。	ヨコナデ・ ケズリ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎		11

表11　池址３（土器だまり①）出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
223	坏	口径 (14.5) 器高 3.4	回転糸切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙褐色 乳橙褐色	密・金 ◎		11
224	皿	口径 (8.0) 器高 1.9	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡乳褐色 暗灰褐色	密・金 ◎	煤付着	
225	皿	口径 (8.0) 器高 1.4	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎		
226	椀	口径 (13.4) 残高 2.2	楠葉型瓦器椀。小片。	(回)ナデ ミガキ	(回)ナデ ミガキ	暗灰色 暗灰色	密・銀 ◎		
227	椀	口径 (15.0) 残高 3.3	和泉型瓦器椀。小片。	ミガキ・ナデ	(回)ヨコナデ ミガキ	黒灰色 灰色	密・銀 ◎		
228	坏	底径 (12.8) 残高 1.7	須恵器高台坏の小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
229	甕	底径 (4.4) 残高 4.0	上げ底。	マメツ	ナデ	赤褐色 黒灰色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
230	瓦	残長 9.4 厚さ 1.7	平瓦。須恵質。	ナデ・ミガキ	細縄叩き→ナデ 消し→格子叩き	青灰色 淡青灰色	密 ◎		

表12　池址３（土器だまり②）出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
231	坏	口径 15.1 器高 4.9	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳白色	密・金 ◎	黒斑 煤付着	11
232	坏	口径 (15.1) 器高 4.7	回転ヘラ切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰黄色 乳灰黄色	密・金 ◎	黒斑	
233	坏	口径 (14.4) 器高 3.9	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	乳暗灰色 乳暗灰色	密 ◎		
234	坏	口径 (16.7) 器高 4.8	回転糸切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	灰黄褐色 黄褐色	密 ◎		
235	坏	口径 13.4 器高 3.7	回転ヘラ切り。3／4の残存。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	密 ◎	黒斑？	11
236	坏	口径 (14.7) 器高 3.9	回転ヘラ切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	密・金 ◎		
237	坏	口径 13.0 器高 3.6	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙黄色 淡橙黄色	密 ◎		11
238	坏	口径 (14.8) 器高 3.8	回転糸切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	密 ◎		
239	坏	口径 14.6 器高 5.1	回転ヘラ切り。ほぼ完形。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎	黒斑	11
240	坏	口径 (13.8) 器高 5.3	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	乳白色 乳黄白色	密・銀 ◎		11
241	坏	口径 (15.2) 器高 4.5	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	密・金 ◎	黒斑	
242	坏	口径 (14.3) 器高 4.5	回転ヘラ切り。2／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	密・銀 ◎		
243	坏	口径 13.7 器高 4.0	回転糸切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ナデ	乳桃色 乳桃色	密 ◎		
244	坏	口径 (12.7) 器高 3.4	回転糸切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色 橙褐色	密 ◎		
245	坏	口径 (14.0) 器高 3.1	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	密・金 ◎		11
246	坏	口径 (15.0) 器高 3.8	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	密・金 ◎	黒斑	

池址３（土器だまり②）出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
247	坏	口径 15.3 器高 4.1	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
248	坏	口径 (14.6) 器高 3.7	回転糸切り。1／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎		
249	坏	口径 (15.2) 器高 5.0	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	長(1)金 ◎		
250	坏	口径 (15.0) 器高 4.9	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎	黒斑	12
251	坏	口径 (15.5) 器高 6.2	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		12
252	坏	口径 (14.8) 器高 5.1	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ・ナデ	マメツ (底)ヨコナデ	乳灰黄色 乳黄色	密 ◎	黒斑	12
253	坏	口径 (15.1) 器高 5.2	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ (マメツ)	乳灰黄色 乳灰黄色	密 ◎		
254	坏	口径 (15.8) 器高 4.1	小片。	ヨコナデ →ナデ	マメツ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
255	坏	口径 (12.6) 残高 3.7	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎		
256	坏	底径 9.1 残高 3.4	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	密 ◎	黒斑	
257	坏	底径 6.5 残高 2.7	回転糸切り。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密・金 ◎		
258	坏	底径 6.6 残高 1.7	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙褐色 乳橙褐色	密 ◎		
259	坏	底径 7.6 残高 3.6	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	乳灰黄色 乳黄色	密 ◎	煤付着	
260	坏	底径 8.2 残高 2.8	回転ヘラ切り。底部1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄褐色 乳灰褐色	密・金 ◎	黒斑	
261	坏	底径 7.5 残高 2.2	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎		
262	坏	底径 7.0 残高 2.6	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
263	坏	底径 8.2 残高 2.4	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐色 茶褐色	密 ◎		
264	坏	底径 6.5 残高 2.6	回転糸切り。	ヨコナデ→ ヘラケズリ？	ヨコナデ	乳黄色 乳白色	密・金 ◎		
265	椀	底径 8.4 残高 4.0	底部4／5の残存。	ヨコナデ (底)ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	長(1) ◎	黒斑	12
266	椀	底径 7.2 残高 3.4	底部1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎		
267	椀	底径 (7.6) 残高 2.7	底部1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	密 ◎		
268	皿	口径 8.9 器高 1.5	回転ヘラ切り。ほぼ完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		12
269	皿	口径 8.6 器高 1.2	回転ヘラ切り。ほぼ完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰茶色 淡灰茶色	密・金 ◎	黒斑	
270	皿	口径 9.1 器高 1.5	回転糸切り。完存品。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ナデ	乳茶色 乳茶色	石(1) ◎		12
271	皿	口径 9.8 器高 1.5	回転ヘラ切り。完存品。	ヨコナデ・ナデ	ナデ (底)ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
272	皿	口径 (9.4) 器高 1.7	回転ヘラ切り。3／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密・金 ◎	黒斑 煤付着	
273	皿	口径 9.3 器高 1.5	回転ヘラ切り。4／5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色 乳茶色	密・金 ◎	黒斑 煤付着	
274	皿	口径 9.3 器高 3.9	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	淡茶色 淡茶色	密 ◎	黒斑	
275	皿	口径 (9.3) 器高 1.7	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	乳黄灰色 乳黄灰色	密・金 ◎	黒斑	
276	皿	口径 9.6 器高 1.9	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
277	皿	口径 9.3 器高 2.3	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	密 ◎		12
278	皿	口径 9.2 器高 1.7	回転ヘラ切り。完存品。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎	煤付着	

池址３（土器だまり②）出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
279	皿	口径 9.1 器高 1.7	回転糸切り。4／5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
280	皿	口径 9.5 器高 1.9	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳白色	密 ◎	黒斑	
281	皿	口径 9.2 器高 1.7	回転糸切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	密 ◎		
282	皿	口径 9.5 器高 1.8	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎		
283	皿	口径 (8.3) 器高 1.3	小片。	マメツ	ヨコナデ (マメツ)	乳白色 乳白色	密 ◎		
284	皿	口径 (8.7) 器高 1.9	回転糸切り。小片。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		
285	鍋	口径 (38.8) 残高 14.2	外反口縁。二次焼成あり。	口ナデ・ヨコナデ 胴ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ？ (マメツ)	暗褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑 煤付着	
286	鍋	口径 (31.6) 残高 13.6	外反口縁。	口ヨコナデ 胴ハケ→ナデ？	マメツ（ナデ）	黒褐色 褐色	石・長(1～6) ◎	煤付着	
287	鍋	口径 (31.2) 残高 6.5	外反口縁。小片。	口ヨコナデ 胴ナデ・板ナデ	ナデ	暗褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	煤付着	
288	鍋	口径 (21.2) 残高 14.7	外反口縁。	口ヨコナデ 胴ハケ→ナデ	口ヨコハケ→ヨコナデ 胴下ハケ?→ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
289	椀	口径 (16.0) 器高 6.8	内黒椀。口縁部欠損。	口ヨコナデ 体ミガキ	口ヨコナデ ミガキ	淡褐色 黒色	密 ◎		12
290	椀	口径 (15.8) 残高 5.7	内黒椀。1／2の残存。	口ヨコナデ 体ヨコナデ→一部ミガキ?	口ヨコナデ ミガキ	淡灰褐色 黒色	密 ◎	黒斑 煤付着	12
291	椀	口径 (15.4) 残高 6.1	内黒椀。1／2の残存。	体ヨコナデ→ミガキ ヘラケズリ	ミガキ 底ナデ	淡褐色 黒色	密・金 ◎		
292	椀	口径 (14.4) 残高 4.1	内黒椀。小片。	口ヨコナデ 体ミガキ？	ヨコナデ	乳白色 黒色	密 ◎		
293	椀	底径 6.2 残高 2.9	内黒椀。底部完形。	ミガキ	ミガキ	乳白褐色 黒色	密 ◎	黒斑	
294	椀	口径 (15.1) 器高 5.0	和泉型瓦器椀。口縁部一部欠損。	口底ヨコナデ 体ナデ(指頭痕)	ミガキ	黒色 黒色	密 ◎		12
295	皿	口径 9.4 器高 2.2	瓦器皿。口縁部一部欠損。	口ヨコナデ 体ナデ	ミガキ	黄灰色 黄灰色	密 ◎		12
296	瓦	残長 14.2 厚さ 2.0	平瓦。凹面に布とじ痕。	布目痕	細縄叩き→ナデ 消し→格子叩き	暗青灰色 暗灰色	密 ◎		
297	瓦	残長 10.8 厚さ 2.2	平瓦。一枚作り。	布目痕	太縄叩き	暗灰色 灰色	密 ◎		12

表13　池址３（土器だまり②）出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
298	砥石	2／3	不明	7.6	3.3	1.0	44.24		

表14　池址３（土器だまり③）出土遺物観察表　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
299	坏	口径 13.9 器高 4.2	回転糸切り。4／5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ 底ヨコナデ→ナデ	淡灰色 黄灰色	密・金 ◎	煤付着	
300	坏	口径 (15.2) 器高 4.2	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	灰黄褐色 灰黄褐色	密・金 ◎	黒斑	
301	坏	口径 (14.3) 器高 5.1	回転糸切り。1／2の残存。硬質。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
302	坏	口径 (14.4) 残高 4.7	1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤橙乳褐色 赤橙褐色	密・金 ◎		
303	坏	底径 (6.7) 残高 5.0	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	密・金 ◎	黒斑？	
304	坏	底径 6.1 残高 2.4	回転糸切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密・金 ◎		
305	皿	口径 (8.9) 器高 1.4	回転糸切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	密 ◎	煤付着	
306	甕	口径 (25.4) 残高 3.8	ヘラ沈線文4条以上＋刻目。	口ナデ・ヨコナデ 胴ハケ	ヨコナデ・ナデ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1～3) ◎		
307	瓦	残長 8.4 厚さ 1.3	丸瓦。行基式。須恵質。	ナデ・ミガキ？ 布目痕	細縄叩き→ナデ消し→一部格子叩き	灰色 明灰色	密 ◎		

池址３（土器だまり③）出土遺物観察表　　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
308	瓦	残長 11.2 厚さ 2.2	平瓦。	布目痕	細縄叩き→ナデ消し→一部格子叩き	乳灰茶色 乳茶色	石・長(1～2) ◎		13
309	瓦	残長 12.7 厚さ 2.3	平瓦。須恵質。	布目痕 →ミガキ	細縄叩き→ナデ消し→一部格子叩き	乳白色 乳白色	密 ◎		13
310	瓦	残長 12.1 厚さ 1.8	平瓦。一枚作り。	布目痕	太縄叩き	灰色 灰色	密 ◎		
311	瓦	残長 5.8 厚さ 1.7	平瓦。須恵質。	ナデ・ミガキ	細縄叩き →ミガキ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表15　池址３（土器だまり③）出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
312	石鏃	完形	サヌカイト	2.3	1.2	0.3	0.9	打製・平基無茎式	

表16　池址３（土器だまり④）出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
313	坏	口径（14.1） 器高 4.8	回転糸切り。4／5の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
314	坏	残高 4.1	小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色 乳褐色	密・金 ◎		
315	坏	底径 9.6 残高 2.9	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黒色 淡灰色	密 ◎	黒斑 煤付着	
316	椀	底径（6.2） 残高 1.8	小片。	ヨコナデ	ミガキ	乳白色 乳白色	密 ◎		
317	椀	底径 6.0 残高 1.4	吉備系。小片。	ヨコナデ・ナデ	ミガキ	乳白色 乳白色	密 ◎		13
318	皿	口径 8.5 器高 1.3	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	灰黄色 灰黄色	密・金 ◎		
319	皿	口径（9.4） 器高 1.8	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎	黒斑	
320	椀	底径（6.9） 残高 2.5	内黒椀。1／3の残存。	ヨコナデ	格子ミガキ	乳白色 黒色	密 ◎		
321	椀	口径（13.6） 残高 2.9	和泉型瓦器椀。小片。	ヨコナデ・ナデ	ミガキ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
322	椀	残高 2.7	和泉型瓦器椀。小片。	(口端)ヨコナデ ミガキ	ミガキ	黒灰色 白灰色	密・金 ◎		
323	甕	口径（19.8） 残高 5.3	頸部に三角形の工具痕。	回転ナデ 工具痕？	回転ナデ	黒褐色 暗褐色	密 ◎		
324	壺	残高 3.1	頸部に沈線文3条。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密 ◎		
325	深鉢	残高 2.7	沈線文3条。	(口端)キザミ ナデ	ナデ	乳灰色 黒色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
326	瓦	残長 9.7 厚さ 2.0	平瓦。桶巻き作り。	布目痕→ナデ かミガキ	細縄叩き →ナデ消し	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
327	瓦	残長 14.6 厚さ 2.0	丸瓦。	布目痕 一部ナデ消し	細縄叩き →ナデ消し	暗灰色 暗灰色	密 ◎		13

表17　池址３（土器だまり④）出土遺物観察表　　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
328	鉄滓	——	鉄	6.1	7.5	3.8	142.49		

表18　池址３（土器だまり④）出土遺物観察表　　銭貨

番号	銭名	法量 銭径(cm)	法量 孔寸(cm)	法量 外縁厚(cm)	法量 内側厚(cm)	法量 重さ(g)	初鋳年	備考	図版
329	皇宋通寶	2.4	0.7	0.12	0.08	1.24	1039年（寶元２年）		13
330	政和通寶	2.3	0.7	0.1	0.1	1.72	1111年（政和元年）		13

表19　ＳＫ１出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
331	甕	口径（39.4） 器高 62.9	肥前系。内面に漆喰貼付。	(口)ナデ・回転ナデ (胴)ナデ→擦痕	(口)回転ナデ (胴)ナデ	黒色 暗黒褐色	密 ◎	自然釉	13

表20　ＳＫ１出土遺物観察表　　木製品

番号	器　種	遺存状態	樹　種	法　量				備　　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	その他		
332	竹棒	——	タケ亜科	18.9	6.7	6.1			21
333	薄板	——	ツガ属	15.5	3.4	0.1			21
334	切りくず	——	マツ属複維管束亜属	7.7	4.0	1.3			21

表21　第Ⅵ層出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外　面	内　面				
335	甕	口径 (38.4) 残高　6.8	押圧凸帯文1条。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ・ナデ	淡茶色 淡黄茶色	石・長(1～3) ◎		
336	甕	残高　3.0	刻目凸帯文1条。	ヨコナデ・ナデ	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～4)金 ◎		
337	壺	口径 (28.3) 残高　1.9	櫛描波状文8条。	マメツ	マメツ	淡乳茶褐色 淡乳茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
338	壺	残高　8.6	波状文＋沈線文＋押圧凸帯文。	ハケ(4本／cm) →工具ナデ	マメツ	茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
339	器台	残高　1.6	櫛描沈線文6条。	マメツ	マメツ(ナデ)	乳白褐色 乳茶褐色	石・長(1)金 ◎		
340	器台	口径 (30.8) 残高　2.2	円形浮文2ヶ＋斜線文。	ヨコナデ ハケ(4本／cm)	ヨコナデ マメツ	淡橙茶色 淡橙茶色	石・長(1～3) ◎		
341	鉢	口径　(8.4) 残高　3.3	小片。	ナデ（マメツ）	ナデ(マメツ)	淡褐色 淡褐色	石・長(1～4)金 ○		
342	コシキ	底径　(5.1) 残高　6.0	転用品。焼成前穿孔(φ0.6cm)。	ミガキ (マメツ)	ナデ	淡褐色 灰褐色	石・長(1～5) ◎	黒斑	
343	坏蓋	口径 (15.5) 残高　2.2	小片。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	薄灰色 白灰色	密 ◎		
344	坏身	口径 (15.4) 残高　2.1	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表22　第Ⅵ層出土遺物観察表　　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
345	石庖丁	1／2	サヌカイト	6.2	7.0	1.4	93.36	未成品	
346	石錐	完存	サヌカイト	3.3	2.6	0.4	2.5	打製	
347	剥片	——	赤色珪質岩	2.4	4.4	0.8	10.92		

表23　第Ⅵ層出土遺物観察表　　木製品

番号	器　種	遺存状態	樹　種	法　量				備　　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	その他		
348	容器？	1／3	ヒノキ	23.7	5.1	3.2			

表24　トレンチ出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外　面	内　面				
349	坏	口径　14.0 器高　4.7	回転糸切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ ㊦ヨコナデ→ナデ	乳白色 乳白色	密・金 ○		14
350	坏	口径　14.0 器高　3.9	回転糸切り。ほぼ完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		14
351	坏	口径　14.6 器高　4.2	回転糸切り。4／5の残存。	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ナデ	乳褐色 乳褐色	密・金 ◎		
352	坏	口径 (15.8) 器高　4.3	回転糸切り。2／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
353	坏	口径 (14.2) 器高　3.6	回転糸切り。1／3の残存。	ヨコナデ	㊦ヨコナデ →一部工具痕	淡茶色 淡茶色	石・長(1～5)金 ◎		
354	坏	口径 (15.0) 器高　3.8	回転ヘラ切り。小片。	マメツ	マメツ（ナデ）	淡黄色 淡黄色	密 ○		
355	坏	口径 (14.2) 器高　4.1	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	密 ◎	黒斑？	
356	坏	口径 (13.4) 器高　3.1	回転ヘラ切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		
357	坏	口径　14.1 器高　4.1	回転糸切り。完存品。	ヨコナデ	ヨコナデ ㊦ナデ	淡白黄色 淡白黄色	石(1～2) ◎	黒斑	14

トレンチ出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
358	坏	口径 (13.7) 器高 3.4	小片。	ヨコナデ (底)マメツ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄色	密 ◎		
359	坏	口径 (15.4) 器高 4.0	回転糸切り。2／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ナデ	淡褐色 淡灰色	密・金 ◎	黒斑	
360	坏	口径 (10.9) 器高 3.5	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	淡橙色 淡橙色	密 ◎	黒斑	
361	坏	底径 8.5 残高 2.8	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白黄色 乳白黄色	密 ◎		
362	坏	底径 (7.7) 残高 1.5	小片。	ヨコナデ (底)マメツ	ヨコナデ	乳茶色 乳白茶色	密 ◎		
363	坏	底径 6.6 残高 1.7	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
364	坏	底径 (8.0) 残高 2.6	小片。	マメツ (ヨコナデ)	ナデ (底)ヨコナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密・金 ◎		
365	坏	底径 10.2 残高 3.4	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
366	坏	底径 6.9 残高 2.1	回転ヘラ切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密・金 ◎		
367	坏	底径 7.4 残高 3.9	回転ヘラ切り。	ナデ・ヨコナデ	ナデ (底)ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎		
368	坏	底径 7.2 残高 3.0	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	密・金 ◎		
369	坏	底径 (6.9) 残高 2.5	回転糸切り。焼成前穿孔(φ0.8cm)。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
370	坏	底径 (7.0) 残高 3.4	回転ヘラ切り。1／3の残存。	ヨコナデ (底)マメツ	ヨコナデ	淡乳黄色 淡乳黄色	密 ◎		
371	坏	底径 7.8 残高 3.3	回転糸切り。底部完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	密 ◎		
372	坏	底径 (6.8) 残高 3.7	スノコ痕。籾圧痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		14
373	椀	底径 (9.0) 残高 3.2	底部1／3の残存。	(体下)ケズリ→ナデ (底)ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ◎		
374	椀	残高 3.3	小片。	ヨコナデ	ナデ(マメツ)	乳橙色 乳橙色	密 ◎		
375	椀	底径 (8.1) 残高 2.6	1／2の残存。	ハケ？・ ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密・金 ◎		
376	椀	底径 (9.2) 残高 1.5	1／4の残存。	ヨコナデ	—	乳黄色 乳黄色	密 ◎		
377	椀	底径 6.5 残高 2.0	1／2の残存。内面に重焼痕。	ヨコナデ	ナデ・ミガキ	乳茶色 乳茶褐色	密 ◎		
378	椀	底径 (7.6) 残高 2.1	1／4の残存。	ヨコナデ	ハケ→ミガキ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
379	椀	底径 7.4 残高 3.9	白色系。底部完形。	ヨコナデ	ナデ・ミガキ	乳白色 乳白色	密 ◎		
380	椀	底径 6.9 残高 2.5	内黒椀。	ヨコナデ マメツ	マメツ	乳白色 黒色	密 ◎		
381	皿	口径 (9.1) 器高 2.0	回転糸切り。ほぼ完形。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		14
382	皿	口径 (9.2) 器高 1.7	回転ヘラ切り。1／4の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳黄白色	密・金 ◎		
383	皿	口径 (9.0) 器高 1.6	回転ヘラ切り。2／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密・金 ◎		
384	皿	口径 (9.6) 器高 1.7	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡乳黄白色 淡乳黄白色	密・金 ◎		
385	皿	口径 (9.2) 器高 2.2	回転ヘラ切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳黄白色	密 ◎		
386	皿	口径 (9.0) 器高 1.8	小片。	ヨコナデ ナデ(マメツ)	ヨコナデ	淡橙色 乳黄色	密・金 ◎		
387	皿	口径 (8.7) 器高 1.8	回転糸切り。1／2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎		
388	皿	口径 8.7 器高 1.7	回転糸切り。口縁部一部欠損。	マメツ	ヨコナデ・ナデ	淡乳黄色 淡乳黄色	密 ◎		
389	皿	口径 (8.2) 器高 1.5	回転糸切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ◎		

トレンチ出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
390	皿	口径 8.3 器高 1.7	回転糸切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ→ナデ	乳黄白色 乳黄白色	密 ◎	黒斑	
391	皿	口径 (8.0) 器高 1.3	回転糸切り。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 淡黄色	密 ◎		
392	皿	口径 8.3 器高 1.5	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色 橙褐色	密・金 ◎		
393	皿	口径 8.0 器高 2.2	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ (底)ヨコナデ・ナデ	乳白茶色 乳白茶色	密 ◎		
394	皿	口径 9.5 器高 1.9	回転ヘラ切り。口縁部一部欠損。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	黒斑	
395	鍋	口径 (31.9) 残高 5.0	小片。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	煤付着	
396	鍋	残高 4.7	鍔上面に未貫通円孔。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 茶褐色	石・長(1～4) ○	黒斑	
397	甕	口径 (16.0) 残高 2.5	「く」の字口縁。小片。	(口)ヨコナデ (頸)ハケ→ナデ	(口)ハケ(6本/cm) (胴)ナデ・ケズリ	乳白色 乳白色	石・長(1～2) ◎		
398	甕	口径 (13.6) 残高 4.7	小片。	(口端)ヨコナデ (頸)ナデ・ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ヨコナデ→工具痕	黒褐色 黒褐色	石・長(1)金 ◎	煤付着	
399	鉢	口径 (17.8) 残高 7.5	外反口縁。	ナデ マメツ	ナデ マメツ	茶褐色 灰茶色	石・長(1～4) ◎	煤付着	
400	皿	口径 (17.0) 残高 3.3	放射状暗文。	(口)ヨコナデ (体)ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1)金 ◎		14
401	高坏	残高 2.9	放射状暗文。	ミガキ・ナデ	(坏底)ミガキ (脚)シボリ痕	乳黄褐色 乳黄褐色	密・金 ◎		
402	椀	口径 (16.4) 残高 3.5	和泉型瓦器椀。小片。	(口)ヨコナデ (体)ナデ	(口)ヨコナデ (体)ミガキ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
403	椀	口径 (14.0) 残高 2.8	和泉型瓦器椀。小片。	(口)ヨコナデ (体)ナデ(指頭痕)	(口)ヨコナデ (体)ヨコナデ→ミガキ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
404	椀	口径 (14.5) 残高 3.3	和泉型瓦器椀。小片。	(口)ヨコナデ (体)ナデ	ミガキ	黒灰色 暗灰色	密 ◎		
405	椀	口径 (14.9) 残高 2.8	和泉型瓦器椀。底部完形。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ ミガキ(マメツ)	黒灰色 暗灰色	密 ◎		
406	椀	残高 1.5	小片。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ →ミガキ	灰色 灰色	密・銀 ◎		
407	椀	口径 (16.0) 残高 2.3	小片。	ミガキ・ナデ	(口)ヨコナデ (体)ミガキ	暗灰色 暗灰色	密・銀 ◎		
408	椀	口径 (14.8) 残高 3.6	和泉型瓦器椀。小片。	(口)ヨコナデ (体)ナデ	ミガキ (マメツ)	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
409	皿	口径 (13.0) 残高 2.8	小片。	(口)ヨコナデ (体)ナデ	ナデ・ミガキ	黒色 暗灰色	密 ◎		
410	碗	口径 (16.7) 残高 4.2	白磁。小片。	施釉	施釉	乳灰色 乳灰色	密 ◎	胎土： 灰白色	
411	香炉	口径 (8.4) 残高 3.9	青磁。小片。	施釉	回転ナデ 施釉	淡青緑色 淡青緑色	密 ◎	胎土： 灰白色	
412	椀？	口径 (13.8) 残高 4.6	口縁部内面に施釉。	回転ナデ 施釉	回転ナデ	暗茶色 明茶色	密 ◎		
413	こね鉢	口径 (39.9) 残高 6.9	小片。	(口)ヨコナデ (体)ナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～3)金 ◎	煤付着	
414	碗	底径 5.0 残高 2.5	京焼。「清水」銘あり。	施釉 (底)ナデ	施釉	淡乳褐色 淡乳褐色	密 ◎		14
415	徳利	残高 3.5	備前焼。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶色 赤茶色	密 ◎		
416	坏蓋	口径 (10.1) 残高 1.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
417	坏蓋	残高 3.8	小片。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰茶色 灰茶色	密 ◎		
418	坏身	口径 (10.2) 残高 3.6	1／2の残存。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ (底)ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		14
419	坏身	口径 (12.2) 残高 3.6	1／4の残存。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	(口)回転ナデ (底)回転ナデ→ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
420	坏身	残高 1.5	底部に線刻。	回転ヘラケズリ	回転ナデ →ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
421	壺	残高 8.1	沈線＋斜線文。	マメツ	回転ナデ	淡灰色 灰色	密 ◎	自然釉	

トレンチ出土遺物観察表　　土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
422	提瓶	口径 6.1 残高 3.6	口縁部小片。	㊀回転ナデ ㊁カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
423	壺	口径 (23.0) 残高 3.4	内面凸帯文＋無軸の羽状文。	マメツ ハケ→ナデ	マメツ ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1～2) ◎		
424	壺	口径 (18.7) 残高 5.8	複合口縁壺。波状文。	ハクリ・マメツ	マメツ(ナデ)	淡桃褐色 淡桃褐色	石・長(1～3)金 ○		
425	壺	残高 3.3	凸帯上に斜格子目文。	ヨコナデ	ナデ	淡茶色 暗灰褐色	石・長(1～2)金 ◎		
426	壺	残高 4.8	押圧凸帯文2条＋沈線文(貝殻)。	ナデ	ナデ	乳黄褐色 乳桃褐色	石・長(1～3)金 ◎		
427	壺	底径 5.0 残高 2.7	平底。	板ナデ状	ナデ	淡茶色 灰黄褐色	石・長(1～3)金 ◎		
428	甕	底径 (6.6) 残高 7.3	平底。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳黄白色	石・長(1～6)金 ◎		
429	器台	残高 10.6	円孔(φ2.0cm)。	マメツ ハケ	マメツ・ハケ ナデ	乳茶褐色 茶褐色	石・長(1～4)金 ○		
430	坏	口径 (11.6) 残高 3.6	暗文。小片。	ナデ	ナデ	乳橙褐色 乳橙褐色	密 ◎		
431	瓦	残長 6.2 厚さ 2.3	平瓦。	布目痕→ナデ	格子叩き ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
432	瓦	残長 19.4 厚さ 2.4	平瓦。	細縄叩き →ナデ消し	細縄→ナデ消し →格子叩き	淡灰色 淡黒色	密 ◎		
433	瓦	残長 20.9 厚さ 2.3	平瓦。桶巻き作り。	布目痕 →模骨痕	格子叩き →縦工具痕	乳灰黄褐色 灰黄褐色	密・金 ◎		14
434	瓦	残長 12.2 厚さ 2.3	平瓦。一枚作り。	布目痕	細縄叩き	淡灰色 灰色	密 ◎		
435	瓦	残長 8.2 厚さ 1.9	平瓦。	ナデ	細縄叩き →すり消し	淡灰色 淡灰色	密 ◎		
436	瓦	残長 10.4 厚さ 2.6	平瓦。桶巻き作り。	布目痕 →斜工具痕	細縄叩き	乳白色 乳白色	長(1～7) ◎		14
437	瓦	残長 7.2 厚さ 1.8	丸瓦。	ナデ	布目痕	暗灰色 黄灰色	密 ◎		
438	瓦	残長 9.4 厚さ 1.2	平瓦。	ナデ→ミガキ？	ナデ(工具痕)	黒灰色 黒灰色	密 ◎		

表25　トレンチ出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
439	石鏃丁	3／4	緑色片岩	4.9	10.9	1.3	138.64	未成品	
440	素材	——	緑色片岩	9.2	3.5	2.5	121.51		
441	素材	——	結晶片岩	5.9	8.9	1.6	116.24		
442	剥片	——	サヌカイト	3.9	5.3	0.9	19.10		
443	敲石	完存	緑色片岩	10.0	4.9	1.7	147.8		

第３章　道後湯之町遺跡

１．調査の経緯（第34図）

（１）調査の経緯

調査地は道後湯築城跡の北側に位置し、調査以前はビジネスホテルや飲食店、駐車場として利用されていた。以下、調査工程を略記する。

調査地内には、調査地中央部に生活道路が通っていたため、その部分は調査対象から除外した。発掘調査は調査地を３区（１～３区）に分区し、さらに２区と３区はそれぞれ２Ａ区、２Ｂ区、３Ａ区、３Ｂ区と細分区して調査を実施した。

2005（平成17）年６月１日より重機による表土掘削作業を開始した。まず、１区から作業を開始し、引き続き３Ａ区、３Ｂ区の掘削をおこなった。６月６日より、作業員を導入して１区の調査を開始した。１区からは自然流路を検出し、流路の掘り下げと測量や写真撮影等の記録をとった。６月14日からは調査区西壁沿いに深掘トレンチを設定し、土層観察をおこなった。６月16日に１区の調査を終了し、３区の調査に移った。３Ｂ区では包含層が残存していたため、遺物を採取しながら掘り下げをし、遺構検出作業をおこなった。３区からは溝を検出し、掘り下げと測量、写真撮影等をおこなった。６月22日からは、３区の調査と併行して２区の調査をおこなった。２区からは土坑と溝を検出した。７月19日、各調査区にて分析用の土壌サンプルを採取した。７月19日より重機による埋め戻し作業をおこない、７月29日、屋外調査をすべて終了した。

（２）調査組織

遺 跡 名：道後湯之町遺跡
所 在 地：松山市道後湯之町875-9外
調査面積：193.70㎡
調査期間：2005（平成17）年６月１日～同年７月29日
調査要因：松山市道道後43号線道路改良工事に伴う事前発掘調査
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：相原　秀仁

2．層　位

（1）基本層位（第35～37図）

調査地は松山平野北東部の低位部、標高39.2mに立地する。調査以前は、既存宅地である。調査地の基本層位は、以下のとおりである。

第Ⅰ層：近現代の造成に伴う客土で、地表下1.0～1.8mまで開発がおこなわれている。

第Ⅱ層：青灰色土で、１区と２区とにみられ、層厚10～30cmを測る。本層中からは主に中世段階の土師器片や陶磁器片が数点出土している。

第Ⅲ層：灰褐色土で、３A区を除く地区にみられ、層厚10～30cmを測る。本層中からは、主に中世段階の土師器片や陶磁器片が少量出土している。なお、調査壁の土層観察により、１区検出の自然流路は本層上面にて形成されていることが判明した。

第Ⅳ層：やや砂質を帯びた緑灰色土で、３B区のみにみられ、層厚9～12cmを測る。本層中からは少量の土師器片が出土した。

第Ⅴ層：黒褐色を呈する砂質土で、調査区全域にみられ、層厚10～20cmを測る。本層中からは少量の土師器片が出土した。なお、本層下面にて溝ＳＤ２を検出した。

第Ⅵ層：黒色を呈する砂質土で、調査区全域にみられ、層厚５～20cmを測る。本層中からは縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器のほか石器が出土した。なお、本層下面にて土坑ＳＫ１を検出した。

第Ⅶ層：黒色を呈する粘質土で、１区と２区とにみられ、層厚５～15cmを測る。本層中からは土器片が数点出土した。なお、本層中にて溝ＳＤ３を検出した。

第Ⅷ層：深掘トレンチにより確認した土層である。灰色を呈する砂層で、１区と２区にみられ、層厚20～40cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

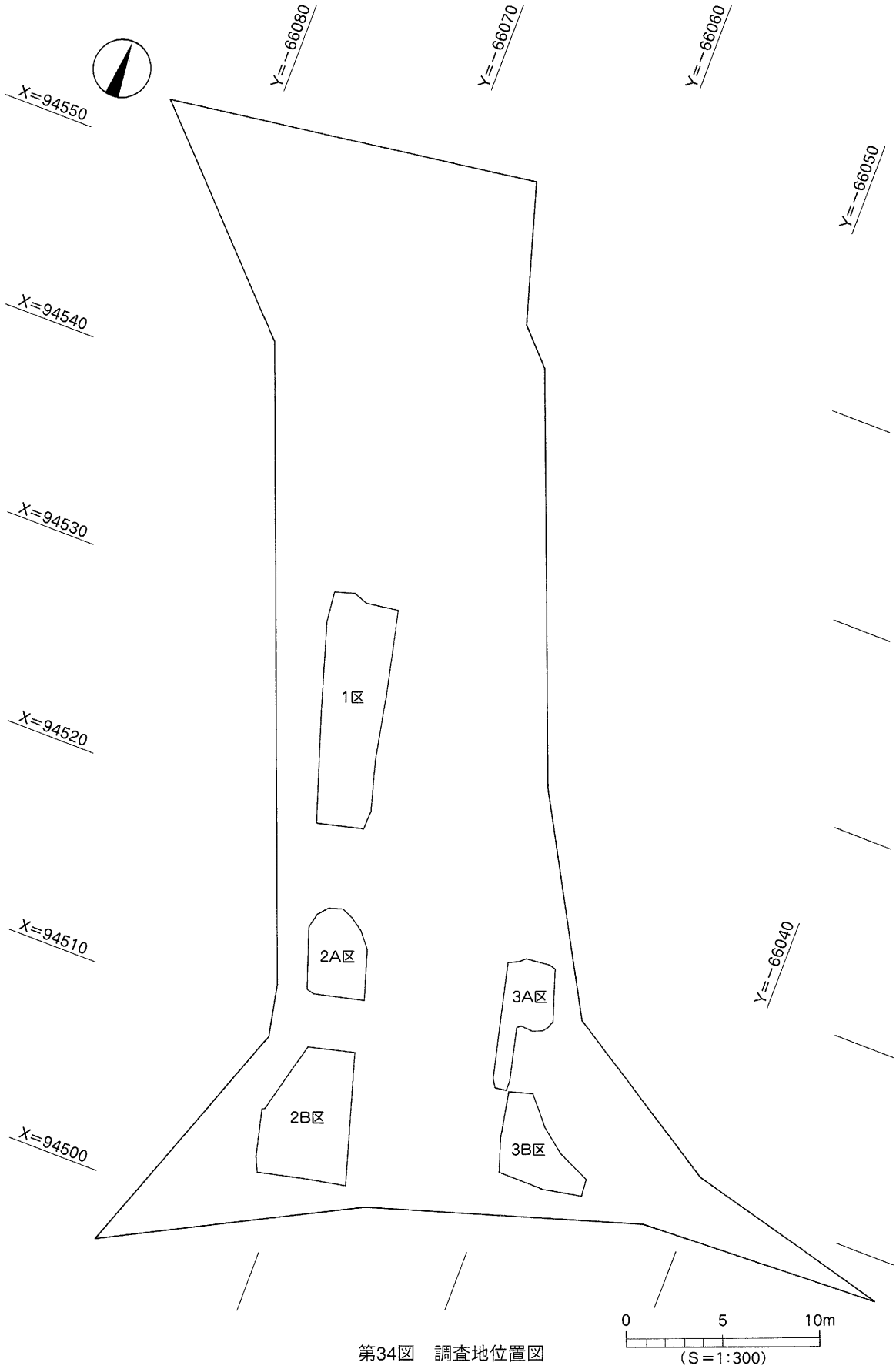
第Ⅸ層：深掘トレンチにより確認した土層である。明青灰色を呈する粘性の強い砂で、１区と２区にみられ、層厚30～40cmを測る。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅹ層：黄褐色を呈する風化土で、いわゆる岩盤層である。１区と３区にみられ、本層上面が３区における最終遺構検出面となる。

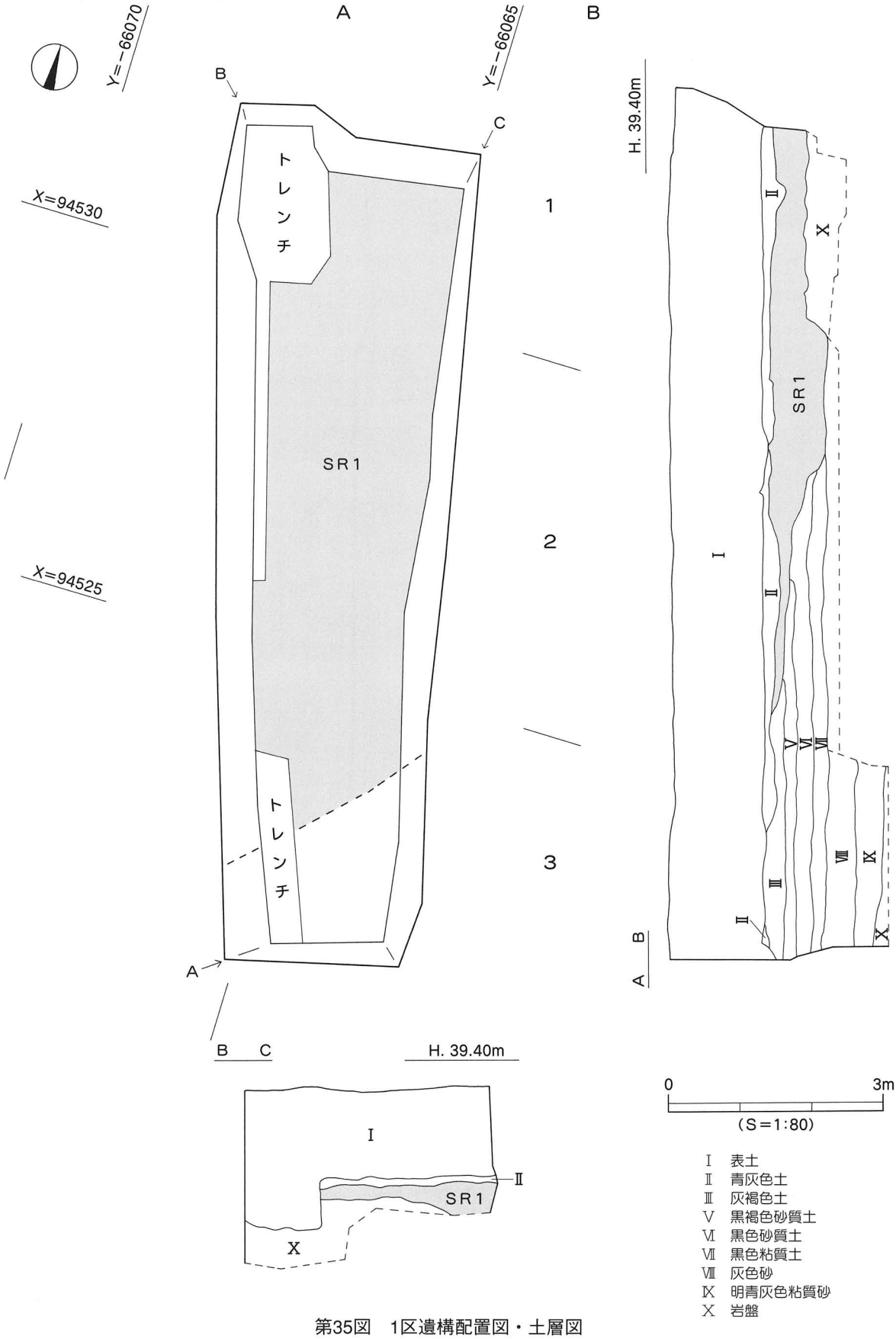
検出遺構や出土遺物から、第Ⅵ層は古墳時代、第Ⅱ層から第Ⅴ層までは中世までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査地内を５m四方のグリットに分けた。グリット名は調査地西側から東側へ向けてA･B･C･D･E、北側から南側へ向けて１・２・３・・・７とし、A1・A2・・・E7といったグリット名を付した。

（2）検出遺構・遺物

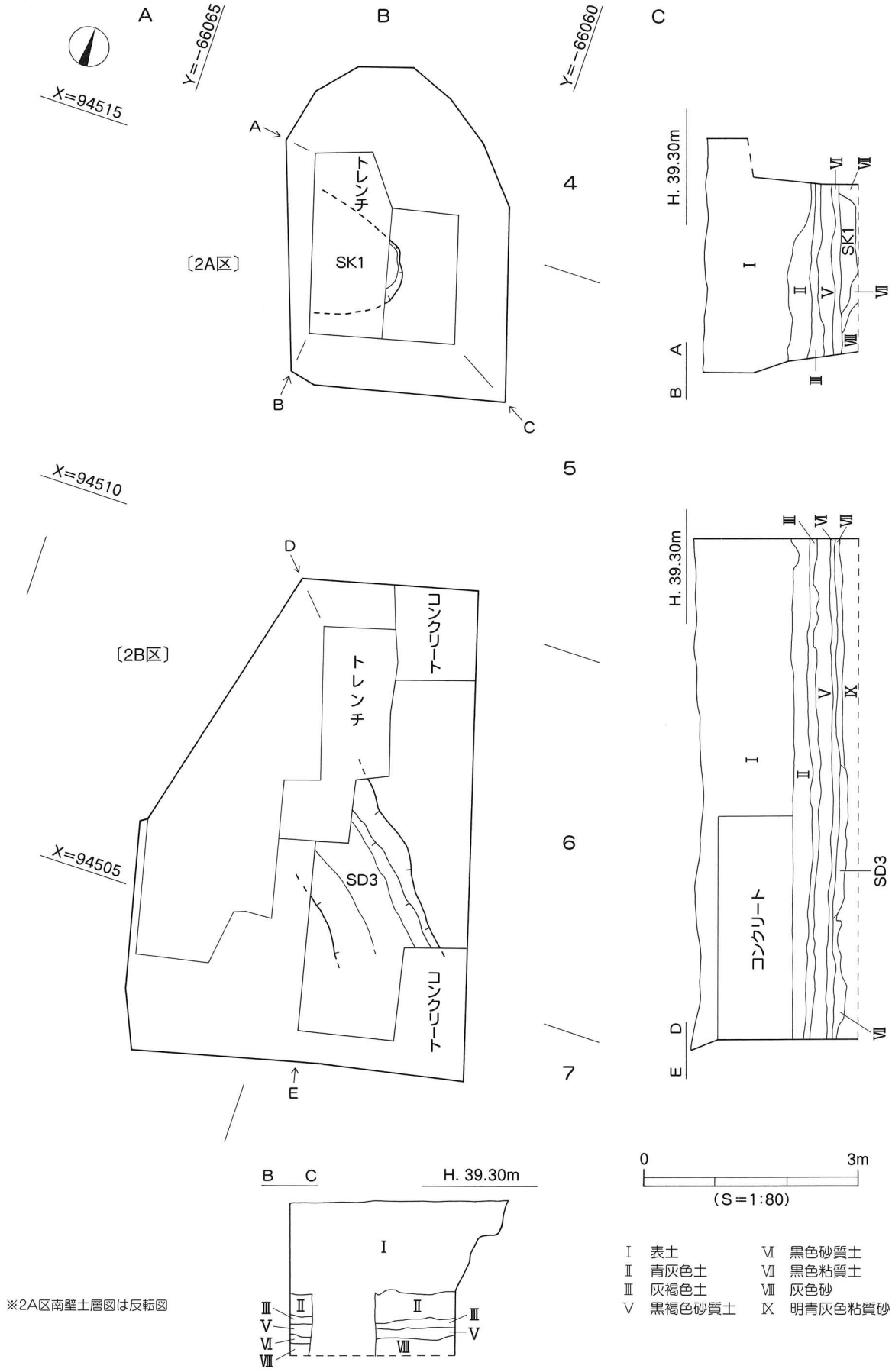
調査では、縄文時代から近世までの遺構や遺物を検出した。遺構は古墳時代と中世のもので、溝３条〔SD１・２：中世、SD3：古墳時代〕、自然流路１条〔SR１：中世〕、土坑１基〔SK１：古墳時代〕である。遺物は遺構及び包含層中より、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器（備前焼、亀山焼）、木器、石器、古銭が出土した。


Y=−66080
Y=−66070
Y=−66060
Y=−66050
Y=−66040
X=94550
X=94540
X=94530
X=94520
X=94510
X=94500
1区
2A区
2B区
3A区
3B区
0
5
10m
(S=1:300)

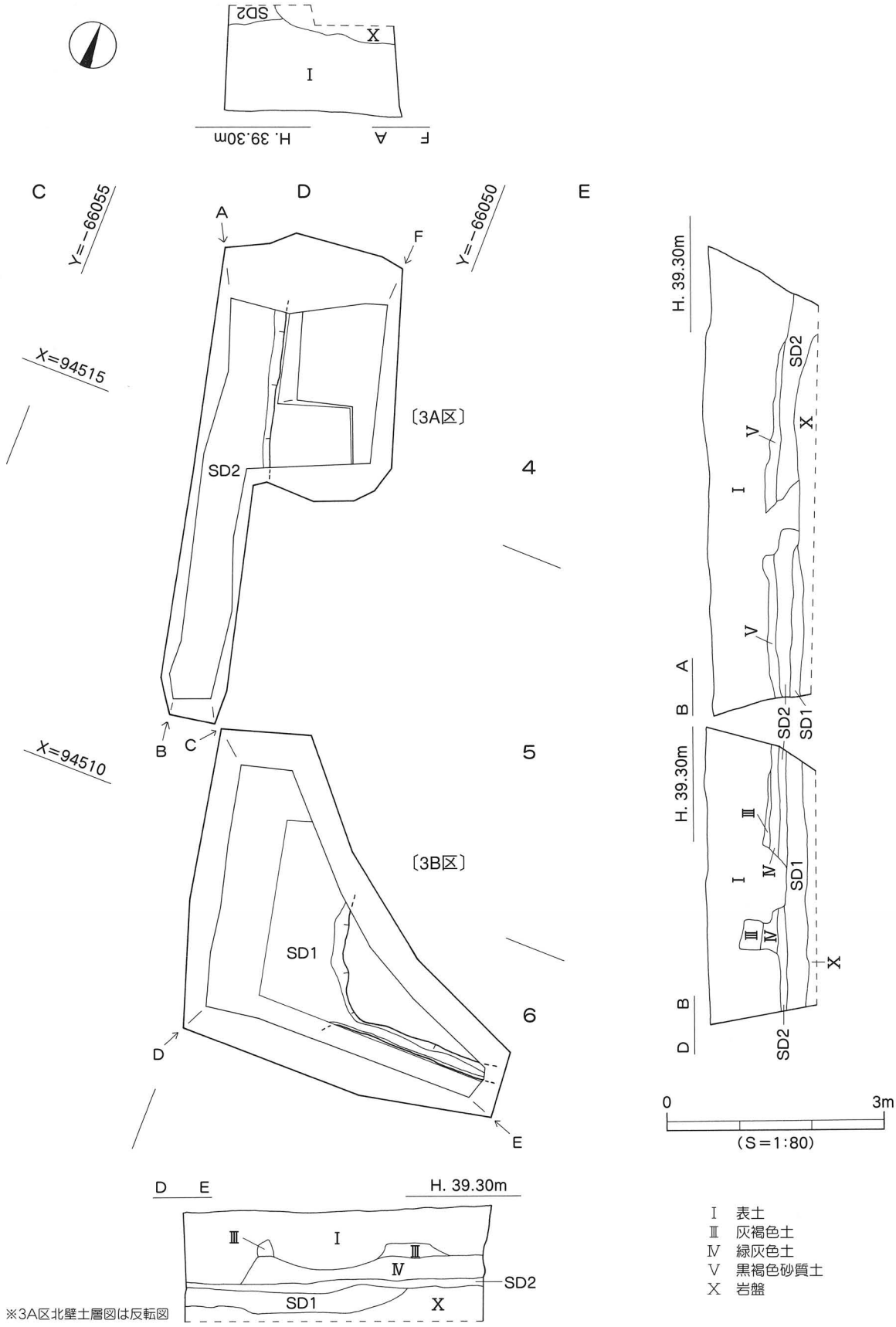
第34図　調査地位置図



第35図　1区遺構配置図・土層図



第36図　2区遺構配置図・土層図



第37図　3区遺構配置図・土層図

3．遺構と遺物

調査では溝３条、自然流路１条、土坑１基を検出した。ここでは、時代別に各遺構を説明する。

（1）古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝１条と土坑１基を検出した。

1）溝

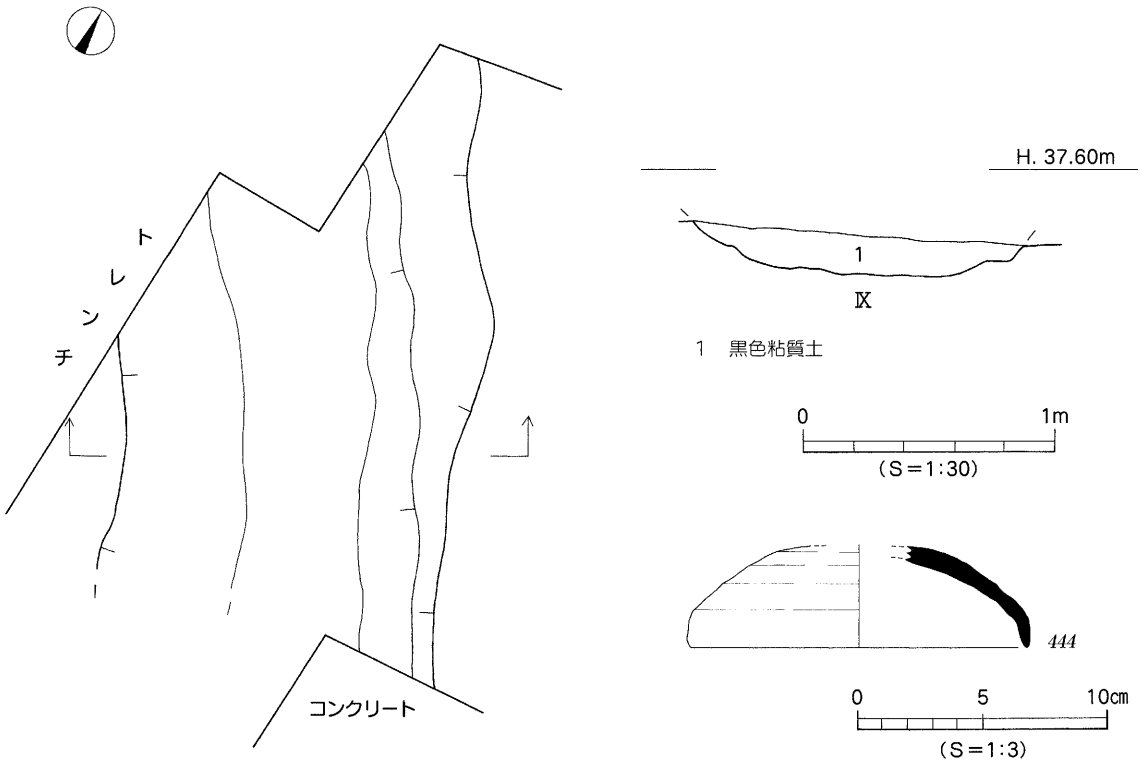
ＳＤ3（第38図、図版17）

調査地南西部、２Ｂ区で検出した北西－南東方向の溝で、溝両端は調査区外に続く。第Ⅸ層上面での検出である。溝の規模は幅1.36～1.50m、検出長2.5m、深さ16cmを測る。断面形態は浅い「U」字状を呈するが、溝東側壁体には幅10～30cm、高さ５cm程度のテラス状の高まりをもつ。埋土は第Ⅶ層と同様の黒色粘質土単層である。溝底面は比較的平坦で、わずかに北側から南側へ向けて緩傾斜をなす（比高差３cm）。遺物は埋土中より土師器片と須恵器片が数点出土した。実測可能な遺物を１点のみ掲載した。

出土遺物（第38図）

444は須恵器坏蓋で、丸みのある天井部からなだらかに口縁部に至り口縁端部は尖る。天井部1／2の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。

時期：出土した須恵器の特徴より古墳時代後期、６世紀後半とする。



第38図　SD3 測量図・出土遺物実測図

2）土坑

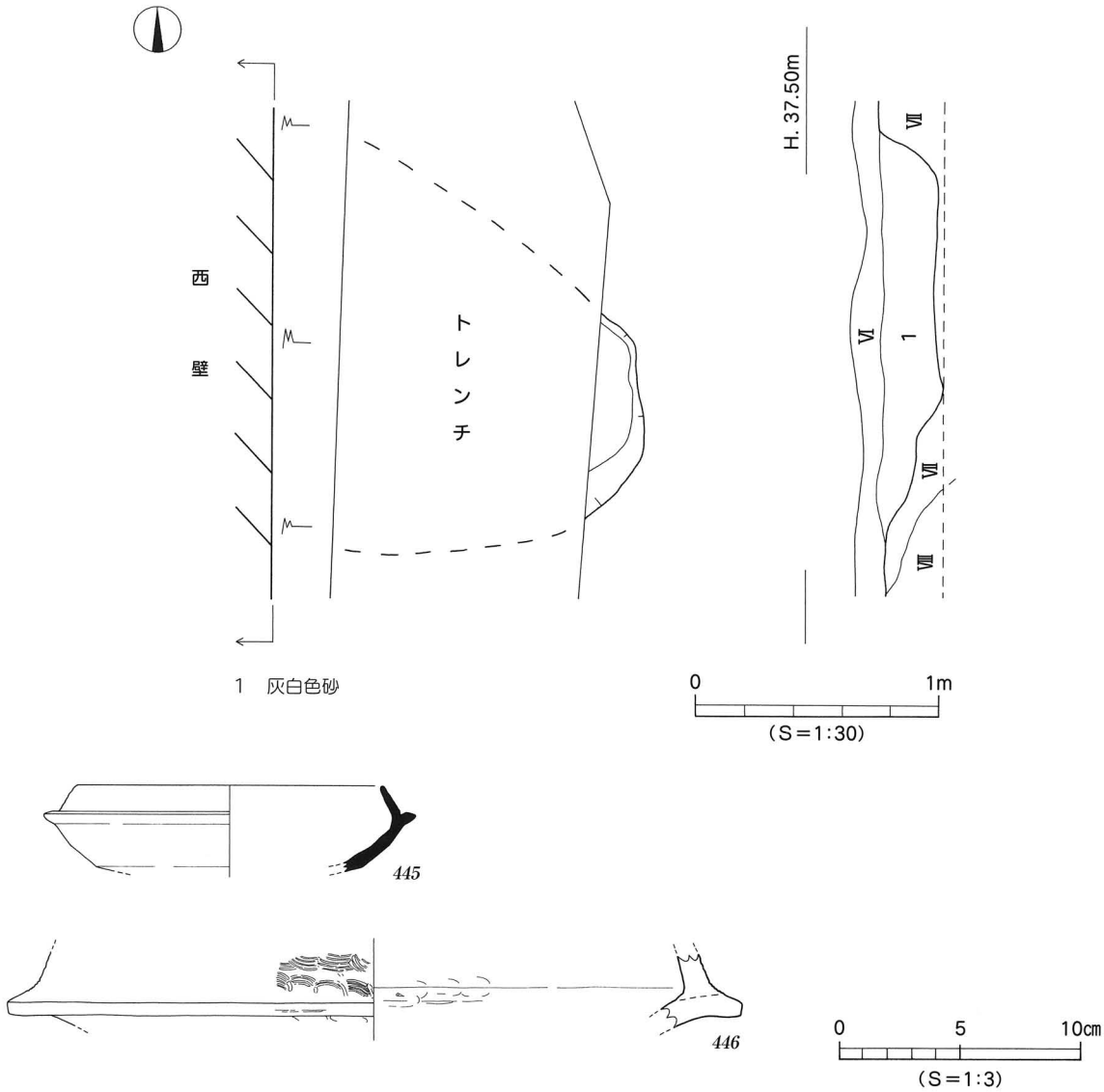
ＳＫ１（第39図、図版17）

調査地南西部、２Ａ区で検出した。土坑西側はトレンチに削平されているが、調査区西壁の土層観察にて調査区外に続くことがわかった。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅵ層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと推測され、規模は南北検出長1.80m、東西検出長1.54m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑南側壁体にはテラス状のたかまりをもつ。埋土は灰白色砂である。遺物は埋土中より弥生土器片、土師器片、須恵器片が少量出土した。実測可能な遺物を２点掲載した。

出土遺物（第39図）

445は須恵器坏身で、たちあがりは低く内傾し、たちあがり端部は尖り気味に丸く仕上げる。446は弥生土器の複合口縁壺で、口縁部外面に櫛描き波状文を施す。

時期：出土した須恵器の特徴より古墳時代後期、６世紀後半とする。



第39図　SK1 測量図・出土遺物実測図

（2）中世の遺構と遺物

中世の遺構は、溝２条と自然流路１条を検出した。

１）溝

ＳＤ１（第40図、図版18・19）

調査地南東部、３Ｂ区で検出した溝で、途中、北側から東側へ向けて「Ｌ」字状に折れ曲がる。溝北側、東側及び南側は調査区外に続く。第Ｘ層上面の検出で、ＳＤ１上面は溝ＳＤ２が覆う。本来、３Ａ区にも存在していたものが、溝の大部分はSD２に削平もしくは埋戻されたものと推測され、平面形態の検出は３Ｂ区のみとなった。溝の規模は、東西検出長3.30m、南北検出長2.44m、深さは最深部で26cmを測る。なお、東側へ折れ曲がる部分では、溝の規模は幅16～22cm、深さ６～８cmである。断面形態は浅い「U」字状を呈し、埋土は暗褐色を呈する砂質土である。溝底面は平坦であり、比高差は認められない。遺物は埋土上位付近より土師器片、須恵器片、陶磁器片のほか、径５～25cm大の円礫が散在して出土した。実測可能な遺物を１点掲載した。

出土遺物（第40図）

447は備前焼の摺鉢で、口縁部は欠損している。体部内面に８条の条線が残る。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね13世紀以前とする。

SD２（第41図）

調査地南東部、３Ａ区で検出した南北方向の溝で、溝両端及び西側は調査区外に続く。第Ｘ層上面での検出で、第Ｖ層が覆う。平面形態の検出は３Ａ区のみであるが、調査壁の土層観察により、３B区においてもＳＤ2埋土と考えられる土層が検出されたことから、本来は３B区にも存在していたものと推測される。ただし、溝の形状は不明である。なお、土層観察の結果、ＳＤ2下面にはＳＤ1が存在する。溝の規模は幅１ｍ以上、深さは最深部で12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗緑灰色土単層である。溝底面はほぼ平坦であるが、わずかに北側から南側へ向けて緩傾斜をなす（比高差３cm）。遺物は埋土中より土師器片、須恵器片、陶磁器片が数点出土した。実測可能な遺物を２点掲載した。

出土遺物（第41図）

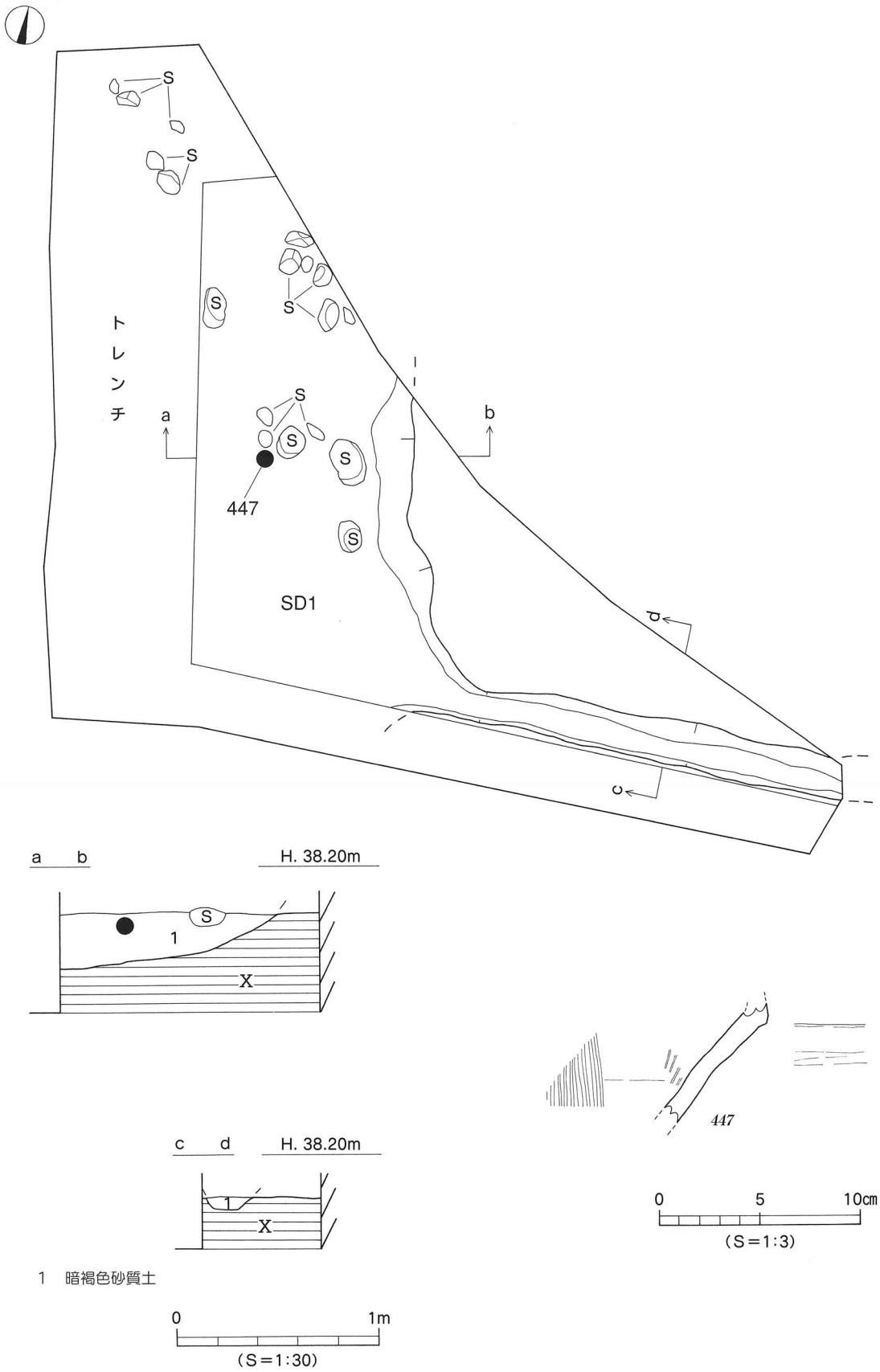
448は土師器土釜の口縁部片で、口縁部下に断面三角形状の鍔が付く。449は土師器坏の口縁部片で、体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。

時期：出土した遺物の特徴より、13世紀とする。

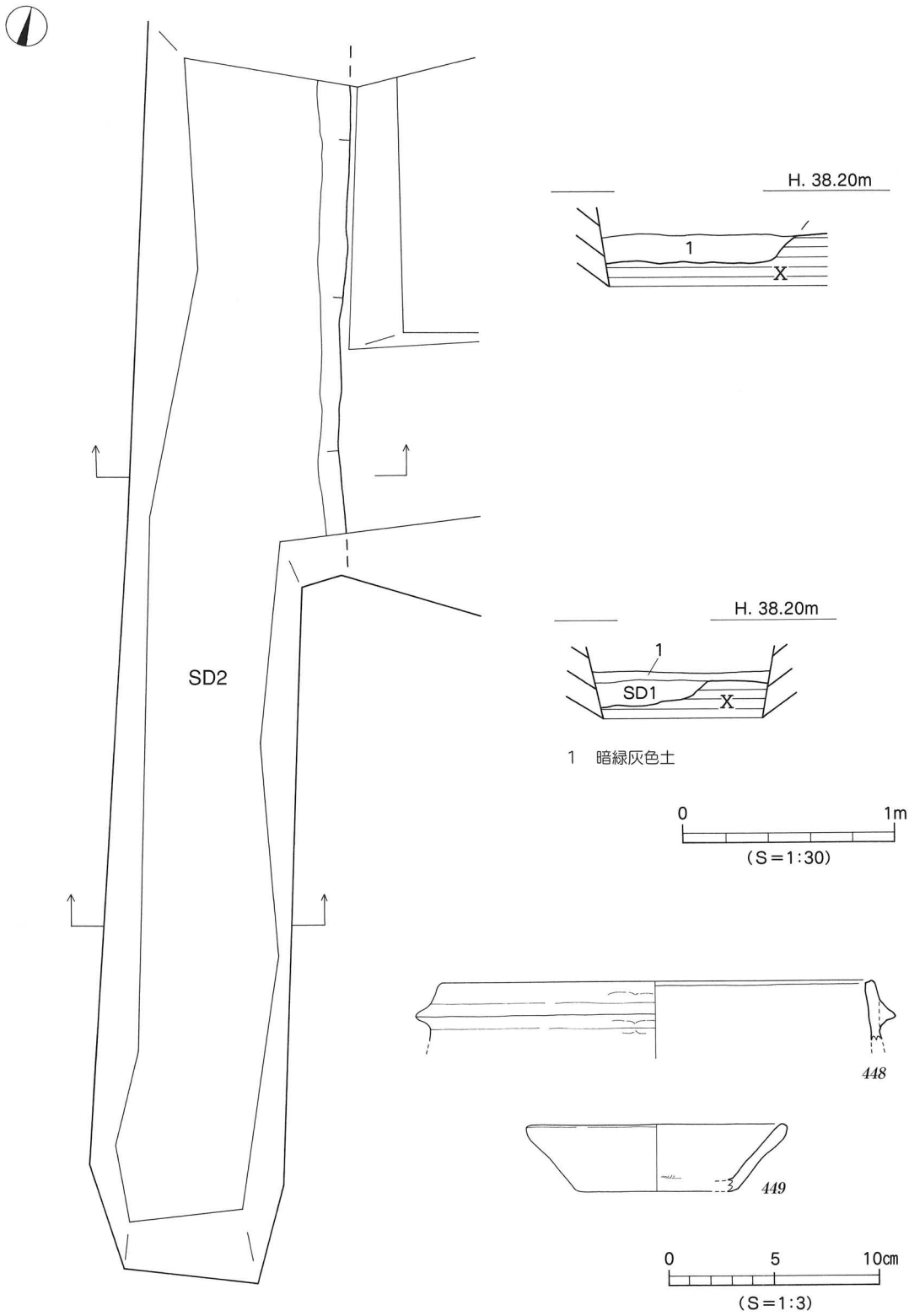
２）自然流路

ＳＲ１（第42図、図版15）

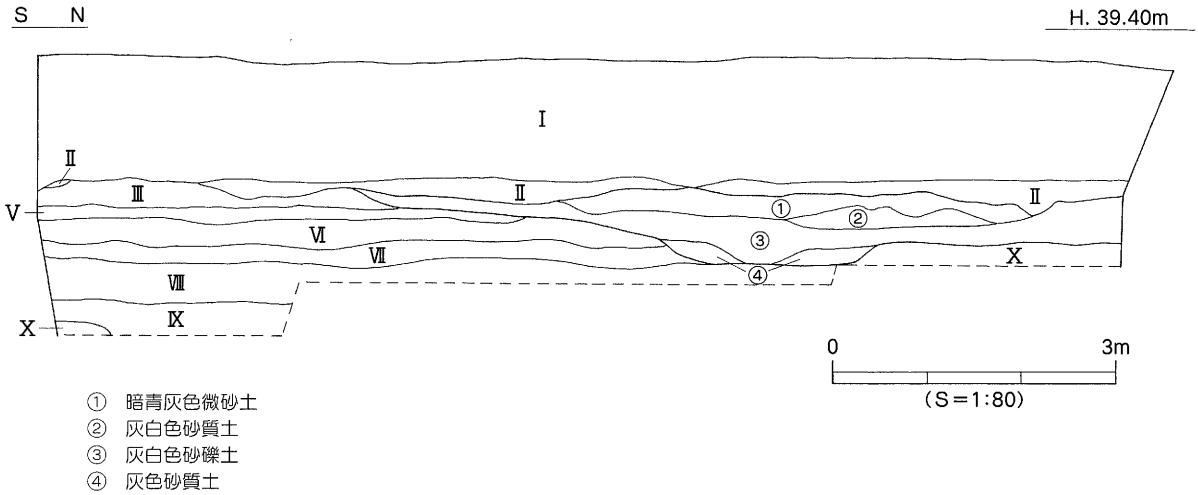
調査地中央部、１区で検出した。調査壁の土層観察により確認した北東－南西方向に流れる流路で、流路両端は調査区外に続く。第Ⅲ層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。流路の規模は東西検出長3.4m、南北検出長10.6mを測る。なお、流路の深さは最深部で80cmを測り、流路底面は第Ｘ層岩盤層に及ぶ。埋土は大きく４層に分層され、埋土上位より、①層暗青灰色微砂土、②層灰白色砂質土、③層灰白色砂礫土（径３～５cm大の円礫含む）、④層灰色砂質土である。遺物は主に①層中からの出土であり、土師器、陶磁器のほか木器が出土した。



第40図　SD1 測量図・出土遺物実測図



第41図　SD2 測量図・出土遺物実測図



第42図　SR1 断面図

出土遺物（第43～45図、図版20・21）

450は土師器土釜片で、体底部は四角形状を呈する。15世紀。451は土師器坏の底部片で、底部調整は不明である。452・453は東播磨系のこね鉢で、452の口縁部は上方に肥厚し注口をもつ。454～457は備前焼の摺鉢で、455～457の体部内面には条線が残る。15～16世紀。458は備前焼の壺で、口縁端部は珠玉状となる。459は備前焼の甕底部である。15世紀。460は亀山焼の甕で、口縁端部は上下方に肥厚し、胴部外面に0.6㎝四方の格子叩きを施す。15世紀。461は肥前系の碗、462は清水焼のお猪口である。462の体部外面には「清」と「紅」の文字が施される。19世紀。463～465は木器で、463～465は加工痕の残る杭、466は切りくずである。

時期：出土した土師器や陶磁器の特徴より、概ね15世紀代の流路とする。

（3）その他の遺構と遺物

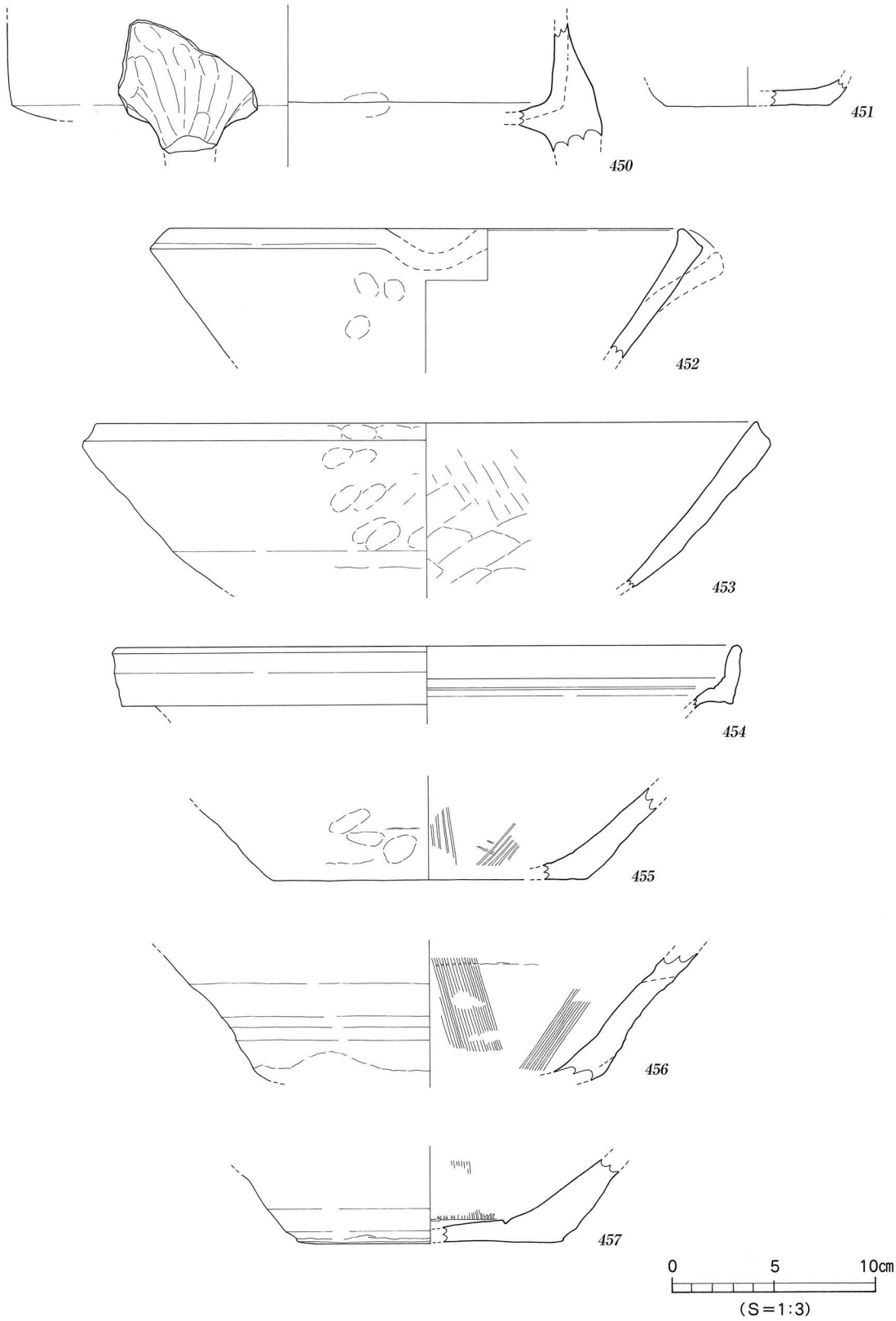
1）包含層出土遺物（第46・47図、図版20）

（ⅰ）第Ⅱ層出土遺物（467～472）

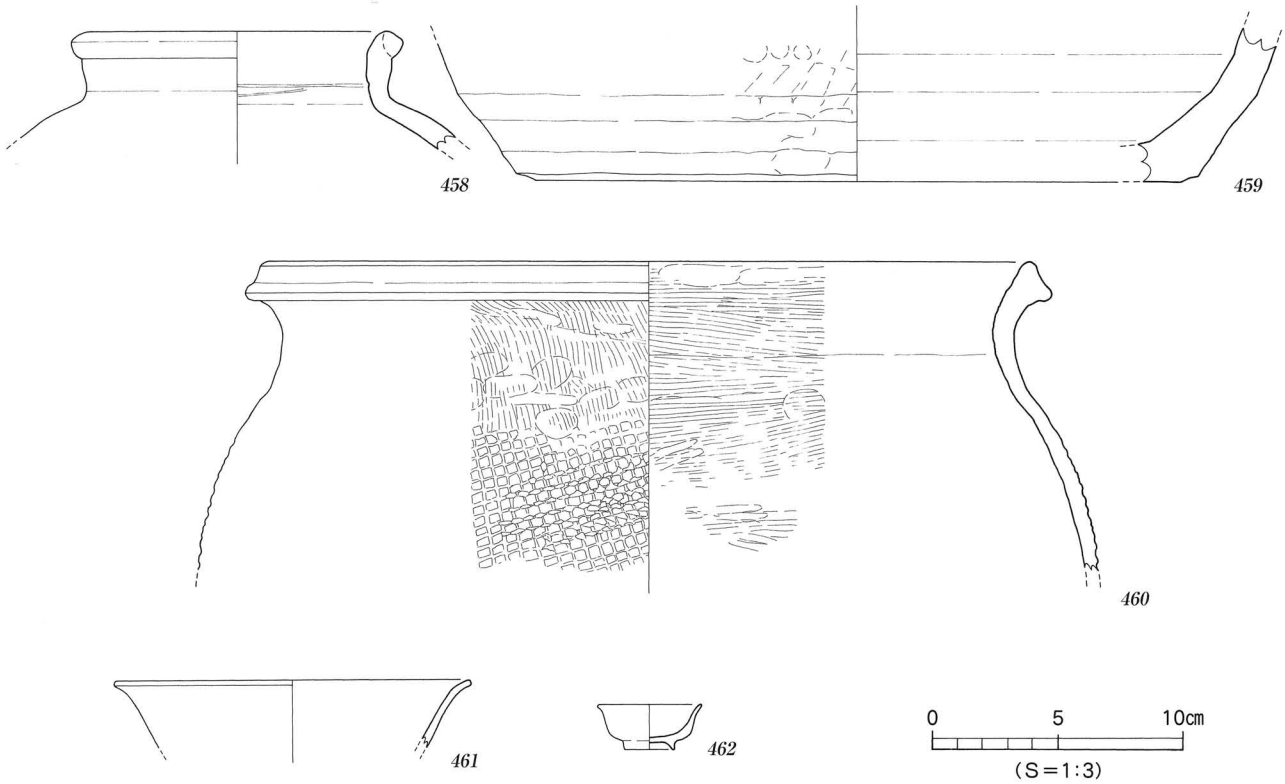
467・468は土師器坏で、468の底部切り離しは回転糸切り技法による。469は土師器土釜の脚部片で、断面円形を呈する。470は瓦質の壺で、肩部に沈線２条が巡る。471は備前焼の摺鉢で、口縁部中位に凹線、体部内面に９条の条線が残る。472は土師質の耳皿で、色調は乳白色を呈する。

（ⅱ）第Ⅲ層出土遺物（473～479）

473・474は瓦質のこね鉢で、口縁部は内方に肥厚する。475・476は土師器土釜の脚部片で、断面円形となる。13～14世紀。477は土師器皿で、底部調整は不明である。478は竜泉窯系青磁碗で、体部外面に連弁文を施す。13世紀。479は備前焼の摺鉢で、体部内面に条線がわずかに残る。



第43図　SR1 出土遺物実測図(1)



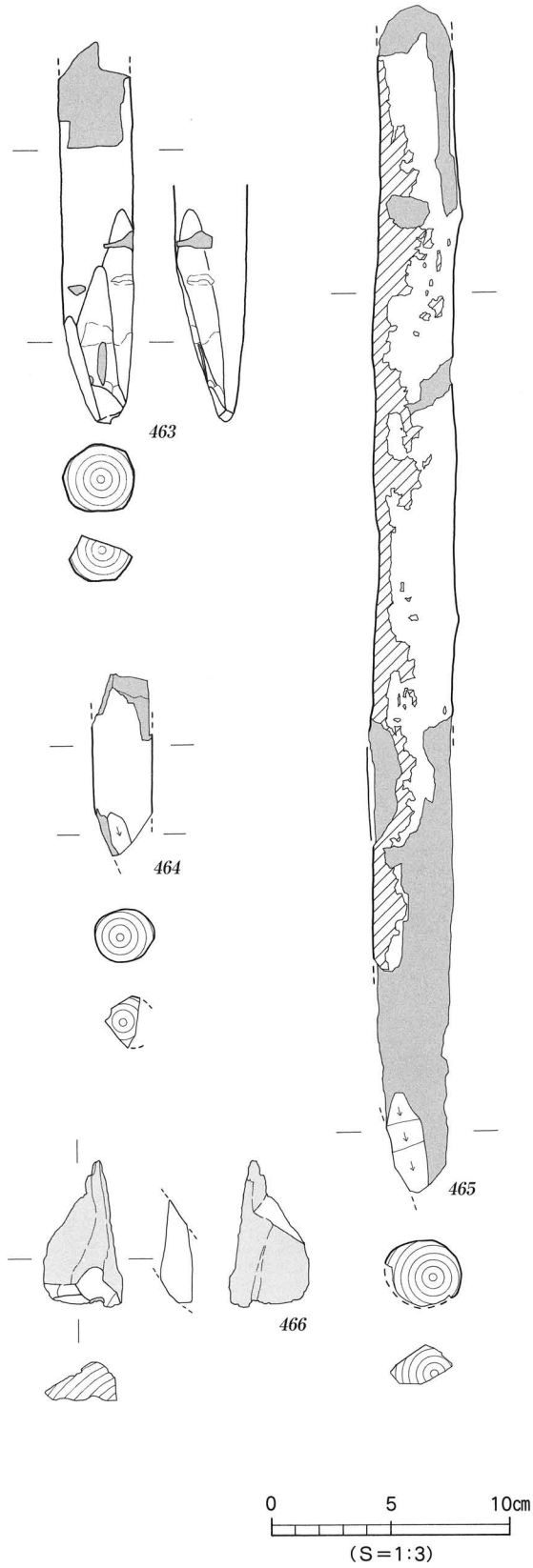
第44図　SR1 出土遺物実測図(2)

（ⅲ）第Ⅶ層出土遺物（480～490）

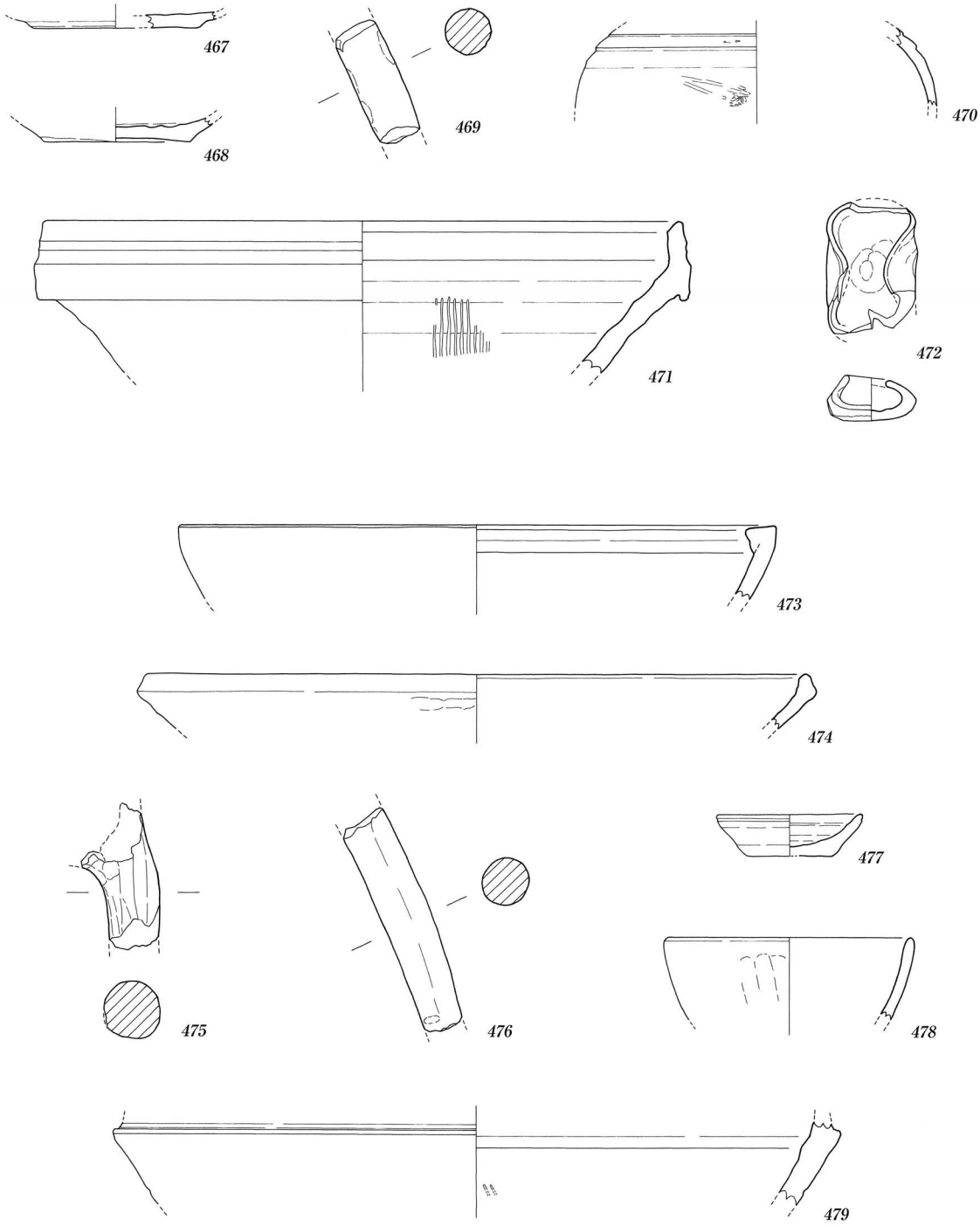
480・481は須恵器坏蓋で、480は天井部と口縁部の境界に不明瞭な稜をもつ。6世紀後半。481は扁平な天井部をもち、口縁部は下方に屈曲する。8世紀前半。482は瓶の頸部片で、波状文を施す。6世紀前半。483は提瓶の口縁部、484は甕の胴部片である。6世紀後半。485は壺の胴部片、486は底部で、485は胴部上位に櫛描き波状文を施す。弥生前期。487・488は縄文土器。487は縄文晩期の深鉢片、488は浅鉢片で、487は口縁部に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。489は石英粗面岩製の砥石で3面の研磨面をもつ。490は赤色珪質岩製の剥片である。

2）地点不明出土遺物（第48図、図版20）

491は土師器土釜の口縁部片である。15世紀。492は須恵器提瓶の口縁部、493は長頸壺の肩部片、494は高坏の脚部である。7世紀。495・496は備前焼の摺鉢で、口縁部に凹線状の凹みが巡る。16世紀。497～499は弥生土器の壺、500は甕である。弥生中期中葉～後半。501はサヌカイト製のスクレイパーである。502は青銅製の古銭で、銘は不明である。



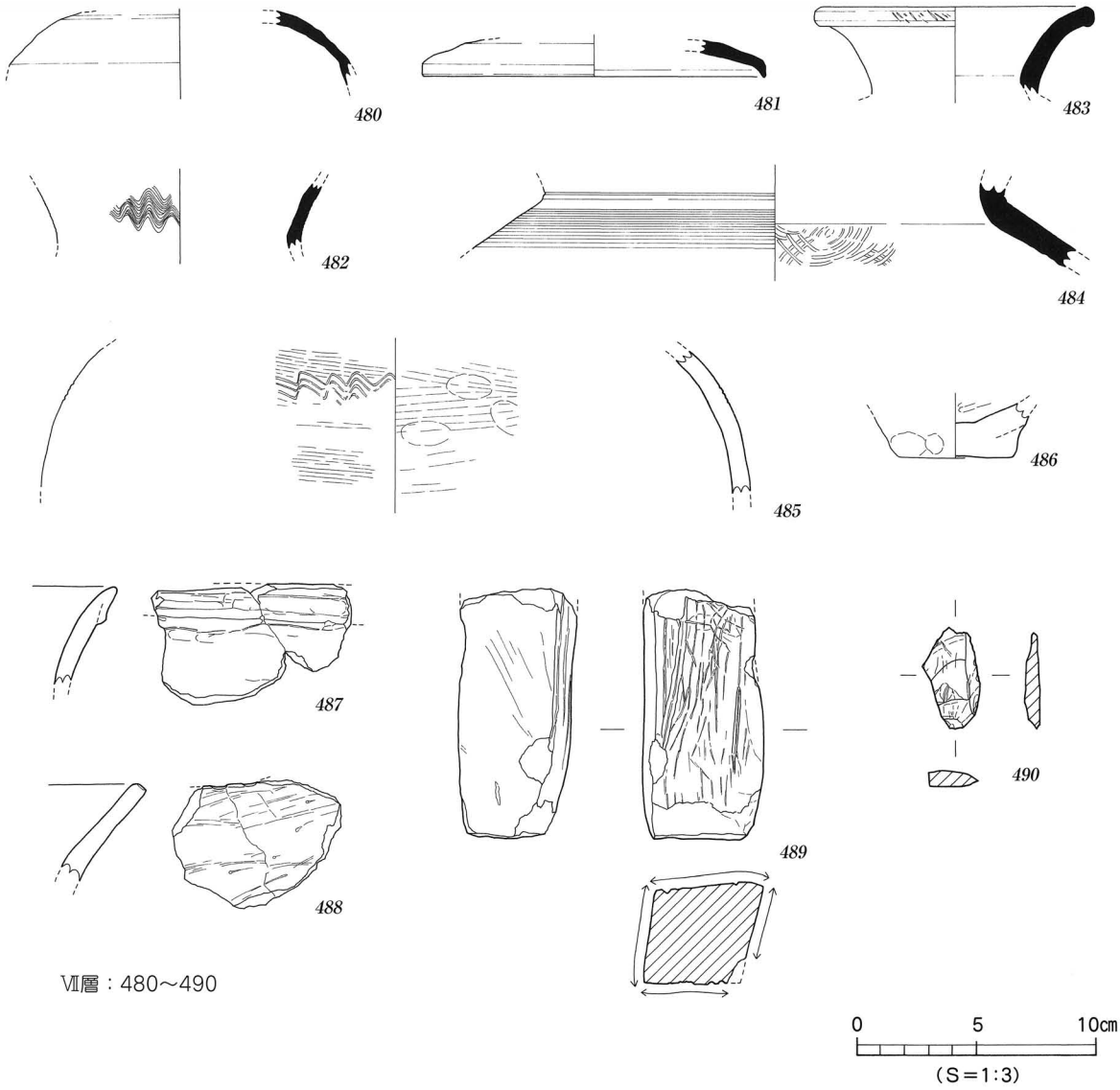
第45図　SR1 出土遺物実測図(3)



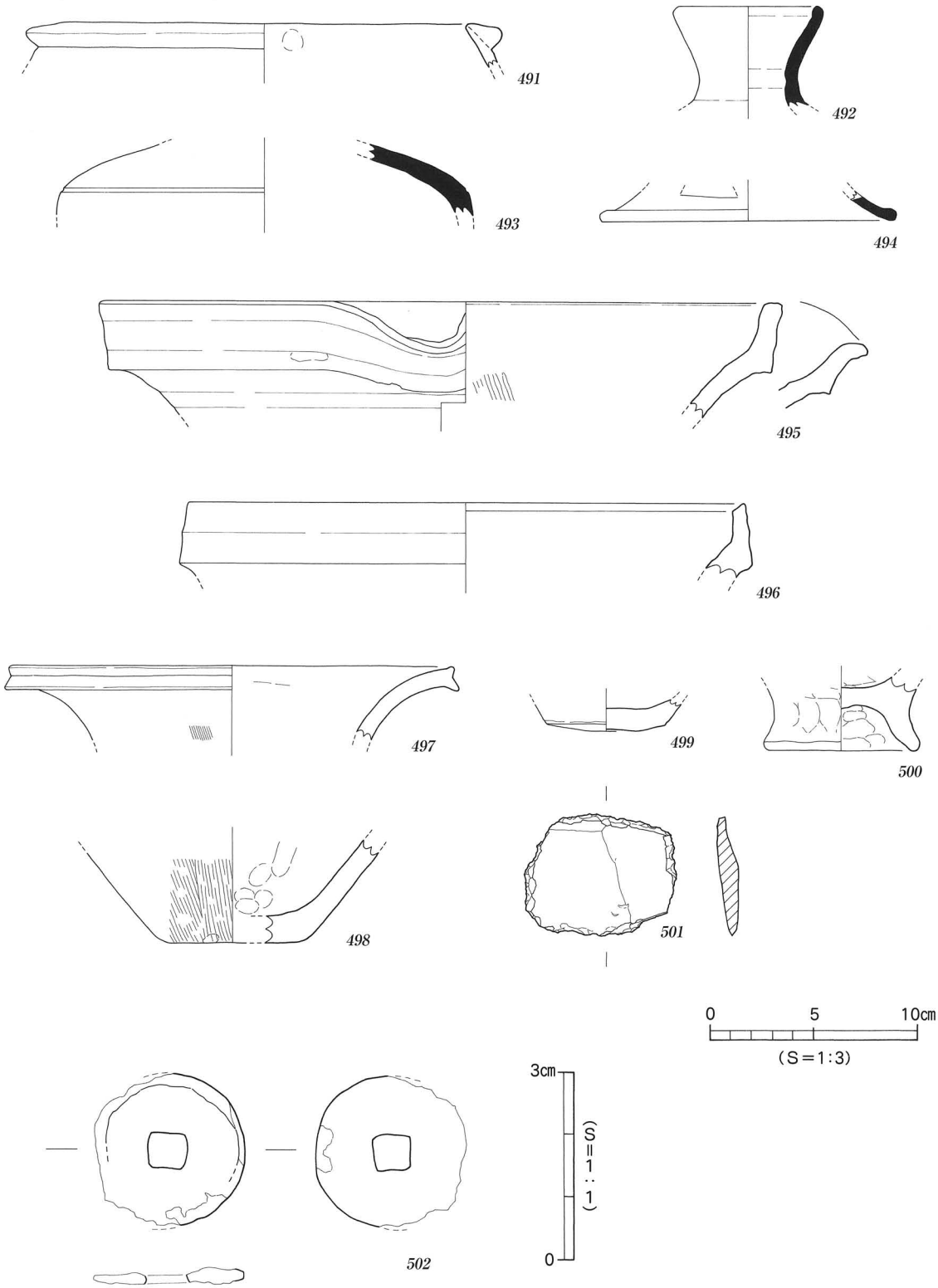
Ⅱ層：467～472
Ⅲ層：473～479

0　5　10cm
(S＝1:3)

第46図　包含層出土遺物実測図(1)



第47図　包含層出土遺物実測図(2)



第48図　地点不明出土遺物実測図

4．小　結

本調査では、縄文時代から近世までの遺構と遺物を確認した。検出した遺構は古墳時代と中世のもので、調査地に隣接する道後湯築城に関連する資料は残念ながら得ることができなかった。

（1）縄文～弥生時代

第Ⅵ層黒色砂質土中より、縄文時代晩期から弥生時代までの土器片が数点出土した。本稿で掲載した道後湯月町遺跡の調査においても、少量ではあるが該期の遺物が出土しており、本調査出土品は近隣の丘陵部から流入したものと推測される。

（2）古墳時代

古墳時代では、２A区と２B区において土坑と溝を検出した。両者共に出土した遺物は僅少ではあるが、検出層位等から概ね古墳時代後期、６世紀後半頃の遺構と考えられる。調査地周辺では、道後町遺跡Ⅱ（愛媛県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査）の調査において竪穴式住居址の検出例が報告されており、少なからず、調査地を含む近隣地域には古墳時代の集落が存在するものと考えられる。

（3）古　代

古代の遺構は未検出ではあるが、第Ⅵ層中より奈良時代に時期比定される遺物が出土した。前述の道後湯月町遺跡においても包含層資料ではあるが該期の遺物が出土しており、おそらくは本調査検出の第Ⅵ層と、道後湯月町遺跡検出の第Ⅵ層とは同時期の堆積層と考えられる。これらのことから、調査地周辺では広い範囲に、第Ⅵ層（黒色土）が堆積しているものと推測される。

（4）中　世

中世では、溝と自然流路を検出した。ＳＤ１は「Ｌ」字状に折れ曲がる部分をもつ溝であるが希少範囲の調査であるため、その全容は定かではない。また、ＳＤ２は南北方向に延びる溝であるが、全体の平面形状は判断できなかった。しかしながら、両者共に出土した遺物より13世紀代の遺構と考えられることから、性格は不明であるが、湯築城構築以前、鎌倉から室町期において調査地周辺に集落が存在したことを裏付ける資料である。一方、自然流路ＳＲ１は北東－南西方向に流れる流路で、溝と同様、全体像は不明であるが、おおよそ15世紀代に存在した流路と考えられる。

以上、簡単ではあるが調査のまとめをおこなった。道後地区、とりわけ道後温泉周辺の調査事例は少なく、集落様相は不明な点が多い地域であった。今回の調査において、古墳時代と鎌倉～室町期の遺構の検出は、今後、同地区の集落様相を考えるうえで貴重な資料となり、湯築城構築以前の道後地区の様相を知るうえでも好資料となる。

【参考文献】

三好　裕之他　2005　『道後町遺跡Ⅱ』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

表26　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
444	坏蓋	□径 (13.2) 残高　4.0	1／5の残存。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		

表27　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
445	坏身	□径 (12.4) 残高　3.5	1/5の残存。たちあがり端部は尖る。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
446	壺	残高　3.0	複合口縁壺。 口縁部外面に櫛描波状文あり。	マメツ ヨコナデ	ヨコナデ	淡乳褐色 乳灰色	石・長(1～3) ◎		

表28　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
447	擂鉢	残高　6.1	備前焼。 体部内面に8条以上の条線あり。	回転ナデ	回転ナデ	暗茶色 明橙色	密 ◎		

表29　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
448	土釜	□径 (20.1) 残高　2.7	□縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色 褐色	石・長(1～2) ◎	煤付着	
449	坏	□径 (11.7) 残高　3.1	□縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色 灰黄褐色	石・長(1～2)金 ◎		

表30　ＳＲ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
450	鍋か 土釜	残高　6.3	土鍋または土釜の脚部片。 脚部断面は楕円形。	ナデ	ヨコナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	煤付着	
451	坏	底径　(7.8) 残高　1.3	底部小片。	マメツ	ヨコナデ	灰褐色 乳灰褐色	密 ◎	煤？	
452	こね鉢	□径 (24.7) 残高　6.3	□縁部を上方に拡張。	(口端)ヨコナデ (胴)ナデ(マメツ)	(口端)ヨコナデ (胴)マメツ	橙黄色 橙黄色	石(1)・長(1～2) ◎		
453	こね鉢	□径 (32.2) 残高　8.0	□縁部をわずかに上方へ拡張。 □縁端面はナデ凹む。須恵質。	ナデ ヨコナデ	ナデ 板ナデ？	淡灰色 淡灰色	石・長(1～3) ◎		
454	擂鉢	□径 (30.0) 残高　3.1	備前焼。□縁部外面はナデ凹む。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰茶色	密 ◎		20
455	擂鉢	底径 (15.2) 残高　4.5	備前焼。 底胴部内面に4条以上の条線あり。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	密・金 ◎		
456	擂鉢	残高　6.1	備前焼。 胴部内面に10条の条線あり。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		20
457	擂鉢	底径 (12.8) 残高　4.1	備前焼。底部1／4の残存。	回転ヘラケズリ (底)ナデ	マメツ	暗青灰色 赤桃色	石・長(1～4) ◎		20
458	壺	□径 (11.6) 残高　4.6	備前焼。□縁部は珠玉状を呈する。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶褐色 橙色	密 ◎		20
459	甕	底径 (25.4) 残高　6.2	備前焼。小片。	ナデ 回転ナデ	回転ナデ	灰茶色 灰茶褐色	密 ◎		
460	甕	□径 (30.1) 残高　12.3	亀山焼。□縁端部はナデ凹み、胴部外面に0.6cm四方の格子目タタキを施す。	(頸)ハケ→ヨコナデ (胴)タタキ	ハケ(4本／cm)	黒色 黒色	石・長(1～2) ◎		20
461	碗	□径 (14.0) 残高　2.7	外反する□縁部。肥前系。	施釉	施釉	青白色 青白色	密 ◎		20
462	お猪□	□径　(4.0) 器高　1.7	体部に「清」「紅」の文字あり。 1／2の残存。清水焼。	施釉	施釉	白色 白色	密 ◎		20

表31　ＳＲ１出土遺物観察表　木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 その他	備考	図版
463	杭	——	——	10.7	2.9	2.8			21
464	杭	——	——	7.5	2.5	2.2			21
465	杭	約２／３	——	49.4	3.2	2.7			21
466	切りくず	——	——	6.1	3.2	1.4			

表32　包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
467	坏	底径 (7.4) 残高 0.7	底部片。	マメツ	マメツ(ナデ)	橙褐色 橙褐色	密 ◎	Ⅱ層	
468	坏	底径 (6.6) 残高 1.1	底部片。外面に回転糸切り痕を残す。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	Ⅱ層	
469	土釜	残高 5.6	土釜の脚部片。 断面形は円形を呈する。	ナデ	—	淡茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	Ⅱ層	
470	壺	残高 3.6	瓦質土器の肩部片。	ミガキ？	ナデ	黒色 黒色	密 ◎	Ⅱ層	
471	擂鉢	□径 (28.6) 残高 6.9	備前焼。□縁中位に凹線、体部内面に9条以上の条線あり。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	赤褐色 赤桃色	石・長(1) ◎	Ⅱ層	20
472	耳皿	底径 3.5 残高 2.1	□縁部を一部欠損。土師質。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	Ⅱ層	20
473	こね鉢	□径 (26.8) 残高 3.3	瓦質。□縁部を内方に肥厚。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 黒灰色	密 ◎	Ⅲ層	20
474	こね鉢	□径 (29.8) 残高 2.4	□縁部小片。瓦質。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰色 黒灰色	密 ◎	Ⅲ層 煤付着	
475	土釜	残高 6.6	脚部片。脚部断面形は円形を呈する。	ナデ	—	淡褐色	石・長(1～4)金 ◎	Ⅲ層	
476	土釜	残高 10.1	脚部。脚部断面形は円形を呈する。	ナデ	—	淡茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	Ⅲ層	
477	皿	□径 (6.6) 器高 2.9	2／3の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1～2) ◎	Ⅲ層	20
478	碗	□径 (11.0) 残高 3.7	青磁。釉調は透明で、胎土は灰白色を呈する。	施釉	施釉	緑色 緑色	密 ◎	Ⅲ層	
479	擂鉢	残高 3.8	備前焼。小片。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶色 黒茶色	密 ◎	Ⅲ層	
480	坏蓋	残高 3.1	小片。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	Ⅶ層	
481	坏蓋	□径 (14.1) 残高 1.5	□縁部は下外方に屈曲し、□縁端部は尖る。小片。	㊦回転ヘラケズリ ㊥回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	Ⅶ層	
482	甕	残高 2.7	頸部に波状文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	Ⅶ層	
483	提瓶	□径 (11.0) 残高 3.6	□縁部1／5の残存。	ナデ 回転ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	Ⅶ層	
484	甕	残高 3.4	肩部に回転カキメ調整を施す。小片。	ナデ カキメ	㊥回転ナデ→ナデ ㊦同心円文タタキ	灰色 灰色	密 ◎	Ⅶ層	
485	壺	残高 5.9	胴部片。櫛描波状文あり。	ハケ (4～5本／cm)	ハケ(4本／cm) →ナデ	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1～2) ◎	Ⅶ層	20
486	壺	底径 4.7 残高 2.2	わずかに上げ底。	ナデ	ミガキ状	黄茶褐色 乳黄色	石・長(1～2)金 ◎	Ⅶ層	
487	深鉢	残高 4.0	□縁下に貼付凸帯文あり。	マメツ	マメツ	黒色 黒色	石・長(1～3) ◎	Ⅶ層	20
488	浅鉢	残高 4.0	□縁端面に凹みあり。	板ナデ？	ミガキ	乳灰褐色 黒色	石・長(1～3) ◎	Ⅶ層	20

表33　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
489	砥石	ほぼ完形	石英粗面岩	10.3	5.0	4.3	314.8	Ⅶ層	20
490	剥片	ほぼ完形	赤色珪質岩	4.1	2.2	0.7	7.76	Ⅶ層	

表34　地点不明出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
491	土釜	□径 (19.6) 残高 1.8	□縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2)金 ◎		20
492	提瓶	□径 (6.6) 残高 4.8	□縁部1／4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
493	長頸壺	残高 3.3	肩部片。肩胴部境界に沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰緑色 灰色	密 ◎	自然釉	
494	高坏	底径 (14.0) 残高 1.4	脚部片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

地点不明出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
495	擂鉢	口径 (32.1) 残高 5.5	備前焼。 口縁部に凹線状の凹みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	暗赤褐色 暗灰色	石・長(1～2) ◎		20
496	擂鉢	口径 (26.4) 残高 3.5	備前焼。小片。	回転ナデ	回転ナデ	橙褐色 橙褐色	密 ◎	黒斑 煤	
497	壺	口径 (21.0) 残高 3.6	広口壺。口縁端面はナデ凹む。	ヨコナデ (一部ハケ)	ヨコナデ	淡乳褐色 淡乳褐色	密 ◎		20
498	壺	底径 (6.0) 残高 4.9	平底。	ハケ (底)ナデ	ナデアゲ(マメツ) ナデ	淡褐色 淡黒色	石・長(1～3) ◎		
499	壺	底径 5.7 残高 1.5	平底。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密・金 ◎		
500	甕	底径 (6.9) 残高 3.6	上げ底。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡灰色	石・長(1～3) ◎	黒斑	

表35　地点不明出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
501	スクレイパー	完形	サヌカイト	6.8	7.2	0.9	41.9	地点不明	20

表36　地点不明出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	法量 銭径(cm)	法量 孔寸(cm)	法量 外縁厚(cm)	法量 内側厚(cm)	法量 重さ(g)	初鋳年	備考	図版
502	不明	2.4	0.6	(0.2)	(0.1)	2.34	不明	地点不明	20

第４章　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．蛍光Ｘ線分析

１．はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

２．試料

試料は、道後湯月町遺跡では、調査区南壁から採取された４点および調査区西壁から採取された５点、道後湯之町遺跡では、1区西壁から採取された4点の計13点である。

３．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子㈱製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

１）試料を絶乾（105℃・24時間）

２）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕

３）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t／㎠でプレスして錠剤試料を作成

４）測定時間300秒、照射径20㎜、電圧30keV 、試料室内真空の条件で測定

Ｘ線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、Ｘ線検出器はSi（Li）半導体検出器である。定量分析は、Na、Mg、Al、Si、P、S、K、Ca、Ti、V、Mn、Feの12元素を対象とした。

４．分析結果

各元素の定量分析結果（wt％）を表37～39に示す。

５．考察

イオウ成分は、一般的な土壌にはほとんど含まれず、イオウ（SO_3）の含量は通常0.1％未満である。道後湯月町遺跡において、７世紀とされる西壁第Ⅵ層（試料７～９）および10～11世紀とされる池址１埋土（試料６）では、イオウ（SO_3）の含量が0.48～1.38％と比較的高い値であり、最下位の第Ⅵ層下部（試料９）で最も高くなっている。一方、道後湯之町遺跡では、いづれの土層中からもイオウは検出されなかった。

土壌中に含まれるイオウ成分の給源としては、土壌の母材の成分、化石燃料の燃焼に起因するイオウを含む酸性雨の影響、生活排水などの人為汚染の影響、および海水や温泉水に含まれる硫酸イオンの影響などが考えられる。

イオウ含量が多い池址１埋土は、有機物などをあまり含まない青灰色砂質土であり、生活排水などによる汚染の影響は考えにくい。また、同一の層準でイオウの含量に差異がみられることや、上位層でイオウが検出されないことから、土壌の母材の影響やイオウを含む酸性雨による影響は考えにくい。

海水や温泉水には硫酸イオンが含まれており、これに由来する黄鉄鋼（パイライト：FeS_2）の消長を検討することで、海成層の上限と下限の認定が試みられている（白神，1993，沢井ほか，1999）。今回の分析では、イオウ含量が高い層準でも海水域に生息する珪藻が検出されないことから（第４章Ⅱ）、

ここでは海水に由来するイオウ成分の影響は考えにくい。

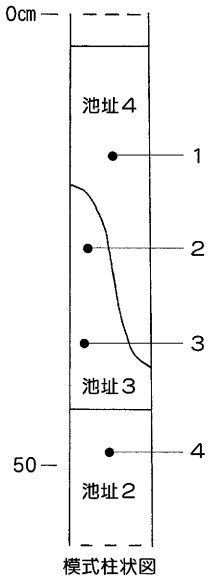
その他の元素では、リン酸やカルシウムに明瞭な特徴が認められた。未耕作地の土壌中におけるリン酸含量は一般に0.1～0.5%程度であるが、第Ⅵ層（試料７、９）では2.10～3.03%と高い値であり、池址１埋土（試料５、６）の0.96～1.19%よりも明らかに高くなっている。また、第Ⅵ層（試料９）ではカルシウム含量が2.41%と比較的高い値であり、池址１埋土（試料５、６）の0.86～0.91%よりも明らかに高くなっている。土壌中に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがあるが、第Ⅵ層は有機物を多く含む黒色粘質土であり、樹木片などの植物遺体も含まれることから、ここでは植物由来の成分の影響が大きいと考えられる。

以上のことから、７世紀とされる第Ⅵ層や平安時代とされる池址１埋土などに含まれるイオウ成分の給源については、何らかの温泉施設との関係が示唆されるが、現段階では泉源付近の試料について検討が行われていないことから確定的なことは言えない。

【文　献】

沢井祐紀・中村唯史・渡辺正巳・内田律雄（1999）出雲平野の地形発達史（1）－珪藻・イオウ分析による古環境復元．日本第四紀学会講演要旨集，29,p.118-119.

白神　　宏（1993）イオウ分析法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２ 研究対象別分析法」．東京大学出版会，p.119～124.



模式柱状図

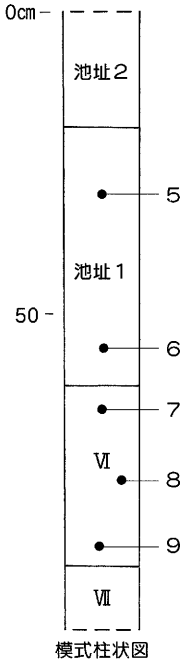
〔南壁〕

表37　道後湯月町遺跡における蛍光X線分析結果（1）

単位：wt（%）

地点・試料		南　壁			
原子No.	化学式	1	2	3	4
11	Na_2O	1.100	1.088	1.192	1.186
12	MgO	0.071	0.035	0.284	0.006
13	Al_2O_3	20.545	20.824	18.039	17.478
14	SiO_2	61.643	63.983	67.751	68.707
15	P_2O_5	1.802	1.241	1.139	1.184
16	SO_3	0.000	0.000	0.064	0.000
19	K_2O	3.710	4.151	3.598	3.830
20	CaO	1.686	1.603	1.873	1.951
22	TiO_2	0.998	1.001	0.837	0.791
23	V_2O_5	0.000	0.000	0.000	0.000
25	MnO	0.236	0.173	0.180	0.154
26	Fe_2O_3	8.210	5.902	5.044	4.714

表38　道後湯月町遺跡における蛍光X線分析結果（2）

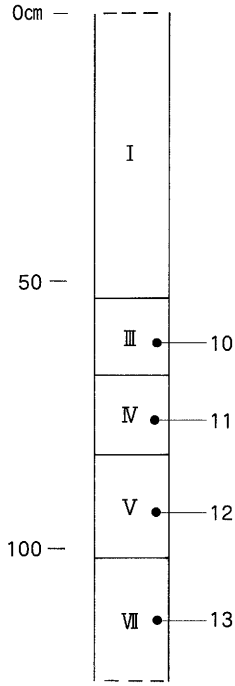


模式柱状図
〔西壁〕

単位：wt（%）

地点・試料		西　壁				
原子No.	化学式	5	6	7	8	9
11	Na_2O	0.743	0.764	0.812	1.035	1.019
12	MgO	0.000	0.000	0.058	0.000	0.195
13	Al_2O_3	24.426	23.949	24.761	23.143	21.274
14	SiO_2	60.974	60.901	53.660	60.176	57.949
15	P_2O_5	1.196	1.147	3.032	1.014	2.097
16	SO_3	0.037	0.480	0.566	0.350	1.379
19	K_2O	3.396	3.974	3.609	3.518	4.047
20	CaO	0.858	1.186	1.481	2.025	2.406
22	TiO_2	1.171	1.180	1.424	1.235	1.298
23	V_2O_5	0.011	0.010	0.033	0.022	0.027
25	MnO	0.141	0.138	0.234	0.166	0.201
26	Fe_2O_3	7.048	6.270	10.329	7.316	8.107

表39　道後湯之町遺跡における蛍光X線分析結果



模式柱状図
〔1区西壁〕

単位：wt（%）

地点・試料		1　区　西　壁			
原子No.	化学式	10	11	12	13
11	Na_2O	0.754	1.090	0.976	0.843
12	MgO	1.029	0.940	0.711	0.600
13	Al_2O_3	20.570	20.055	19.897	18.984
14	SiO_2	63.640	65.724	67.167	69.974
15	P_2O_5	1.136	1.036	0.946	1.092
16	SO_3	0.000	0.000	0.000	0.000
19	K_2O	4.147	3.989	4.172	3.803
20	CaO	1.063	1.385	1.235	1.227
22	TiO_2	1.077	0.960	0.974	0.822
23	V_2O_5	0.005	0.004	0.017	0.017
25	MnO	0.245	0.121	0.083	0.066
26	Fe_2O_3	6.248	4.599	3.737	2.505

Ⅱ．道後湯月町遺跡における珪藻分析

1．はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2．試料（表40）

試料は、調査区南壁から採取された１点、調査区西壁から採取された３点の計４点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1）試料から１cm^3を秤量

2）10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置

3）上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）

4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

5）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成

6）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4．結果

（1）分類群

試料から出現した珪藻は、中－真塩性種（汽－海水生種）２分類群、貧－中塩性種（淡－汽水生種）１分類群、貧塩性種（淡水生種）67分類群である。珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを表40に示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata、*Amphora montana*、*Cymbella silesiaca*、*Cymbella turgidula*、*Diploneis elliptica*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Meridion circulare v. constrictum*、*Navicula contenta*、*Navicula elginensis*、*Navicula kotschyi*、*Navicula mutica*、*Navicula spp.*、*Nitzschia palea*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia kuetzingii*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia spp.*、*Pinnularia subcapitata*

（2）珪藻の検出状況

1）調査区南壁

池址３埋土（試料１）では、淡水生種で陸生珪藻の占める割合がかなり高く、*Hantzschia amphioxys*を主に*Amphora montana*、*Pinnularia appendiculata*、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*などが伴われる。また、流水性種で中～下流水性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*、止水性種の*Pinnularia microstauron*、流水不定性種の*Navicula spp.*、*Nitzschia palea*などが低率で出現する。好アルカリ性種の珪藻が約８割を占める。

2）調査区西壁

第Ⅵ層下部（試料3、4）では、淡水生種で陸生珪藻の占める割合が高く、*Pinnularia appendiculata*、*Hantzschia amphioxys*を主に、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*などが伴われる。また、止水性種の*Pinnularia microstauron*、流水性種で中～下流水性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*も比較的多い。池址１埋土（試料２）では、陸生珪藻の占める割合がかなり高く、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*が増加し、*Pinnularia appendiculata*は減少している。流水性種や止水性種は低率である。好アルカリ性種の割合が上位に向かって増加し、試料２では約８割を占める。

５．珪藻分析から推定される堆積環境

７世紀とされる第Ⅵ層の堆積当時は、滞水域（流水域、止水域）および湿潤な陸域などが存在する多様な環境、もしくはこれらを繰り返す不安定な環境であったと考えられる。10～11世紀とされる池址１埋土の堆積当時は、おおむね陸生珪藻が生育するような湿潤な陸域の環境であったと考えられ、常時滞水するような状況ではなく、時期や季節によって一定期間滞水するような状況であったと推定される。15世紀とされる池址３埋土の堆積当時も、おおむね同様の状況であったと考えられる。

第Ⅵ層では好酸性種群が優勢であるが、池址１および池址３の埋土では好アルカリ性種群が優勢となっており、酸性からアルカリ性への水質環境の変化が認められる。

【文　献】

Hustedt,F.（1937-1938）Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.

Patrick, R.eimer, C. W.（1966） The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W.（1975） The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（2） Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27,p.1-20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42,p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６，p.23-45.

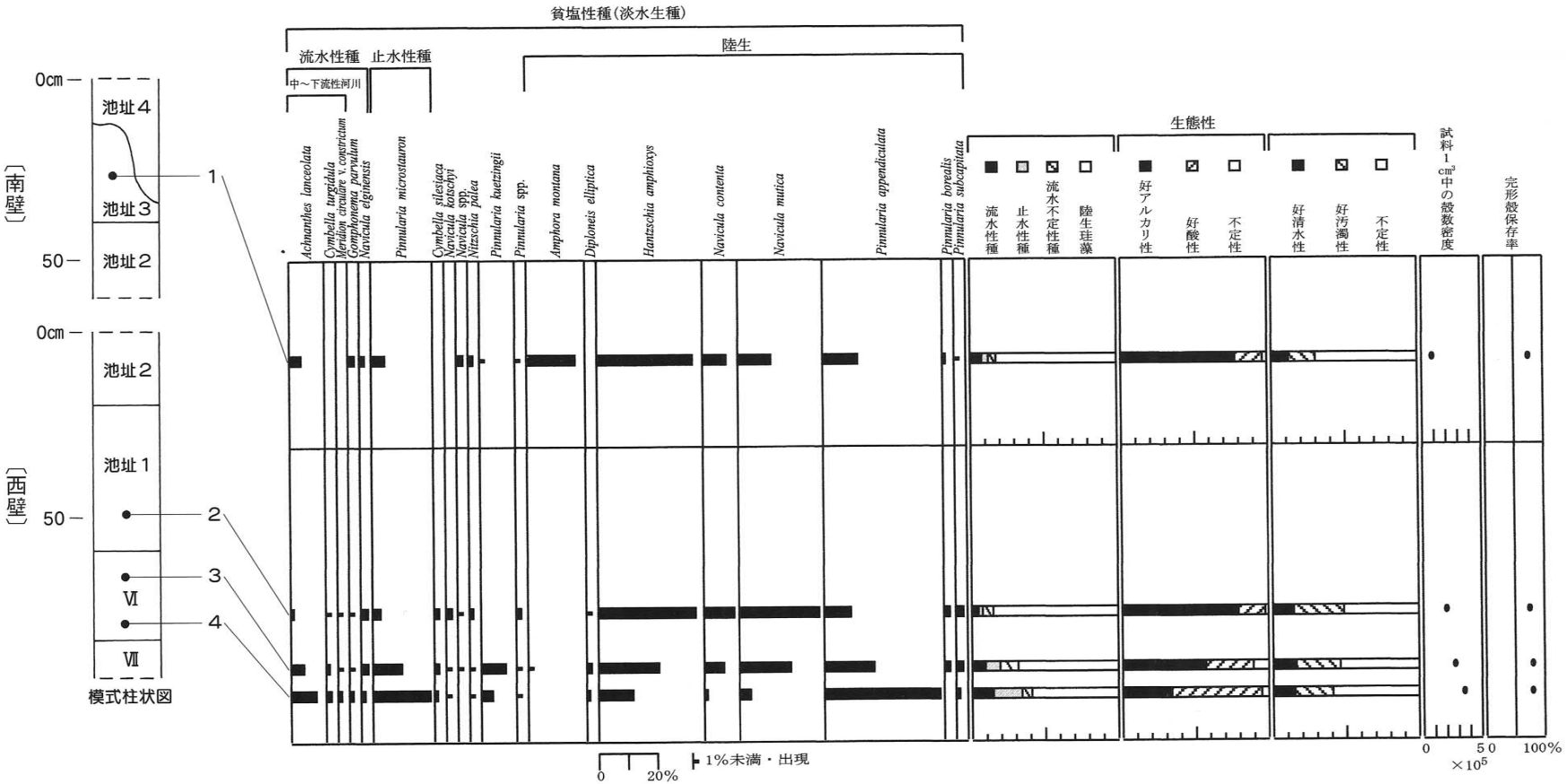


表40　道後湯月町遺跡における主要珪藻ダイアグラム

Ⅲ．道後湯月町遺跡における寄生虫卵分析

１．はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いて、トイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

２．試料

試料は、調査区南壁から採取された１点（表40、試料１）、西壁から採取された３点（表40、試料２・３・４）及びSK１（埋甕内）から採取された１点、の計５点である。

３．方法

寄生虫卵の分離抽出は、微化石分析法を基本にして、以下の手順で行った。

１）サンプルを採量

２）脱イオン水を加えて撹拌

３）篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去

４）25%フッ化水素酸を加えて30分静置（２～３度混和）

５）遠心分離（1500rpm、２分間）による水洗の後にサンプルを２分割

６）片方にアセトリシス処理を施す

７）両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

８）検鏡・計数

４．結果

（１）分類群

分析の結果、５分類群の寄生虫卵が検出された。なお、明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。分析結果を表41に示す。

（２）寄生虫卵群集の特徴

１）調査区南壁

池址３埋土（試料１）では、カピラリアが少量検出された。

２）調査区西壁

第Ⅵ層上部（試料３）では、カピラリア、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫が検出された。また、第Ⅵ層下部（試料４）ではカピラリア、池址１埋土（試料２）ではカピラリアと鞭虫卵が少量検出された。

３）ＳＫ１（埋甕内）（試料５）

回虫卵、不明虫卵が少量検出された。

５．考察

（１）調査区南壁・西壁

７世紀とされる第Ⅵ層（黒色粘質土）では、カピラリア、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫の寄生虫卵が検出され、その他の層でもカピラリアなどが少量検出された。このことから、集落周辺における汚染や、動物生息の影響などが示唆される。

カピラリアは、ネズミ類や鶏、羊の肝臓や小腸に寄生する毛体虫で、ヒトにも侵入して肝臓、腸、

気道に寄生する。中間宿主が不要な種があり、コイなどの淡水魚が中間宿主となるものもある。ヒトには、成熟卵が混入した飲食物（淡水魚、鶏、羊の生食や不完全な調理）や不潔な手指を介して経口感染する。

鞭虫は、中間宿主を必要としない種類であり、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫に起因する鞭虫症は、腹痛を主とする消化器病症がおこり、多数寄生の場合は症状が重い。

マンソン裂頭条虫は、イヌ、ネコに普通にみられる条虫で、イヌ科、ネコ科の諸動物が終宿主となり、第１中間宿主はケンミジンコ属９種で、第２中間および待機宿主はヒトならびに終宿主と魚類を除いた脊椎動物全般にわたる。ヒトには、生水を飲んだり、広範に分布している第２中間および待機宿主を生食したり、加熱不充分な状態で摂取することによって感染するが、ヒトは終宿主ではないため幼虫の形で寄生している。

（２）ＳＫ１（埋甕内）

18世紀とされる埋甕内の埋土では、少量ながら回虫卵や不明虫卵が検出されることから、トイレ遺構の可能性が示唆される。回虫は鞭虫と同様に中間宿主を必要としない種類であり、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫卵の密度が低い原因としては、小便器として利用されていたこと、糞便のくみ出しや清掃が行われていたことなどが想定される。今後、甕に付着した尿石様の結晶について観察を行うなど、さらに詳細な検討が必要と考えられる。

【文　献】

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.
金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p.9-55.
金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p.151-158.

表41　道後湯月町遺跡における寄生虫卵分析結果

分類群		南　壁	西　壁			埋甕内
学名	和名	1	2	3	4	5
Helminth eggs	寄生虫卵					
Ascaris	回虫卵					1
Trichuris	鞭虫卵		1	3		
Capillaria	カピラリア	1	2	8	1	
Diphyllobothoyium mansoni	マンソン裂頭条虫卵			3		
Unknown eggs	不明虫卵					1
Total	計	1	3	14	1	2
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	1.0 ×10	2.7 ×10	2.4 ×10^2	1.0 ×10	1.8 ×10
	明らかな消化残渣	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)
Pollen frequencies 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	3.5 ×10^2	5.9 ×10^4	1.2 ×10^5	1.1 ×10^5	1.3 ×10^3

第５章　調査の成果と課題

本書では、道後温泉本館周辺の道路整備事業に伴い実施した2遺跡の発掘調査報告をおこなった。調査の結果、主に古墳時代から近世までの遺構や遺物を確認することができた。
ここでは、遺跡別にまとめをおこなう。

１．道後湯月町遺跡

調査地は、道後温泉本館東側に隣接した場所に位置する。調査では、縄文時代から近世までの遺構・遺物を検出した。検出した遺構は、池状遺構（池址）と土坑である。池址は４基を検出したが、稀少範囲の調査であるため平面形状や規模は定かではない。しかしながら、調査壁の土層観察により石積みによる池垣を伴った遺構であることが判明した。出土した遺物より、最も古い時期の池址１は平安時代中期から後期頃のもので、池址内からは土器のほか、池垣に使用したと思われる直径10～20㎝大の礫が散在して出土した。池址１は岩盤層を掘りくぼめ、掘り方から内側約１ｍの地点に石を積んで池垣とし、池垣と掘り方の間には裏込めと思われる土を流入することにより構築されている。なお、池底は第Ⅵ層黒色粘質土に及んでいるが、池底には何かを敷き詰めたような痕跡は見られなかった。調査では池址の北東部の一部が検出されたが、検出状況から平面形状は円形もしくは楕円形を呈するものと推測される。池址１は埋め戻され、池址２が造られることになる。池址全面であるかは判断できないが、厚さ10㎝程度の黄色土が池址上面を覆う。池址１の外周よりやや内側に、池址２の掘り方を検出した。池址２の構築方法は池址１と同様、石積みによる池垣を伴ったものである。池址２の形状も検出状況から、池址１と同様、円形または楕円形を呈するものと推測される。池址内からは主に鎌倉時代、12世紀から13世紀代の土器が大量に出土した。完形品は少なく、いずれも破片や破損品ばかりであった。なお、池址２の埋土は径３～５㎝大の礫を含む砂であり、池址２は洪水等の自然災害により埋没した可能性がある。池址２は池址１と同様、黄灰色土の使用により埋め戻され、その後に池址３が池址２とほぼ同じ位置に造られている。池址３内からは主に室町時代、13世紀から14世紀代の土師器や陶磁器が多数出土した。特に、土師器には完存品や完形品に近いものが多く含まれており、さらには、これらの土器が集中して出土する箇所が数カ所あることから、池址に伴う何らかの祭祀がおこなわれた可能性が考えられる。なお、池址３は第Ⅴ層で覆われており、埋没時期は不明である。

池址４は道後温泉本館寄りで検出したもので、径10～20㎝大の石を７～９段程度積んだ状態で発見された。調査壁の土層観察により、池址１や２と同様、池址4は裏込め土の使用により石積みの池垣に囲まれたものである。池址４は池垣の一部のみの検出であるが、池址を覆う土が近現代のものであることや、文献資料から「かみよの御いけ」の可能性がある。「かみよの御いけ」とは、現在の道後温泉本館の前身である新湯が明治11年に新築工事をおこなった際に、池の一部を埋め戻して建物が造られたという記述が残されている。また、『伊予道後温泉略案内』にも同池が描かれており、その位置や調査における検出状況から、おそらく、池址４は、「かみよの御いけ」が埋め戻された際に残った部分ではないかと推測される。

2．道後湯之町遺跡

調査地は、湯築城跡公園北側に位置する。調査では、古墳時代から中世までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は土坑、溝、自然流路である。最も古い時期の遺構は土坑である。出土遺物より、土坑は6世紀後半の遺構と考えられる。その後、中世になり溝と自然流路が検出された。2条の溝は南北方向に掘削されており、そのうちSD1は途中「L」字状に折れ曲がっている。溝内からの遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね13世紀代の遺構と推測される。このほか、調査地北側には北東－南西方向の自然流路があり、流路内からは室町時代後期の土器や陶磁器が少量出土している。

今回の調査では、湯築城関連の資料は得られなかったが、古墳時代における集落関連遺構の検出や、中世段階の溝や流路の検出は、湯築城築城以前の道後地区の集落様相及び古地形を解明するうえで貴重な資料となるものである。

3．まとめ

今回の報告では、特に道後湯月町遺跡から重要かつ貴重な資料を得ることができた。本稿では、検出した池址は池状遺構として説明したが、これは江戸時代の文献に道後温泉東側の地点に池と記載された絵が残されていたことから、池址と考えたものである。池址の埋土を採取し分析をおこなった結果、池址1や池址3の埋土中からイオウ成分（SO_3）が検出された。一般に、土壌中からイオウ成分が検出されることはなく、これらのイオウ成分は温泉に起因する可能性が高いと考えられる。そうすると、池址自体が温泉そのものであるか、または温泉に関連する施設である可能性も考えられる。しかしながら、現在の道後温泉は周辺からパイプを通して源泉が送られており、イオウ成分が周辺にしみ出している可能性も否めない。本館周辺の土壌を細かく採取し、分析したうえでイオウ成分がまったく検出されないという結果が得られたならば、本稿検出の池址が温泉施設として理解することは可能であろう。今後、開発等による調査機会が得られたならば、この課題は解決されるものと考えている。

道後温泉に関する資料については、江戸時代以前のものは少なく、当時の状況は不明な点が多い。道後湯月町遺跡における池址の発見は、道後温泉の歴史を研究するうえで貴重な資料であり、今後の研究の一助となることを期待する。

【文　献】

松山市　1993　『道後温泉本館百周年記念　道後温泉本館の歴史』

写　真　図　版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜　他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜　他
	ニコンニューFM 2		ズームニッコール28～85㎜　他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　RAPF		

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材:

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240㎜F5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材:

引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ　RCペーパー

4．製　版　　写真図版175線

印　刷　　オフセット印刷

用　紙　　マットコート　76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～17　　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

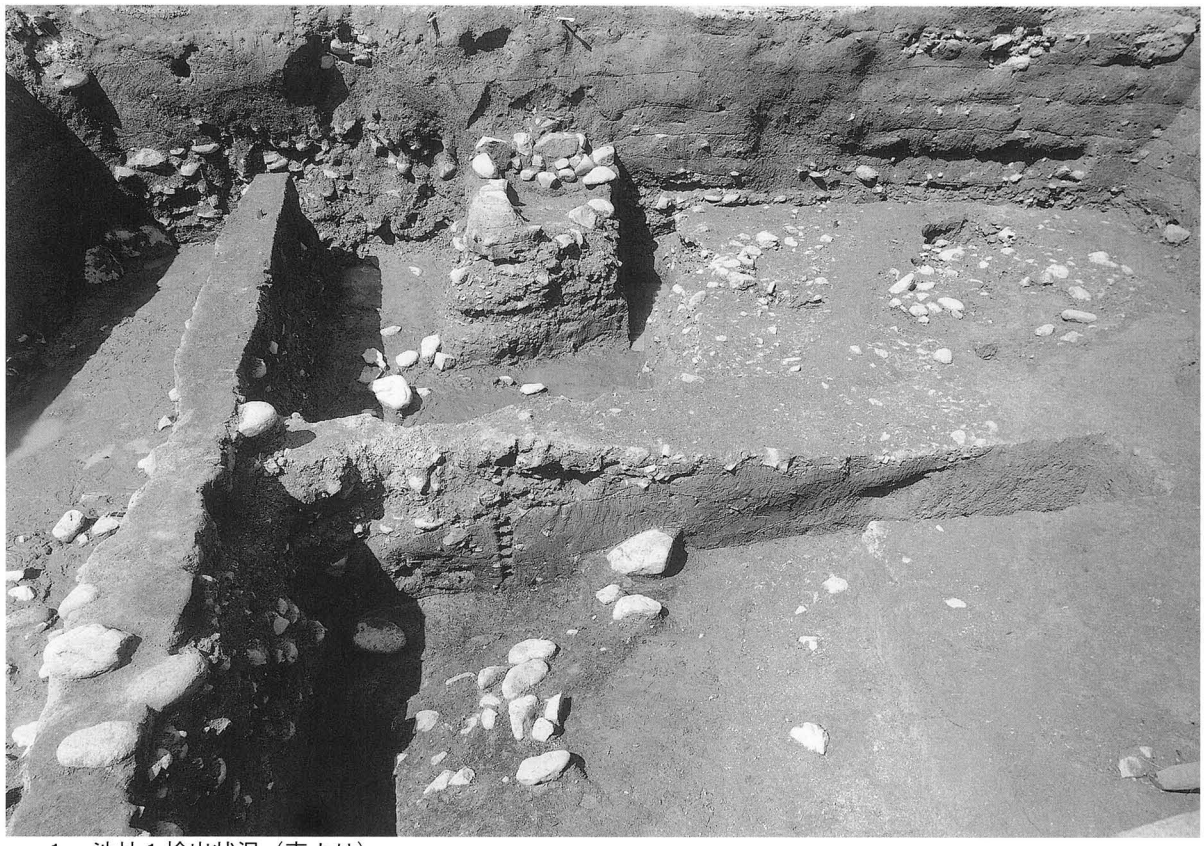
1　調査前遠景（南東より）

2　調査後近景（南東より）

図版2

1　東壁土層（西より）

2　完掘状況（南東より）



1　池址１検出状況（東より）

2　池址２検出状況（南東より）

図版4

1　池址３遺物出土状況①（北東より）

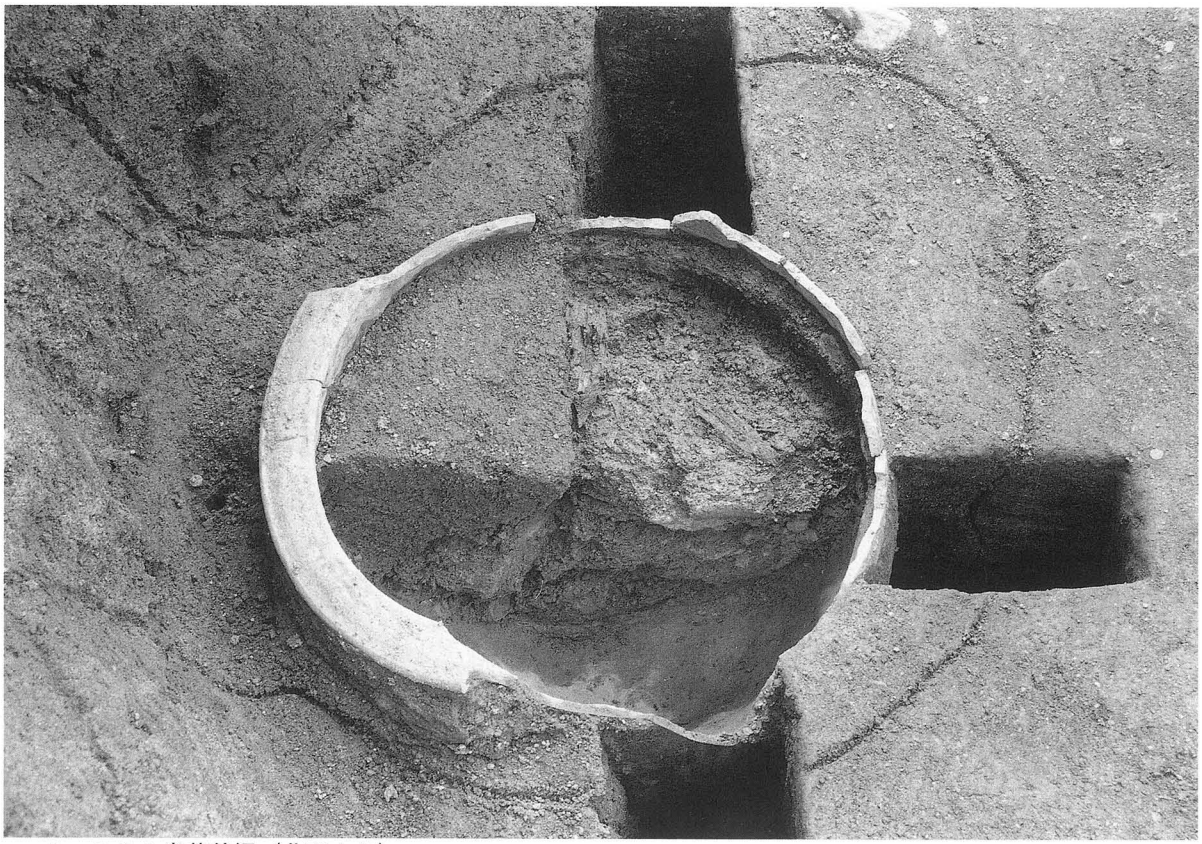
2　池址３遺物出土状況②（北より）

1　池址３検出状況（南東より）

2　池址４検出状況（東より）

図版6

1　ＳＫ１検出状況（西より）

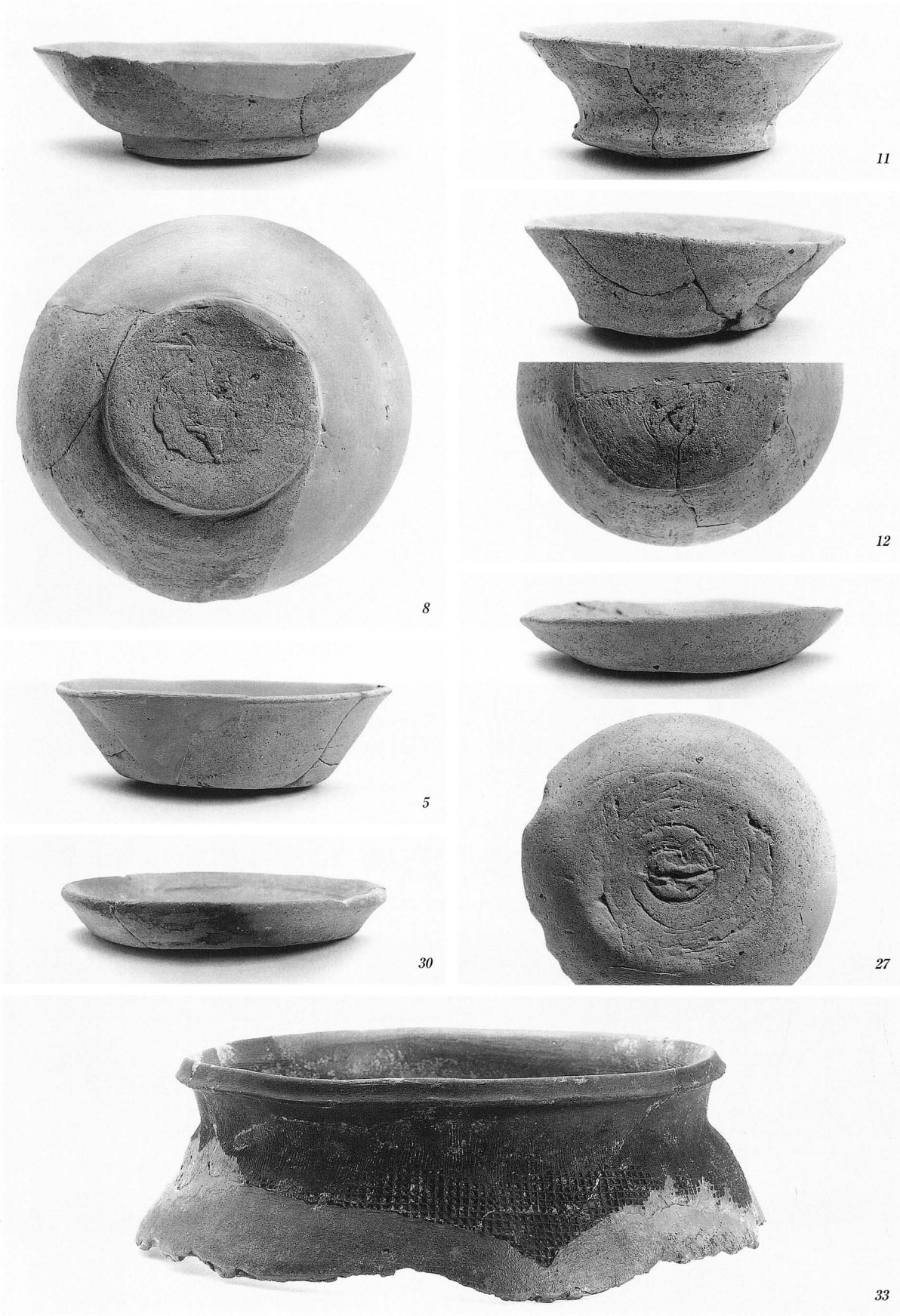


2　ＳＫ１半截状況（北西より）

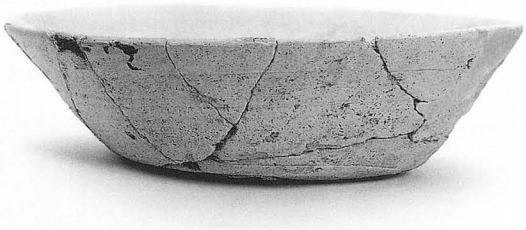
1　第Ⅵ層遺物出土状況（南より）

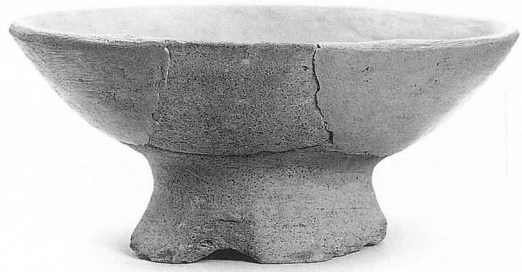
2　現地説明会風景（南西より）

図版8



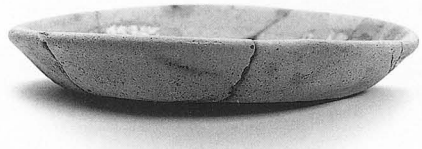
1　池址1出土遺物



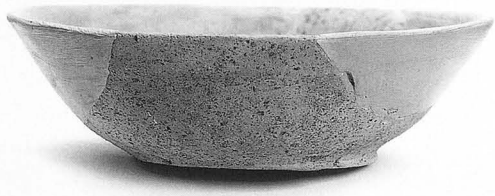


97

62



102



64

109

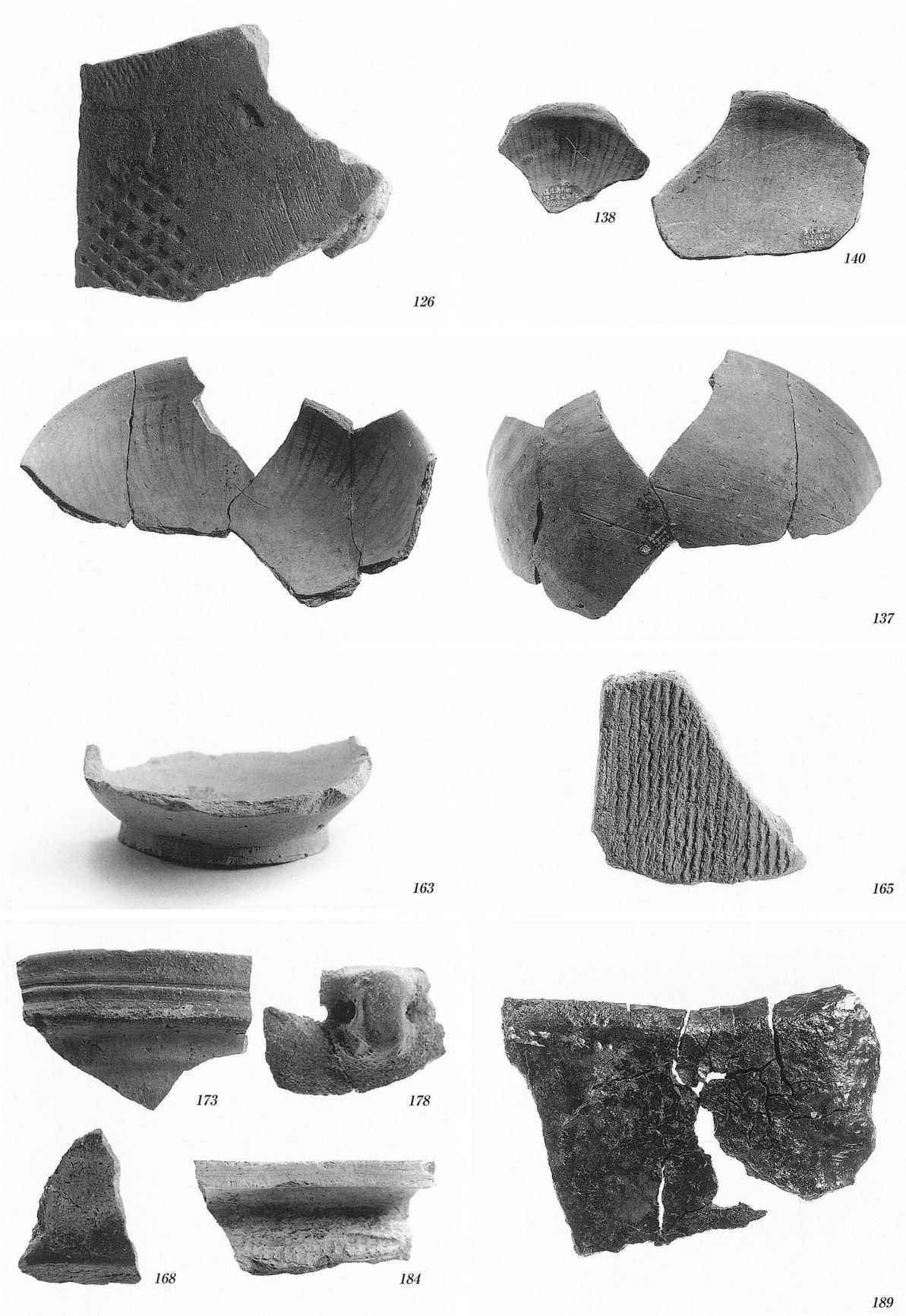
73

75

119

1　池址２出土遺物（１）

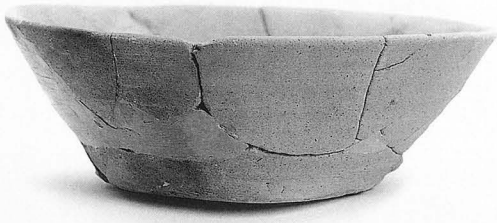
図版10

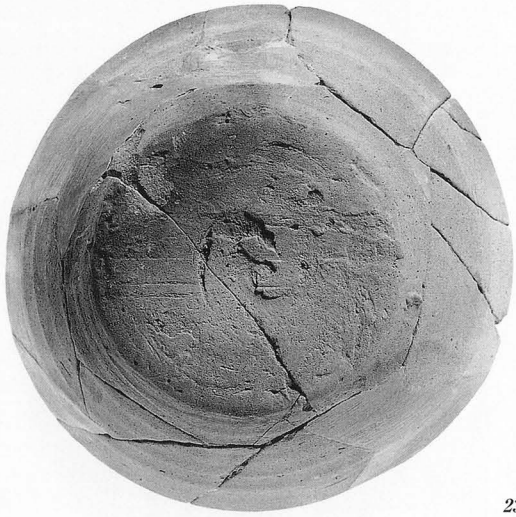


1　池址2(2)(126・137・138・140・163・165)　池址3(1)(168・173・178・184・189)出土遺物

193

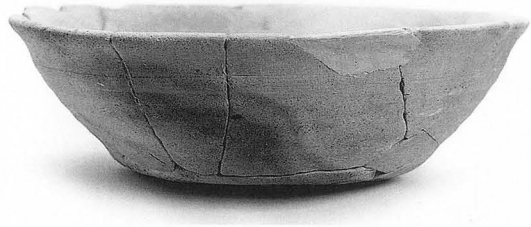
223





239

222



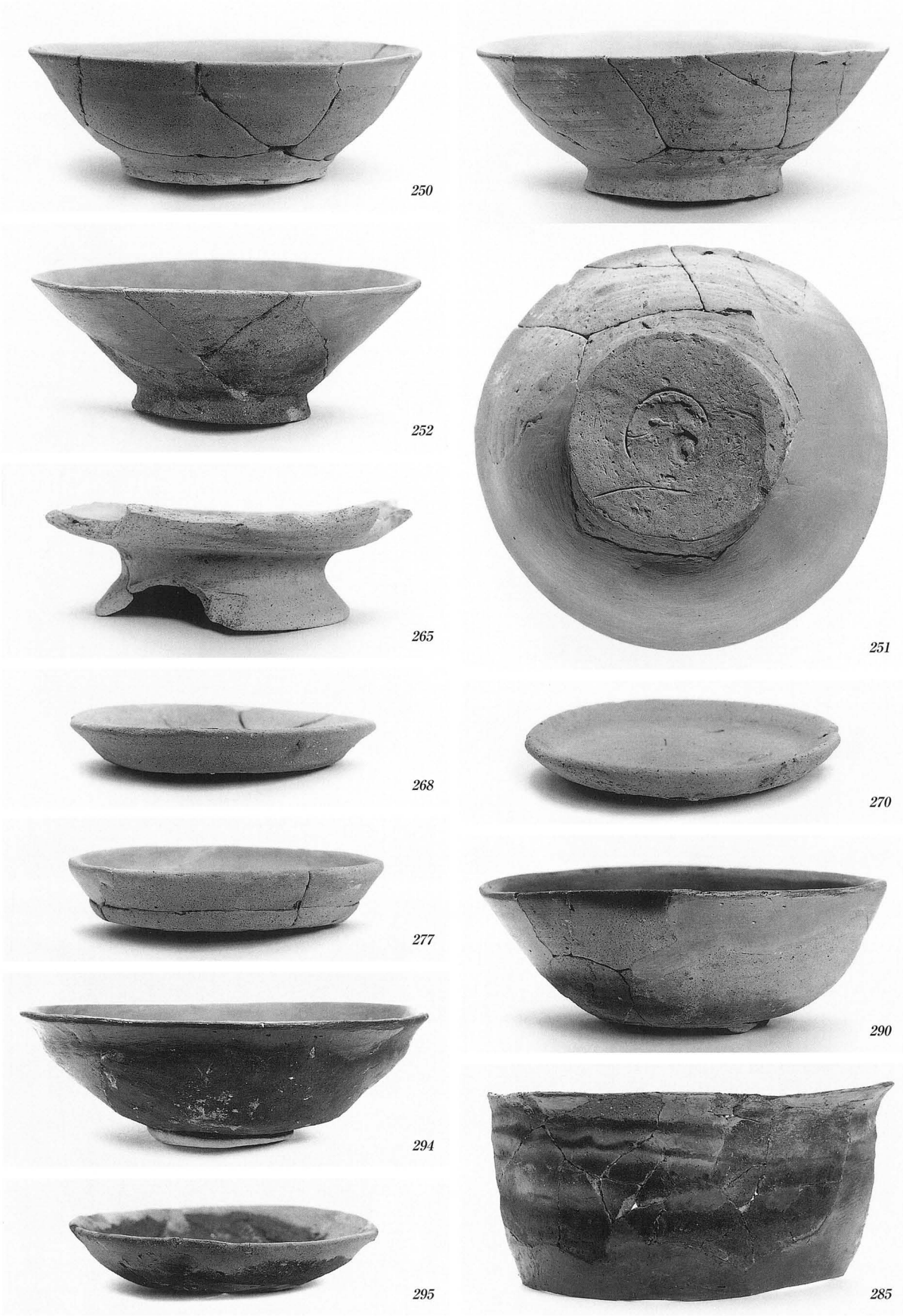
231

235

240

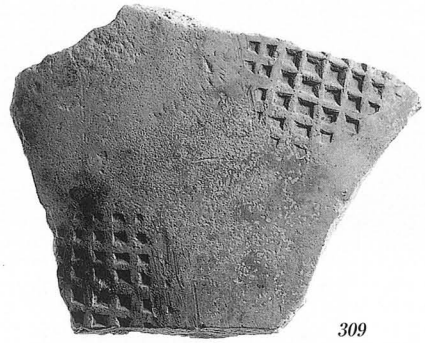
1　池址３出土遺物（２）

図版12

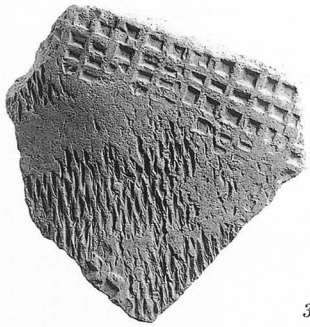


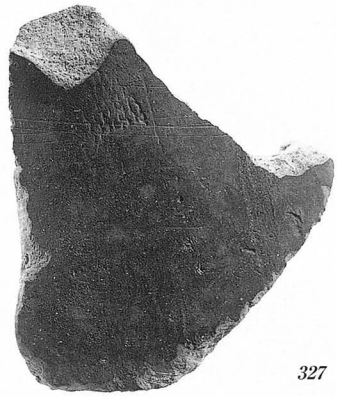
1　池址３出土遺物（３）

297


309

329


308


327

330

328

317

331

331

1　池址３（４）（297・308・309・317・327～330）　ＳＫ１（331）出土遺物

図版14

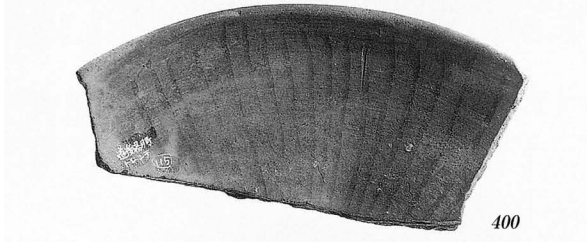
349

350

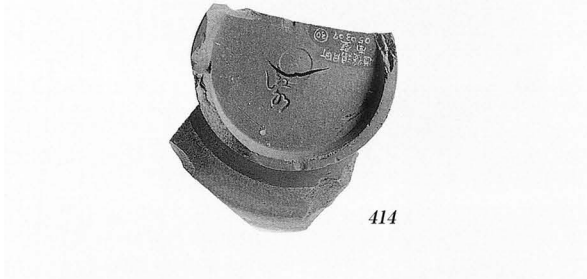
357

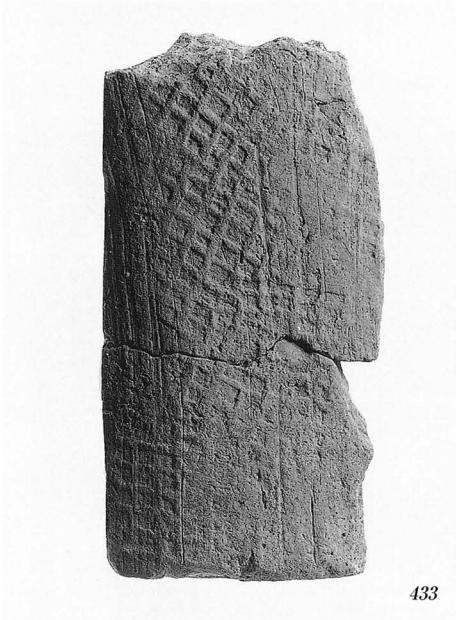
372

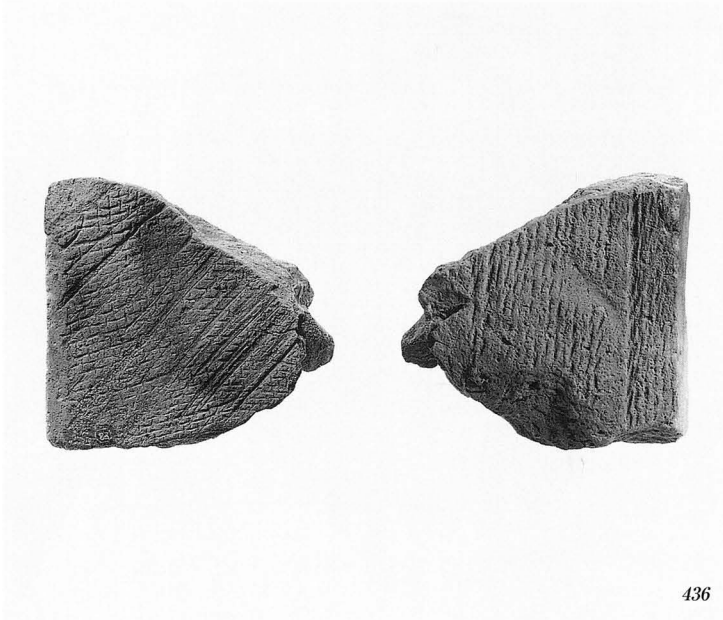
381


400

418


414


433


436

1　トレンチ出土遺物

1　調査前全景（南西より）

2　2区・3区検出状況（西より）

図版16

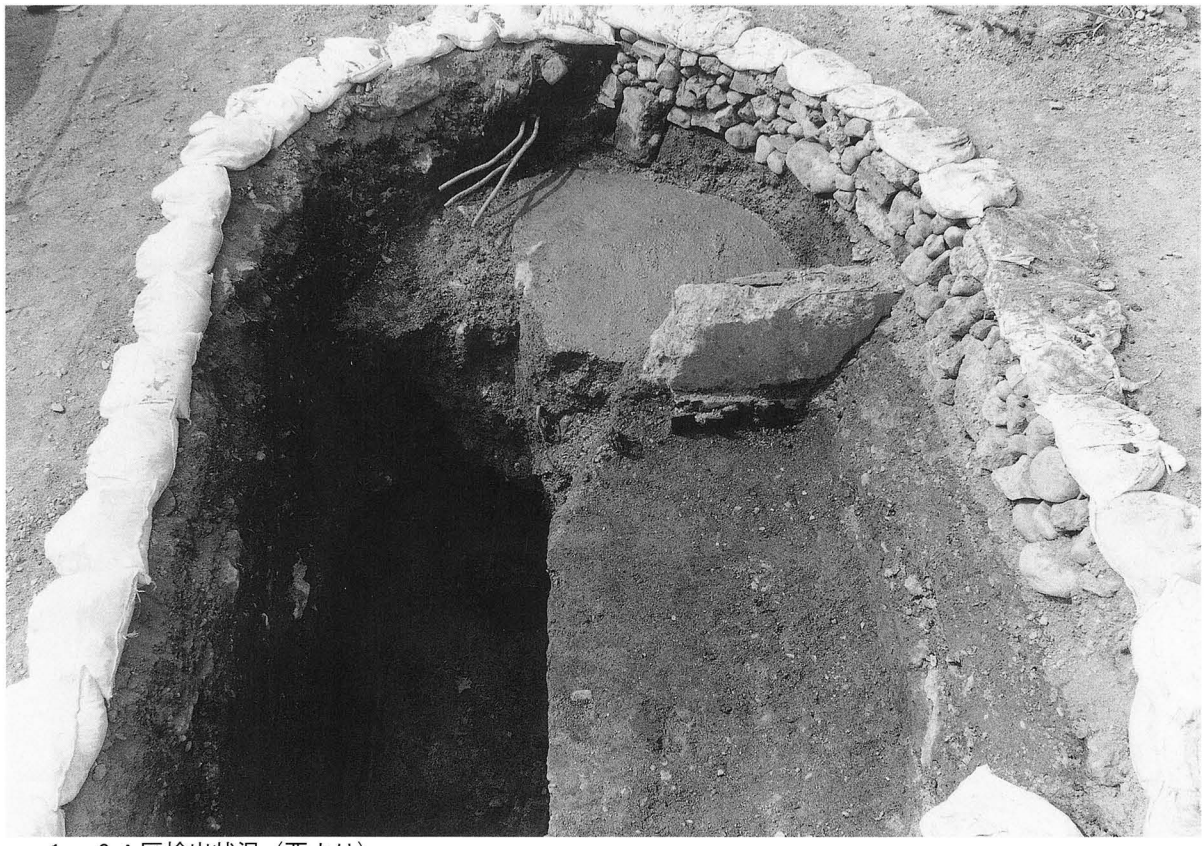
1　１区検出状況（北西より）

2　１区西壁土層（南東より）

1　２Ｂ区完掘状況（南東より）

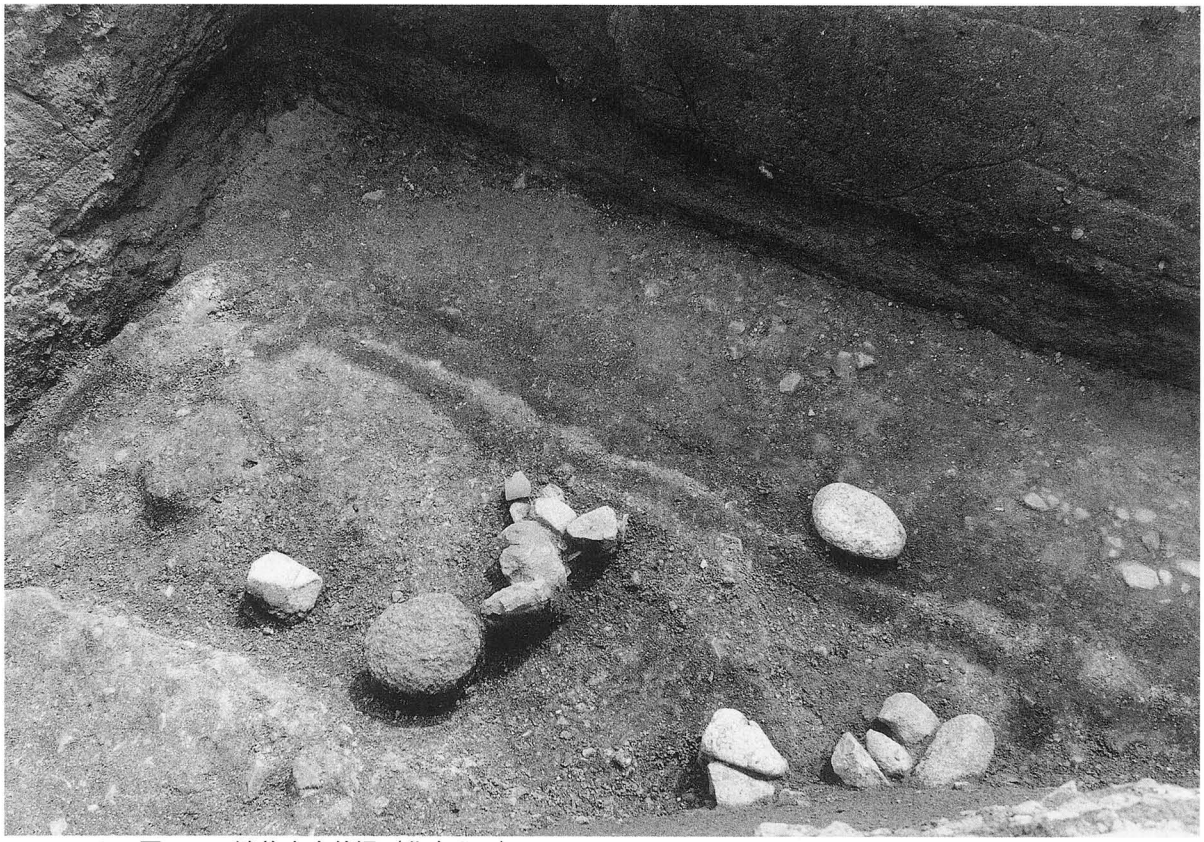
2　２Ｂ区西壁土層（東より）

図版18



1　２Ａ区検出状況（西より）

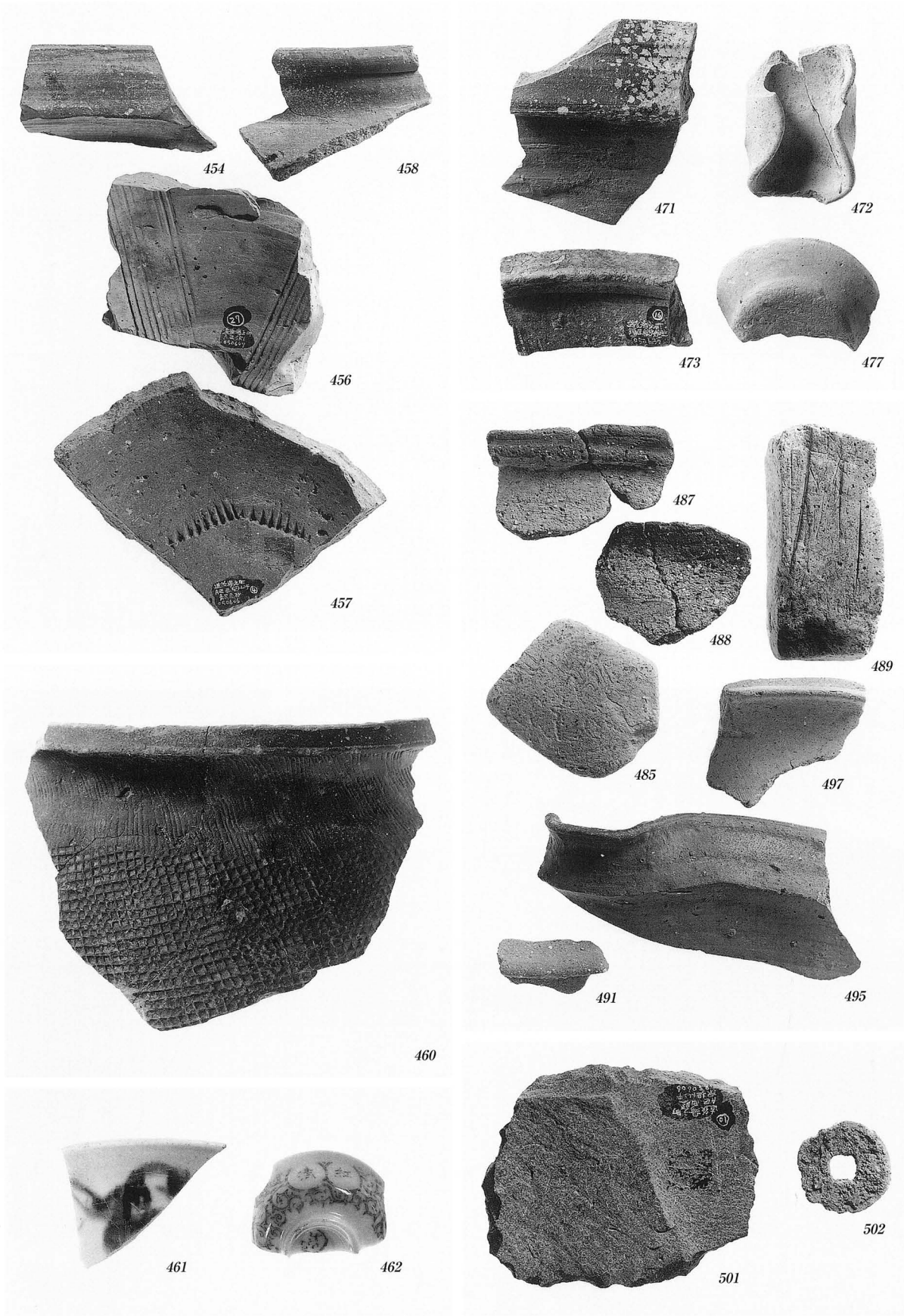
2　３Ｂ区完掘状況（北より）



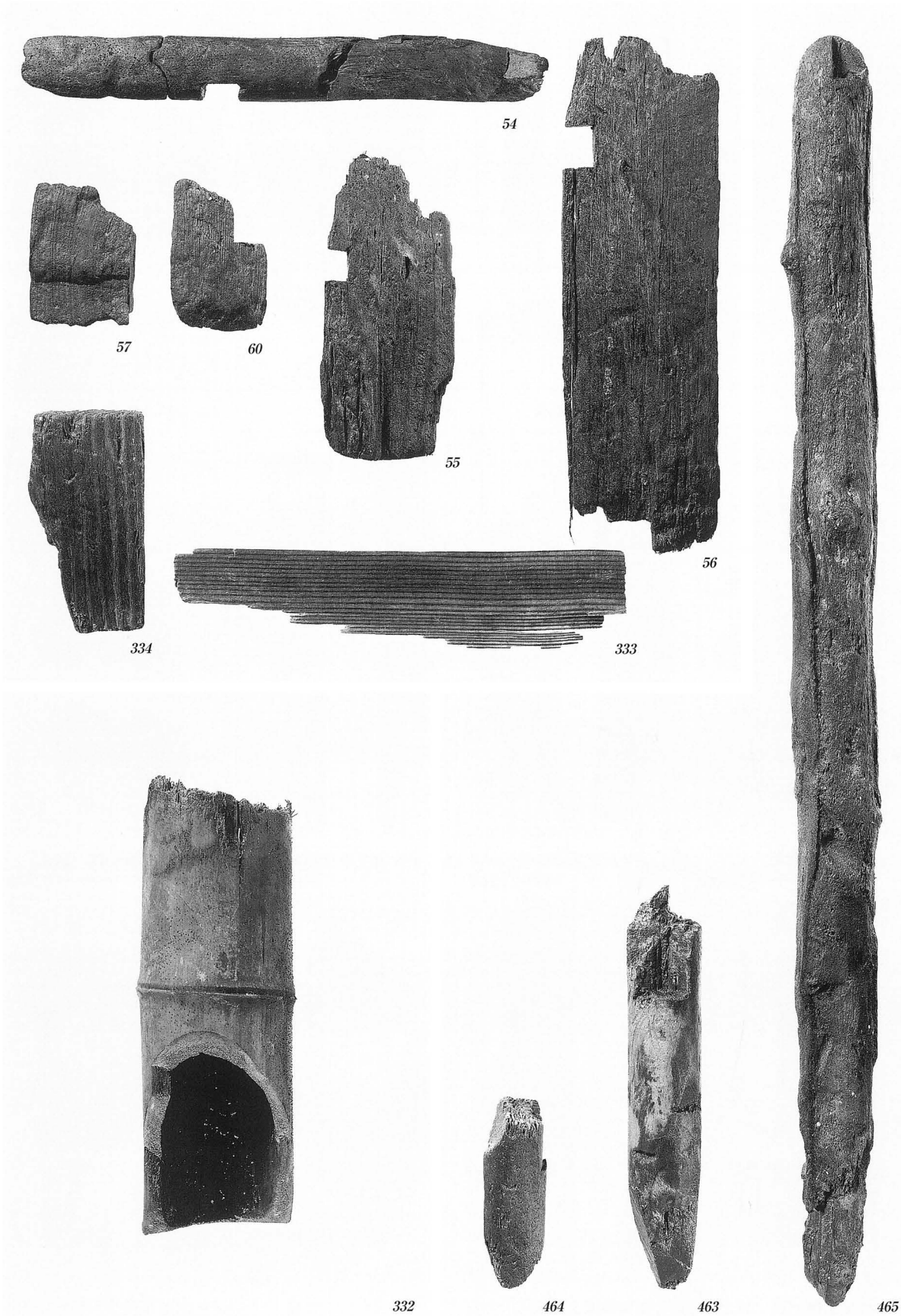
1　３Ｂ区ＳＤ１遺物出土状況（北東より）

2　３Ｂ区東壁土層（南西より）

図版20

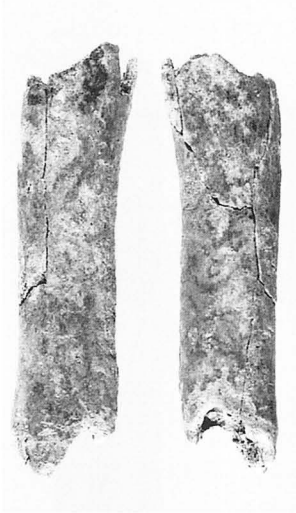


1　ＳＲ１（454・456～458・460～462）包含層（第Ⅱ層：471・472　第Ⅲ層：473・477　第Ⅶ層：485・487～489）地点不明（491・495・497・501・502）出土遺物



1　道後湯月町遺跡：池址１（54～57・60）ＳＫ１（332～334）道後湯之町遺跡：ＳＲ１（463～465）出土遺物

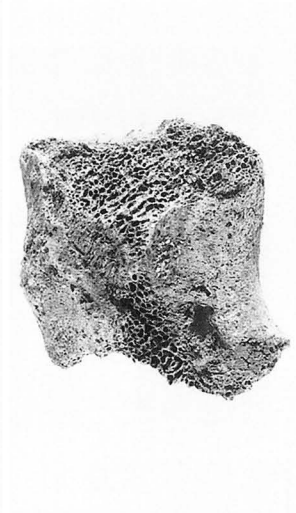
図版22



1　イヌ不明　1.0cm

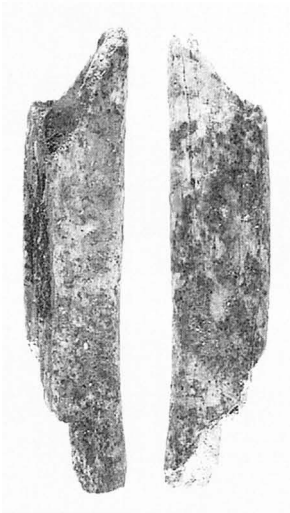
2　イヌ類似上腕骨　1.0cm

3　イヌ類似寛骨　1.0cm



4　ウマ上腕骨　1.0cm

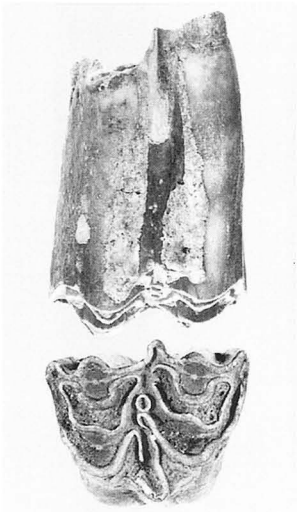
7　イノシシ距骨　1.0cm



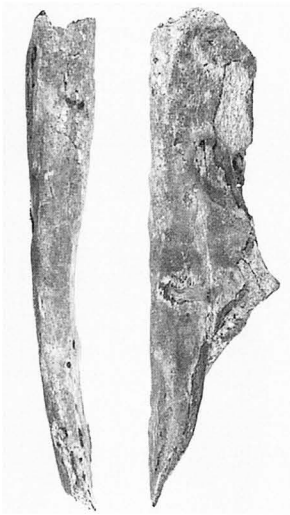
5　イノシシ又はニホンジカ橈骨　1.0cm

6　ニホンジカ中足骨　1.0cm

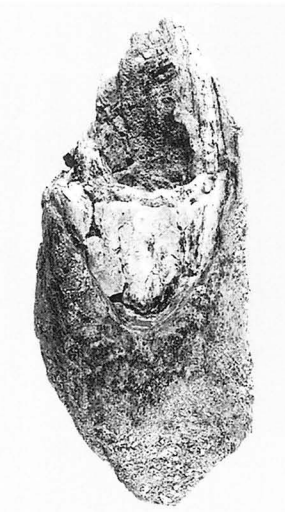
8　ウシ上顎臼歯（M１）　1.0cm



9　ウシ上顎臼歯（M２）　1.0cm



6　ウシ類似上顎骨　1.0cm



7　ウマ又はウシ橈骨　1.0cm

8　ウマ又はウシ橈骨　1.0cm

1　道後湯月町遺跡の動物遺存体

報告書抄録

ふりがな	どうごゆづきまちいせき　どうごゆのまちいせき
書名	道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡
副書名	市道道後42・43号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第123集
編著者名	宮内慎一・相原秀仁・大西朋子
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790－0003　松山市三番町6丁目6－1　TEL（089）948－6605 埋　文：〒791－8032　松山市南斎院町乙67－6　TEL（089）923－6363
発行年月日	西暦　2008年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
どうごゆづきまちいせき 道後湯月町遺跡	どうごゆづきまち 道後湯月町 甲1656－1外	38201		33°50′55″	132°47′21″	20050202 ～ 20050331	177.20	道路改良工事
どうごゆのまちいせき 道後湯之町遺跡	どうごゆのまち 道後湯之町 875－9外	38201		33°50′48″	132°47′19″	20050601 ～ 20050729	193.70	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道後湯月町遺跡	集落	古代 中世	池址 土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦・石器・木器・古銭・動物遺存体	平安～室町時代の池址の検出
道後湯之町遺跡	集落	古墳 中世	溝 土坑 流路 溝	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦・石器・木器	鎌倉～室町時代の集落遺構の検出

要約	道後湯月町遺跡では、平安時代から室町時代にかけての池址を検出した。池址は石積みによる池垣を伴ったものであり、池址内からは土器や石が大量に出土した。完形品や破損品が集中して出土した場所が数箇所あり、その状況から池址に伴う祭祀がおこなわれた可能性がある。道後湯之町遺跡からは、古墳時代の土坑と溝や中世の溝や自然流路を検出した。湯築城に関連する遺構は未検出であるが、今回の調査結果は、道後地区における湯築城築城以前の状況を知るうえで好資料となるものである。

松山市文化財調査報告書 第123集
市道道後42・43号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

道後湯月町遺跡
道後湯之町遺跡

平成20年3月31日　発行

編集・発行　財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町6丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷　株式会社明朗社
〒791-2112　伊予郡砥部町重光150番地1
TEL (089) 958-6868